

第1編 よもやまばなしの生まれ故郷

「東大和のよもやまばなし」には、表題で101話が採録されています。多くが江戸時代以降の話題ですが、その生まれ故郷は、江戸日本橋より八里（都心から35キロ）、北側に狭山丘陵を抱き、その南に広がる武蔵野台地に営まれた素朴な村です。

面積は13.54平方キロ、狭山丘陵が約三分の一を占めます。東大和市内の狭山丘陵で最高の高さは159㍎、台地の最も低いところは82.5㍎です。ここに、よもやまばなしは成立しました。91 鹿島さまの要石（200）は、最も古く、海の時代を伝承し、84 狭山丘陵の古狸往生記（184）は昭和46年の話しです。

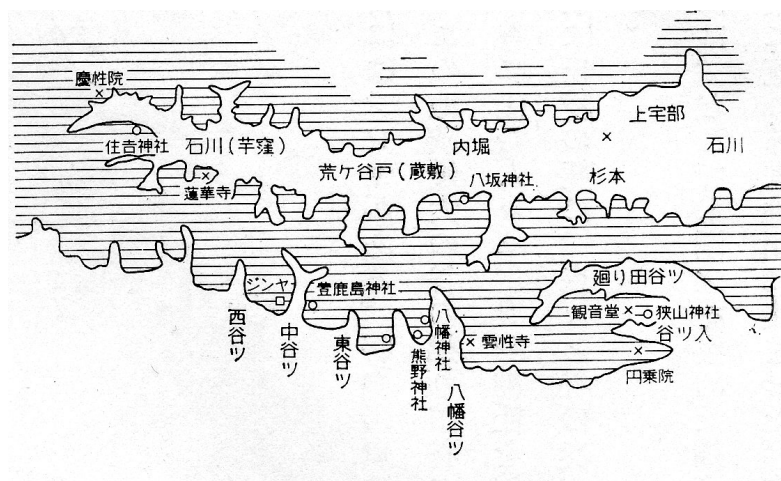
この長い期間と市域全体に広がる話題の背景を資料化するため、第1編を生活の基盤であった村に置き、第2編を歴史の流れの中で捉えるようにまとめました。

第1章 谷ツと原

よもやまばなしの主人公達は狭山丘陵の谷ツを切り開いて定住生活を初め、次第に南面に広がる武蔵野の原を開拓して新田としました。村が町になり市になって現在の東大和市をつくり上げました。

（1）谷ツの自然村

狭山丘陵には浅い、小さな谷が刻まれています。これを谷ツ、谷戸と呼んでいます。下の図は東大和市内の谷ツ、谷戸の位置を表します。この谷ツに、よもやまばなしの主人公の祖先達が生活を始めました。



第2編の歴史の流れの中でまとめますが、東大和市域には旧石器時代（約3万年前）から人の姿が見られるようになります。石器を使って狩りをしたり、けもの皮を縫い合わせたりして生活していました。空堀川の近くにキャンプの跡が見られますが、まだ、まばらです。

縄目のついた土器を使う縄文時代には、丘陵の台地に人の住んだ跡が発見されます。東大和市では中期に、縄文銀座と云われるほどの盛況を呈した後、一時途絶えてしまったようです。次いで、弥生時代、古墳時代を迎えますが、残念ながらその遺跡はいまだ発見されていません。

東大和市域には奈良・平安時代から定住が始まったようです。その基盤は、谷ツの台地も比較的低い位置に築かれました。



廻り田谷（狭山田んぼ旧景・昭和44年ごろ）

上の画像は狭山丘陵でも中ぐらいの谷ツで「廻り田谷ツ」と呼ばれます。画像一番奥に二つ池があり、それを用水として水田が営まれていました。この谷ツの画面右奥に、平安時代末期（800～900年前）の遺跡である「廻り田谷ツ遺跡」が発見されています。地面を掘り下げて掘っ立て柱を組み、煮炊き用のカマドを設けた家が現在のところ、2軒発見されています。歴史の流れの中を参照下さい。

以来、営々と生活の基盤を築き、今日へと歴史を紡いできたことが迫りますが、江戸時代以前は小規模なものであったと思われます。それは谷ツに営まれる「谷戸田」は水温の低い湧き水を利用することから、生産力が低いことと、東大和市域には大きな谷が少ないこともあって、一つの谷ツは、数家族から10家族程度の生活を支えるのがやっとではなかったかと考えられています。

谷ツの生活は厳しかったであろうことが推測されますが、万葉集には微笑ましい姿がうたわれています。

14 - 3375 武蔵野の小岫が雉立ち別れ去にし宵より夫ろに逢はなふよ
（武蔵野の丘の洞に宿る雉が立ち分かるように、慌ただしく別れた宵から、いまだに夫には逢えない、と訴えます。）

14 - 3531 妹をこそあひ見に来しか眉引の横山辺ろの鹿なす思へる
（好きなあの娘に、ようよう会いに来たのに、まるで横山の辺りに棲む鹿が来たかのよう
に追い払われてしまった、と嘆きます。）

14 - 3373 多摩川に曝す手作さらさらに何そこの児のここだ愛しき

20 - 4417 赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ

と有名な歌もありますが、よもやまばなしの主人公達の周囲は、少し違ったようです。

（2）村切り

奈良・平安時代から長い中世を黙々と過ごした谷ツの人々は、時を経るごとに次第に生産力を増して、また、新たな指導者の定着も考えられ、谷ツに生まれた自然村が一定の同族集団的なまとまりを持ってきました。

山口に根拠を置く村山党の後裔である山口氏が勢力を張り、大石氏、後北条氏のもとで中世を過ごしますが、明確な資料は残されていません。天正19年（1591）、徳川家康が関東を支配することになり、東大和市域にも、家康直属の家臣が地頭として配属されてきました。当初は、芋窪村、奈良橋村、高木村、後ヶ谷村、清水村に配属されました。家康の知行割り当てには、村名と村高が

記されています。

地頭は村に住んで、家康から領地を与えられ、収穫高を定めた年貢＝税を集める事を認められました。領主として村の支配をします。この体制が機能するためには、一定の地域と生産高の確定が必要になります。

このために、自然的に発生した集落は「村」にまとめられました。これを村切りと呼んでいます。東大和市域の場合、その様子は下図のように推測されます。生活の基盤は丘陵の中と南麓で、せいぜい地続きの南に広がる原を耕作していた程度と考えられます。南麓に広がる、後に武蔵野と呼ばれた原は原野であったと考えられています。

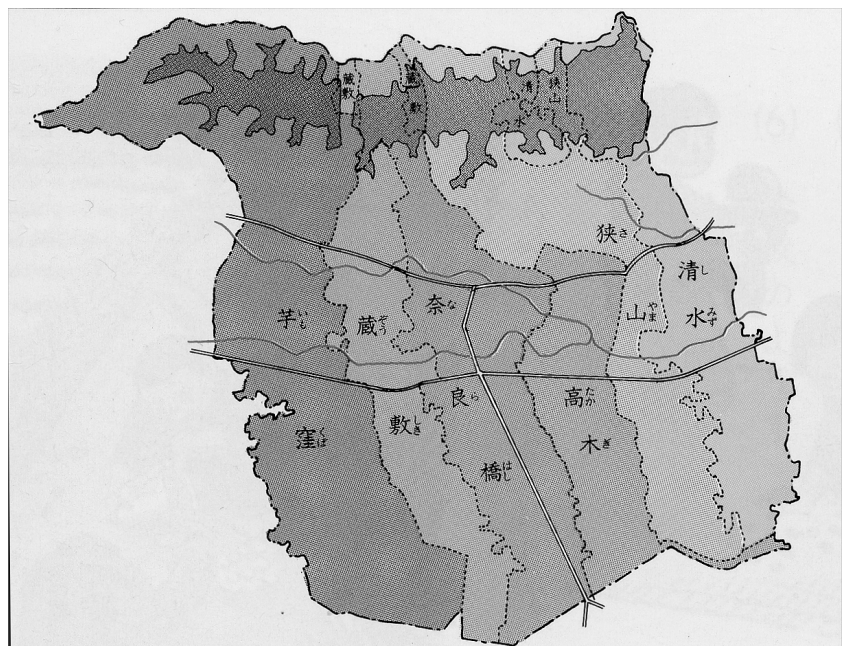


やがて、奈良橋村から蔵敷村が分離独立し、後ヶ谷村から内堀が分離して宅部村になりました。また、清水村は当初、上宅部と清水村に分かれていたと推測されます。高木村は丘陵の中に集落がなかったようです。

(3) 新田開発

江戸幕府による江戸の整備と共に、武蔵野の原に青梅街道が通過（慶長 11 年＝1606）し、玉川上水（承応 2 年＝1653）、野火止用水（承応 4 年＝1655）がひかれました。幕府は曠野である武蔵野の開発を進めます。

よもやまばなしの主人公、あるいは先祖達は新田開発を一举に進め、延宝 2 年（1674）には野火止用水際まで開発し尽くしたようです。この時、ほぼ現在の行政界が定まりました。



新田開発は、谷ツの親村を根拠にして南の原を切り開いた、切添方式のため、上図のような、特

徴のある細長い村が形成されました。この図では「後ヶ谷村」「宅部村」が表記されずに、「狭山村」がありますが、「宅部村」は図の狭山村の貯水池内にありました。明治8年（1875）後ヶ谷村と合併して狭山村になりました。これが「東大和のよもやまばなし」の成立した基盤です。

77「きつねの嫁どり・きつねの嫁入り」（171）では、新堀（野火止用水の際）に狐の嫁入り行列が見られ、80「芸者にばけた狐」（178）では、金作さんが原に開発された畑道で芸者に化けた狐に道案内をされます。

このように、よもやまばなしの話題は貯水池に沈んだ親村の「石川」や「宅部」の地域から新田開発をした野火止用水際の「新堀」まで広範囲に及んでいます。

（４）明治前後の村の様子



明治15年測量迅速図

貯水池ができる前の東大和市域の村々の様子です。狭山丘陵の中の谷が左側から石川、内堀、上宅部となります。中央に大きく曲がり込んで形成される谷ツが「廻田谷ツ」、「谷ツ入り」で、地図では狭山村になっていますが、当時の後ヶ谷村です。現在の東大和市駅は図中央一番下の道路と野火止用水の交差するところにあります。

（５）貯水池の建設・移転

静かな村に暮らしていた「よもやまばなしの主人公」に、貯水池建設による用地買収、移転の問題が襲いかかりました。明治末から大正初年にかけてのことです。

明治末、東京の上水問題が危機状況となりました。大正2年（1913）、村山貯水池建設が決定されて、大正3年から用地測量開始、大正5年（1916）地鎮祭・工事開始となりました。石川、

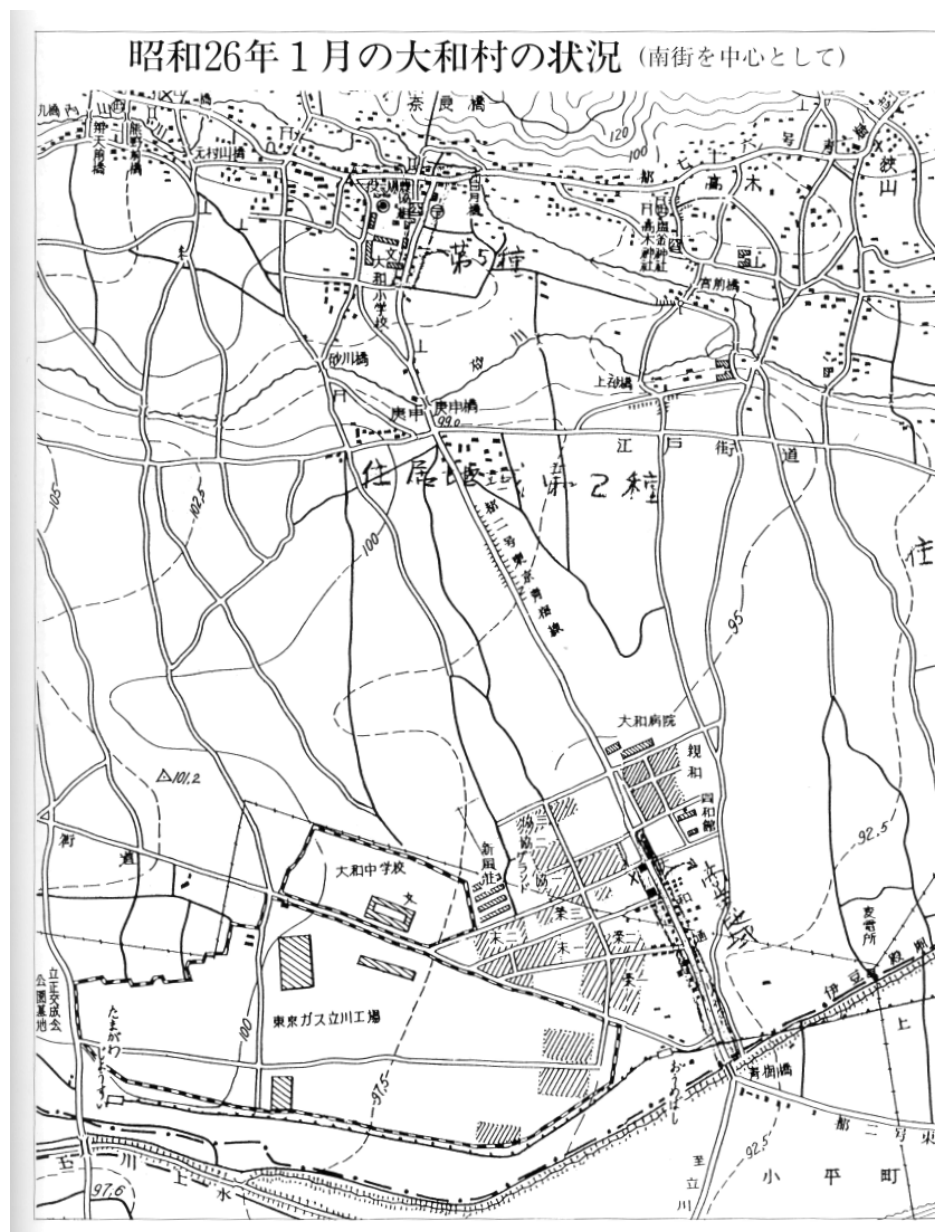
(7) 航空機産業の立地、南街の形成

新田開発による細長い村に、徹底的な変革を迫ったのが航空機産業の立地でした。昭和13年(1938)東京ガス電気工業株式会社(後に日立航空機株式会社と名前を変える)の建設が決まり、それまで一面の畑地であった村の南部に、26万4,000平方メートル(8万坪)の敷地が買収され、工場と社宅が建設されました。

昭和15年(1940)には敷地19万平方メートルの大工場と従業員の住宅が建設されました。細長い村に、「本村」と「南街」と呼ばれる地域分けができました。工場は米軍の空襲により破壊され、終戦を迎えました。軍需工場は新たな産業へと衣替えし、社宅に住む従業員は多くが大和村の住民として定着しました。昭和20年、軍需工場はアメリカ軍の爆撃を受け、破壊されました。

47 南街のブラスバンド(105) 48 賛報会館と映画館(108)
49 日立だんなんと日立乞食(110)

などの話が残されました。

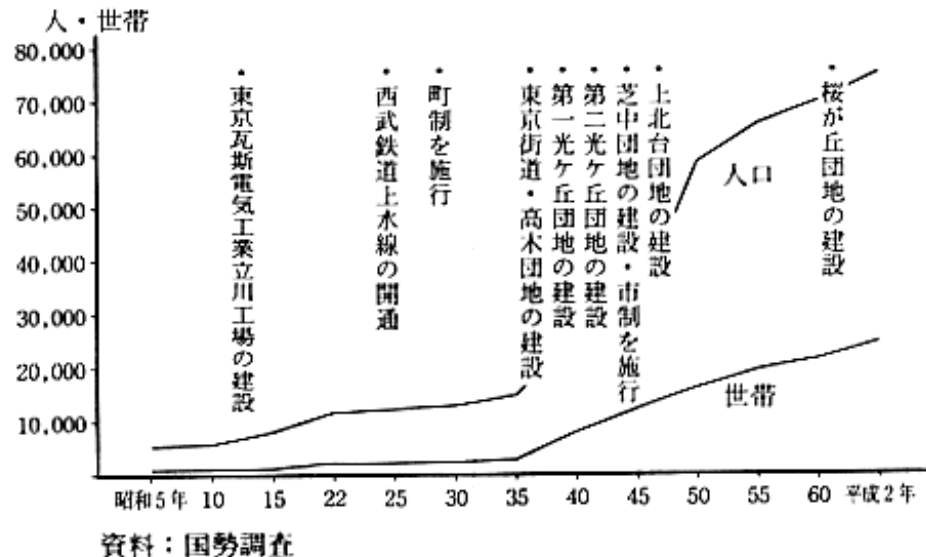


(8) 村から町、町から市へ

戦後の低迷から、復興して市街化が進み、昭和 29 年 5 月、大和村から大和町になりました。

昭和 30 年代になると、東京の膨張発展による集合住宅団地の建設が相次ぎ、細長い村は一面に住宅で埋まる「近郊住宅地」となる母体となりました。集団住宅は下図のように相次いで建設されました。

●人口と世帯の推移（各年10.1 現在）



昭和 45 年（1970）10 月、大和町から東大和市となりました。丘陵の谷ツも武蔵野の原も住宅地に変わりました。

84 狭山丘陵の古狸往生記（184） 99 土の中から出た表忠碑（216）

などの話が残されました。

第2章「新編武蔵風土記稿」、「武蔵名勝図絵」、「狭山之栞」 に描かれた村の姿と「よもやまばなし」

「東大和のよもやまばなし」には、現在のまちの姿と異なった時代が話題が含まれています。その時代の村の姿の再現のため、「新編武蔵風土記稿」、「武蔵名勝図絵」（江戸時代末）、「狭山之栞」（明治初年）に記載されている村の状況を紹介し、また、現在の東大和市の人口は8万人を超えていますが、当時の戸数と人口は下表の通りで、人が自然や動物と密接な関係を持った生活が営まれていました。

村の戸数

	風 土 記 稿	安 政 2 年 書 上	男	女	狭 山 の 栞
芋久保村	1 4 0	?	?	?	1 5 7
蔵 舗 村	5 5	5 5	1 3 1	1 4 3	5 9
奈良橋村	5 8	5 9	1 5 8	1 5 3	5 9
高 木 村	5 2	5 6	1 6 2	1 6 6	5 6
後ヶ谷村	4 5	4 8	1 2 9	1 2 6	4 9
宅 部 村	4 2	4 0	1 0 6	9 7	4 2
内 堀					1 2
清 水 村	5 2	6 0	1 4 6	1 5 4	6 0

新編武蔵風土記稿（文政11年＝1828）

内野家文書 安政2年書上（1855）

狭山の栞（明治14～15＝1881～1882）

各村に掲げる戸数は「狭山之栞」の数値を使用します。

（1）清水村（戸数60軒）

21 厄神さま（45）、 22 辻しょうげ（47） 43 野外映画（97） 52 出ば出ろ（115）
32 三光院の鐘（70）
42 多摩湖の花火（95） 46 楽隊（明治時代）（102） 60 清水囃子のけいこ（133） 79 娘っこに化けた狐（176） 81 きつねの恩返し（179）

新編武蔵風土記稿

○清水村附持添新田 清水村は、郡の北 入間郡の界にあり、開闢の年代及村名の起る所を知らず、江戸日本橋より行程八里許、東は廻り田村に隣り、南は小川村及び高木新田に接し、西より北へかかりて後ヶ谷村につづき、狭山の峰を境として入間郡町屋村に連れり、

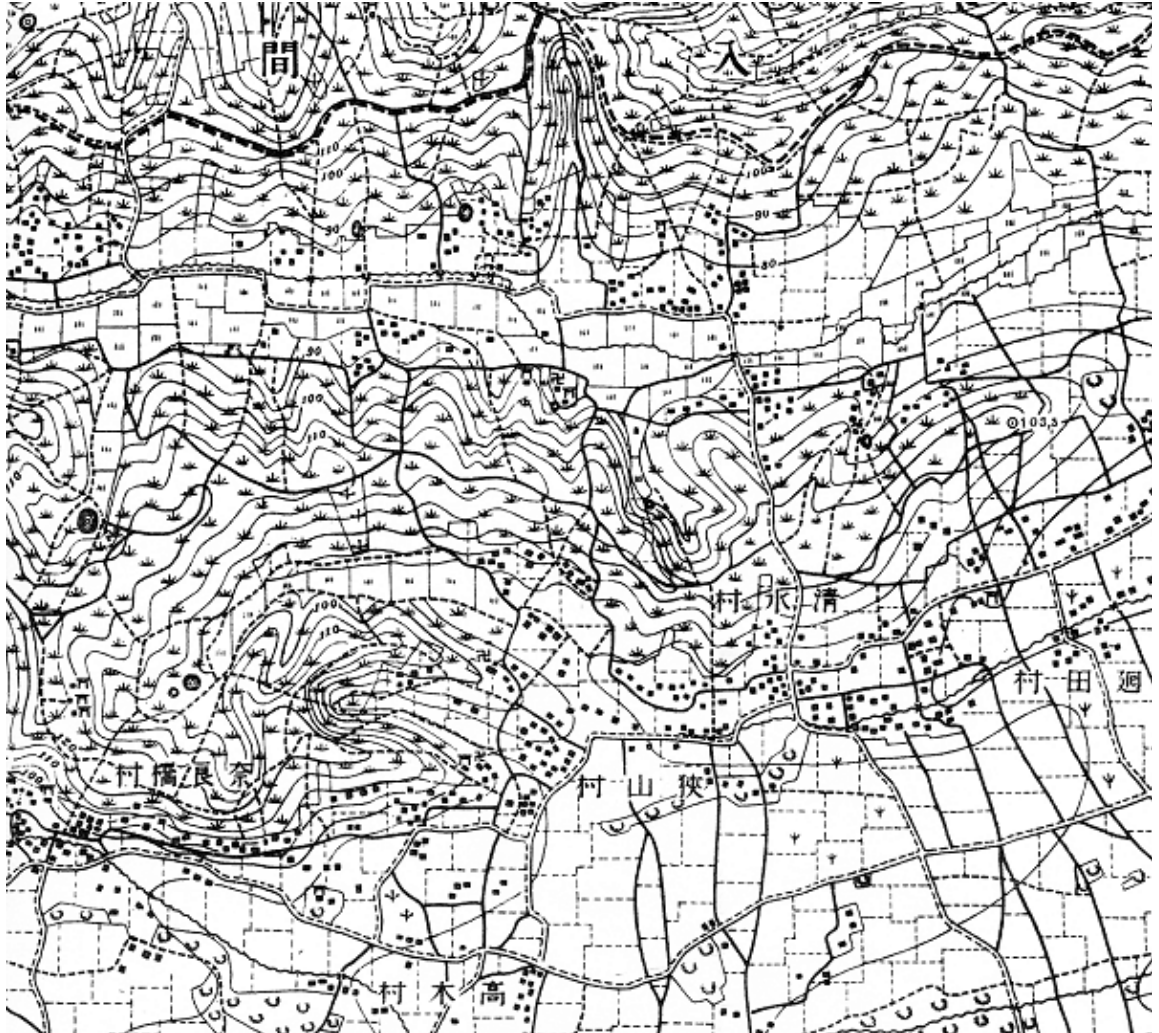
村内を東西する街道あり、西方 後ヶ谷村より狭山の根通りへかかり箱根崎へ出る通路にて、東廻り田村に入れり、道幅凡二間、村の大抵東西凡十町、南北二十五町許、北の方は狭山を負ひて根通りに民家あり、前は田圃なり、又山ありてこのふもとにも民家連り、東南は武蔵野新田にして平夷の地なり、戸数は五十二軒、所々に散在せり、

田は少く畑は多し、土症は黒土なれば宜からず、南の方武蔵野附はことに土症悪くして、専ら糞培の力をたのめり、用水は村内わずかの溜井、及外にわづかの流あるを以てたすけとせり、されどもと天水の場なれば、早損の患ありて水災はなし、

男女耕作をなせる暇には、男は薪をとり女は蚕養のことを務めり、この辺往々かくの如し、村内

尾張殿鷹場に属して、右の役をつとめり、

寛文九年岡上次郎兵衛・近山五左衛門・今井九右衛門等命を奉して検地をなせり、私領と云へるは浅井楯之助采邑にして、古新田の分は御料にして、そこは大岡源右衛門御代官所なれども、此の分には民戸なく、則この本村の持添なり、



明治15年測量迅速図

高礼場 むらの中央名主の前に在

小名 的場（村の^{ひつじさる} 坤 = 南西にあり）、元木（^{たつみ} 巽 = 南東の方にあり）
峰久保（北の方狭山の根通りにあり）、峰の前（峰久保の西、狭山の根通りにあり）

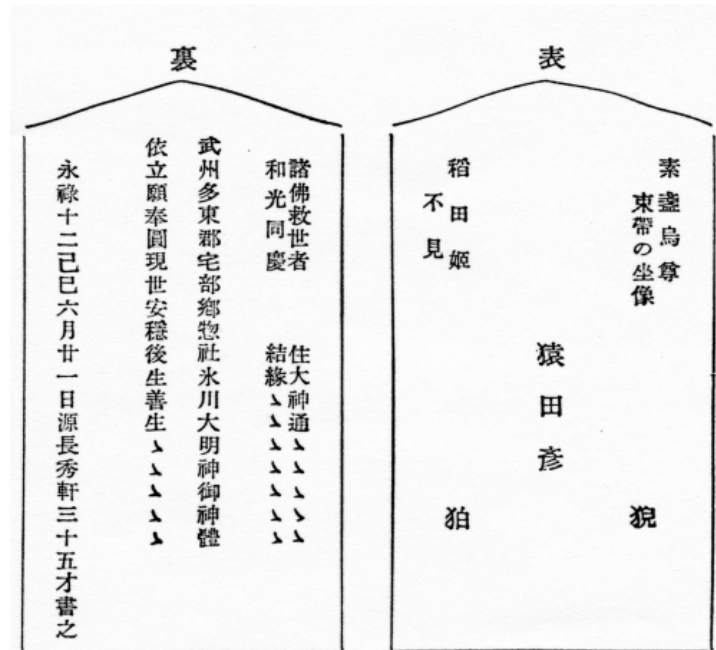
山川 狭山 当村の北 多摩・入間両郡の界にあり、東 久米川村より西 箱根に及ぶ、高さ凡二十町許、近隣の村々に係れり、（=狭山丘陵）

悪水堀三流 一は村の西、中藤村より涌出し、中央より南により東流して、廻り田村に入れり、村内にかかること凡そ十町、川幅二間より三間に及べり、一は西 後ヶ谷村より涌出し、村の中央を通じ、これも東流して廻り田村に沃けり、村内を経ること十町許、川幅凡二間、一は北方を通ぜり、西 芋久保村より涌出し、村を過ぎること十町許、東方 廻り田村に至れり、川幅二間許、（=空堀川、前川、石川）

神社 氷川社 社地、村の北の方 狭山の根通りに在、本社 六尺に五尺、上屋三間に二間半、拝

殿五間に二間、共に丑^{うし}の方に向ふ、神体とするもの絵馬の如にして、表は素盞烏尊、稲田姫、猿田彦、左右に貌^{ぼう}を彩色にて写したれども、剥落してかすかに残れり、永禄十二年（1569）の裏書あり、圖下に載す、

この外本地佛正観音木の座像、長一尺五寸許たるを安す、御朱印五石は、天正十九年十一月日御寄付あり、例祭は六月十五日なり、供物台三つあり、形は腰高茶台^{てんきよう}の如くにして、斧にて削りし如く、至て古く見ゆ、祭のせつこれを以て奠^{てん}供せり、本社^{てんきよう}の右杉の大樹二株並べり、囲み一丈五尺 一は一丈二尺、石階上下あり、上は二十四級、下は九級、此邊の鎮守にて、別当は本山修験、本郡府中宿門前坊の配下にて、村内圓達院持、



熊野社 除地百坪許、村の中央成就院^{ひつじきる}の境内後^{うしろ}にあり、この辺の鎮守なり、本社三尺四方、上屋九尺四方、拝殿二間に九尺、共に^{ひつじきる} 坤（南西）に向ふ、神体白幣、本地佛は観音にて、木の立像長一尺五寸たるを安す、前に鳥居を立、例祭は九月十九日を以てせり、社地には松杉雑樹ありて繁茂す、村内成就院の持なり、

寺院 三光院 境内は御朱印地の内なり、村の北^{しんしん}にあり、真義真言宗、同郡青梅村金剛寺の末、輪王山真福寺と号す、開山は圓長と云、天永三壬辰（みずのえたつ＝1112）五月三日寂す、法流開山を寂如と云、享保二十一年丙辰（ひのえたつ＝1736）閏月十一日寂せり、本堂十間に五間東向、本尊彌陀を安す、木の坐像、長一尺、御朱印三石は天正十九年^{しんぽう}辛卯（かのとう）十一月〇日御寄付あり、

門 本堂の正面に建つ、

裏門 長屋作りにて七間に二間、表門と相並べり鐘楼門の外向て左の方にあり、九尺四方、鐘は近來鑄成するものゆへ、序銘を略す、（＝移転して、現三光院）

地藏堂 門の左右の方にあり、六尺四方、

古碑一基 本堂の前南よりにあり、長二尺幅一尺許、中央に南無阿弥陀仏とあり、左右に応安二年己酉（つちのと とり＝1369）正月と刻し、下に日阿禪門とあり、

成就院 除地二段許、村の中央にあり、真義真言宗、豊島郡石神井村三宝寺の末、清水山安養寺と号す、開山開基詳ならず、本堂七軒に五間南向、彌陀長一尺なる木の坐像を安す、境内熊野社地に接し、松杉雑樹繁茂なせり、

大日堂 除地二段、村の中央にして北よりなり、堂二間に二間半南向、大日は石の座像長二尺一寸許、此堂は里正清左衛門が先祖建立せし由を云へど、其年代は詳ならず、堂の傍に里正代々の墳墓あり、

観音堂 見捨地一畝、村の中央道の傍にあり、二間四方南向き、正観音木の立像二尺一寸許なるを安す、村民持、

◎この他に「狭山之栞」では次の神祠と堂を伝えます。

神祠（清水村に八幡、神明、上宅部に山王、荒神、稻荷、山神、板碑を祀った石神）

石神はよもやまばなし 93 石神の話（204）に記されています。

阿弥陀堂（上宅部中堂） 三光院墓地に移りました。

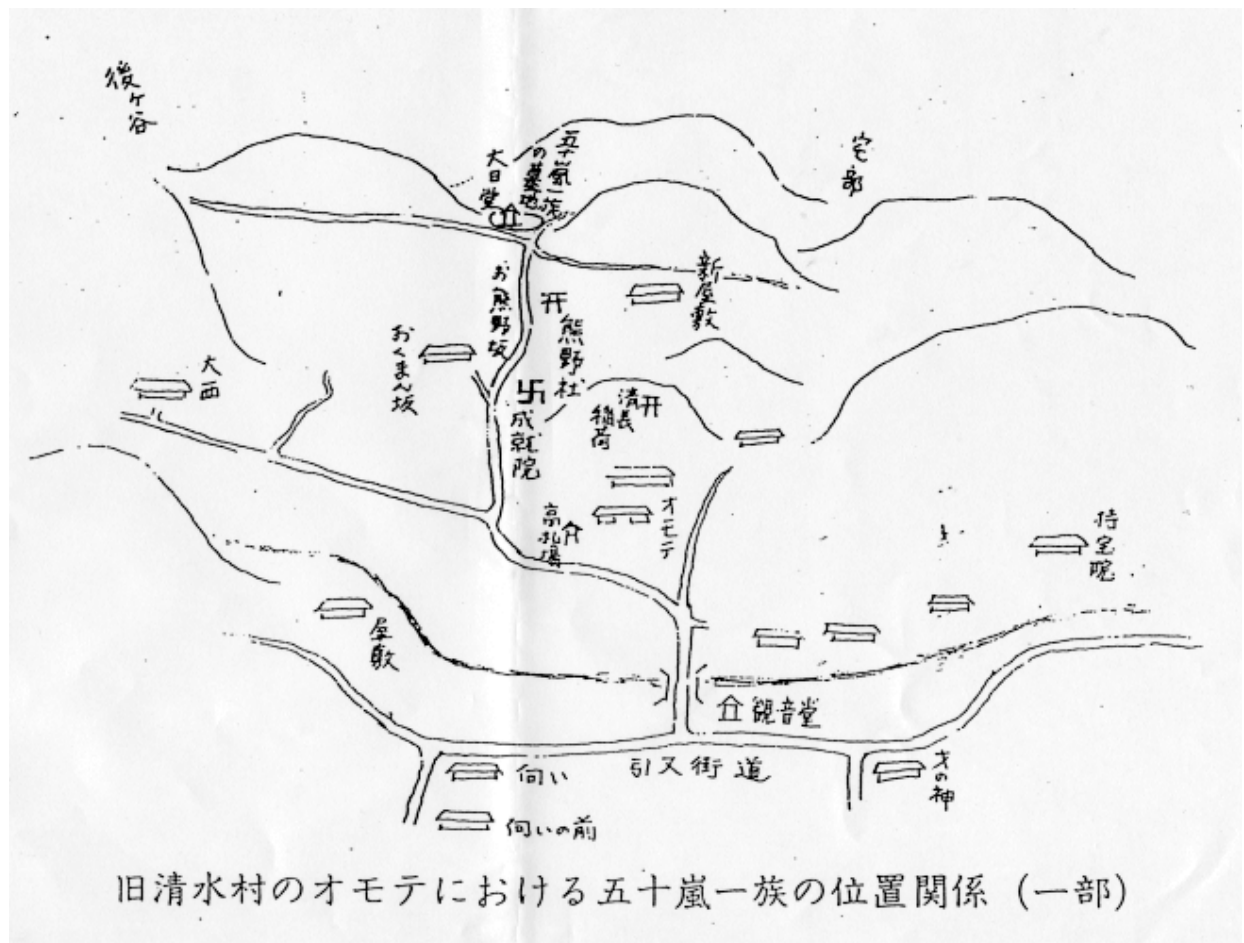
塔頭堂（上宅部）

☆☆☆☆☆☆☆☆

◎清水村と上宅部

村名の由来を「狭山之栞」は「此地は狭山が池の清水流れゆく地に当たるや、古時よりかくは号す。」としています。また、同書は、「古は宅部清水ニカ村なるべし。地頭所年貢割付之表に近年迄宅部清水村両村可納割付之事と記しあり」として、宅部郷清水村と宅部郷清水村之内上宅部と地域を書き分けています。清水村戸数 60 軒、上宅部戸数 27 軒としています。他の資料から、上宅部戸数 27 軒は清水村戸数 60 軒に含まれているものと思われます。

清水村に成就院、金剛庵大日堂、観音堂、下の大日堂、持寶院、熊野神祠を含めていますから、現在の周囲道路で清水村と上宅部の範囲を区別していたことがわかります。



五十嵐民平氏の「五十嵐考」（昭和 55 年 3 月刊）に記載されている「五十嵐一族の位置関係」の

図は当時の状況を良く伝えています。

◎「氷川神社」

52「出ば出ろ」(115)

よもやまばなし「出ば出ろ」に、氷川神社の別当をつとめる修験の円達院が登場します。神官ではない人が神社の管理をしている事に疑問を抱かれますが、当時は普通でした。修験については別の項にまとめます。

氷川神社は多摩湖（村山貯水池）の取水塔の近くにありました。創建について、健保2年（1214）、祭神 素戔鳴尊・大己貴尊・稲田姫命とする説があります。

「狭山之栞」には、「古時は、宅部、清水、内堀、日向、境、廻り田、後ヶ谷戸七村の惣鎮守なりしと云い伝ふ」としていて、現在の東村山市域の一部が信仰圏に入っていたことが伝えられます。また、毎年6月15日が祭日で、「小麦の牡丹餅に麦焦しをまぶしたるを供す」としています。

現在、氷川神社、熊野神社は元の位置ではなく、貯水池建設に伴って、大正に入ってから、丘陵から原に移り、氷川神社と熊野神社を合祀して社名を清水神社としました。

◎三光院

32 三光院の鐘（70） 79 娘っこに化けた狐（176） 81 きつねの恩返し（179）

よもやまばなしには、上記の話が出てきます。「三光院の鐘」の初代は永禄3年（1560）という年号を刻んでいて、貴重な中世資料です。第2編歴史の流れの中にまとめます。「きつねの恩返し」は三光院が火災で焼けたことを伝えます。

◎大日堂

52「出ば出ろ」(115)

修験の円達院がよそから宅部に帰って来るとき、もののけの気配を感じるところです。清水村には、大日堂が貯水池の中（上宅部）と丘陵の南麓（清水）にありました。「狭山之栞」では、これを「金剛庵大日堂」と「下の大日堂」としています。「出ば出ろ」は貯水池に沈んだ上宅部の「金剛庵大日堂」が舞台です。「狭山之栞」では

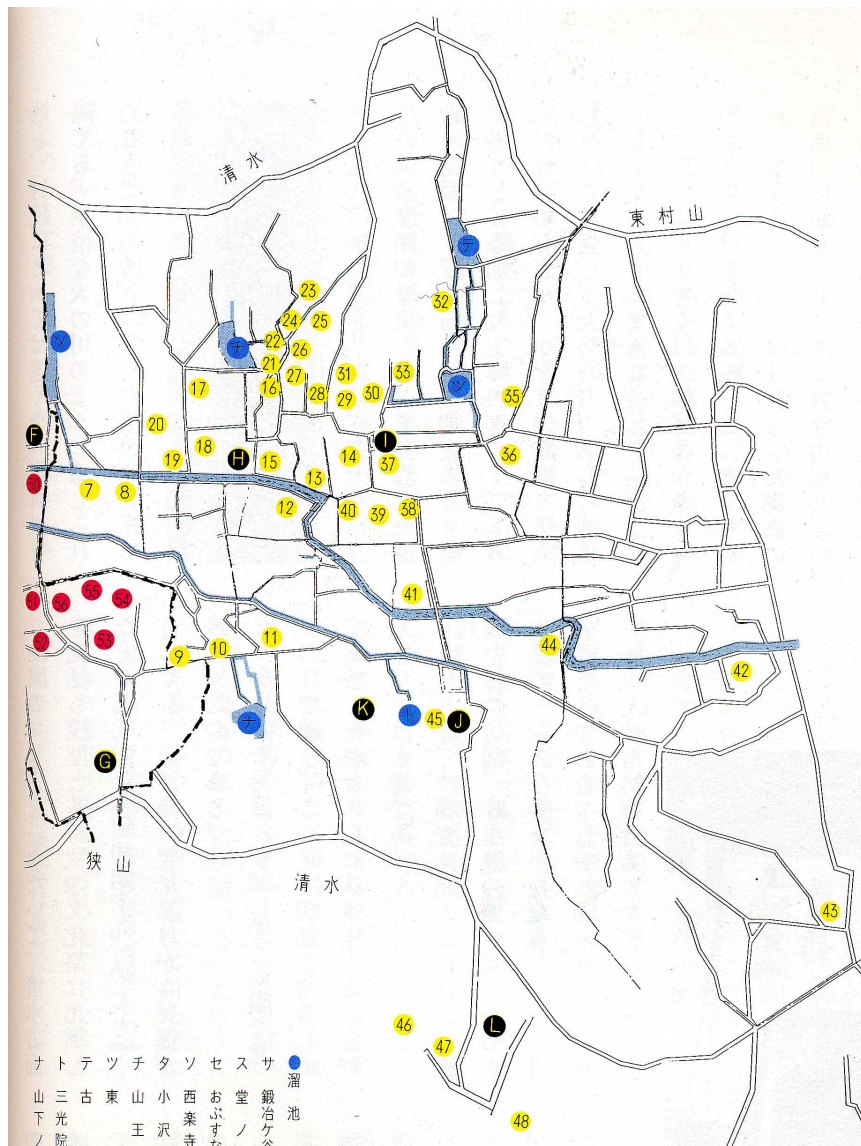
『金剛庵大日堂は狭山^{みね}岑にあり。本尊金剛界石仏極彩色の大日如来は長一尺五寸。本堂二間四面、飛騨国甚五郎の作也。・・・五十嵐一家の墓所あり。・・・』

『下の大日堂は原口にあり。本尊石佛は胎藏界の大日如来にして惣丈五尺。前記大日堂の金剛界に封し是は胎藏界の大日と称す。銘に正徳二年壬辰三月大清山本山修験持寶院とあり。境内村民及び大久保家の墓あり。』

としています。新編武蔵風土記稿に記載されている大日堂は金剛庵大日堂になります。下の大日堂はかつての場所にそのまま継続して建てられています。現在三光院の管理になっていますが、以前は、三光院、円乗院（以上東大和市）と正福寺（東村山市）の3寺の共同管理でありました。当時の信仰圏がこの3寺の区域にわたっていたことを物語ります。五十嵐民平氏の図で、右下「才の神」の書き込みのある付近に当たります。



金剛庵大日堂は、大正に入ってから、貯水池建設に伴って三光院墓地内に移りました。二つの大日如来の石像は、左が「金剛庵大日堂」の金剛界大日如来像で、右が「下の大日堂」の胎藏界大日如来像です。二つの像から、狭山丘陵の嶺を挟んで金剛界と胎藏界の大日如来を祀る信仰があったことが偲べます。



◎よもやまばなし 52「出ば出ろ」(115)では、氷川神社の別当をつとめる修験の円達院が氷川神社～大日堂～熊野神社への道を通ります。貯水池の中(上宅部)と大日堂～熊野神社～武蔵野の原に通ずる道です。

◎よもやまばなし「出ば出ろ」は神仏習合により、神社と寺院が一緒に祀られ、別当に修験が携わっている様子が描かれる貴重な話です。

氷川神社、三光院、大日堂などは、貯水池建設により移転をして、元の姿が残されていません。やむなく、位置関係を図示しておきます。(東大和市史資料編2 p 60)

観音堂

「狭山之栞」は『橋場にあり。草創開基不詳。本尊聖観世音菩薩は行基の作にして長一尺五寸の立像。狭山十五番の霊場、杉崎氏の持也』としています。

個人持ちの観音堂は、やがて、村の人々が管理運営をするようになりました。巡礼の道筋は、東村山方面から東大和に入るところが第一番で、次は貯水池に沈んだ三光院観音堂←→狭山霊性庵←→雲性寺観音堂←→芋窪林堂へと順路が決まっていました。



昭和47年(1972)当時 東大和市史資料編9 p138

そのルートを現在の道でたどっても、いかにも江戸時代的な様相が偲ばれます。いろいろな話題が採録できそうです。昭和40年代まで画像のような姿でありました。

◎厄神さま・22 辻しょうげ

21 厄神さま (45)、22 辻しょうげ (47)

よもやまばなしは、清水地域(上宅部)の話として、21 厄神さま(45)、22 辻しょうげ(47)を伝えます。これは、三方の辻・三叉路に御幣を祀る神として、境界、辻の神を祀る風習を語るもので、貴重な証言です。



町名地番整理前の清水・狭山の略図で地域名（小字）がわかります。
 （東大和市史資料編9 p 45）

(2) 後ヶ谷村 (戸数 49 軒)

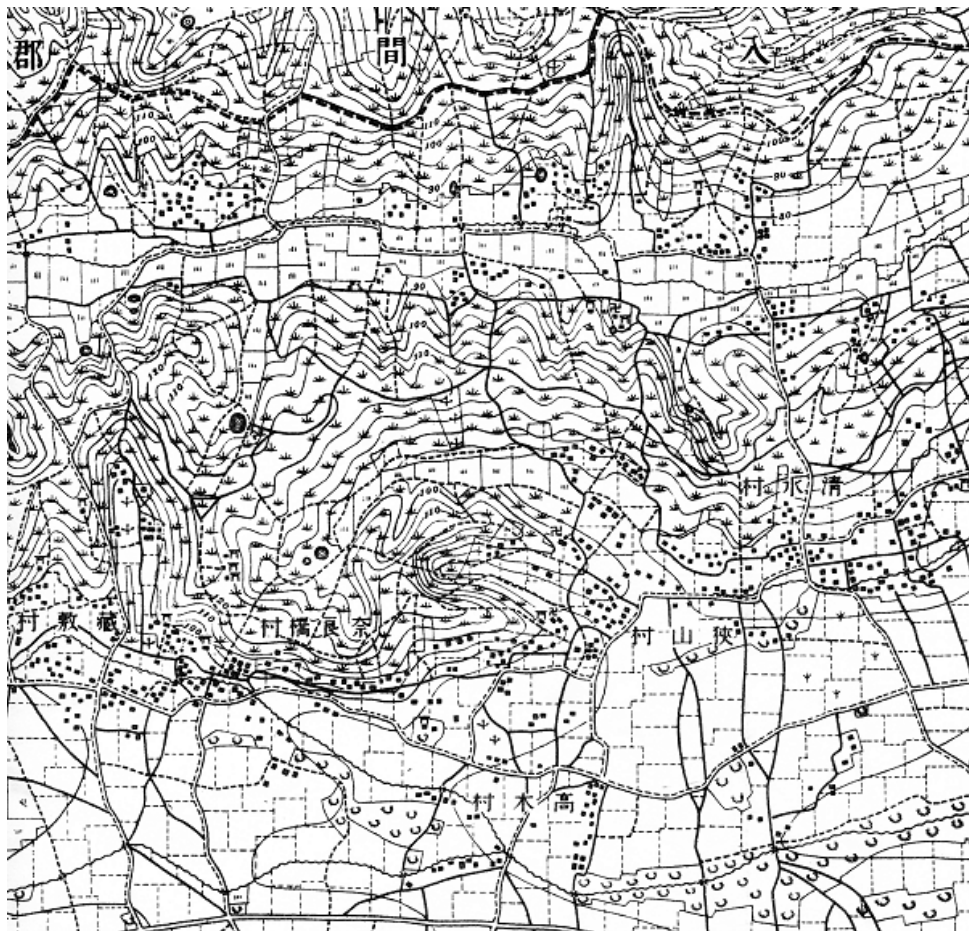
20 愛染様 (43) 98 力石 (213) 35 昔の学校と子供たち (78) 38 ザンザラ (87)
59 村の運動会 (130) 74 しし穴の話 (165)

○後ヶ谷村は宅部郷に属せり、東は清水村に隣り、南は小川村・高木新田に限り、西は奈良橋に境ひ、北は狭山の峰を境として、入間郡菩提木・新堀の二村に接す、東西へ凡十町、南北へ三十町許、地形は平かにして、北の方に狭山を負ひ、又中央より北によりては、西より差し出たる少しの山あり、

水田は北方の山根に少しく開きたれど、わずかに此地の溪水を引て用水となせば、水災はなく、ややもすれば早損の患あり、陸田は多くして村落をなせる平地の所に開けり、此は野土なり、概していわば、土性は真土多く、民戸天正の頃は十二軒ありしが、後稍く（ようやく）増加して今は四十五軒となれり、いずれも山に傍て散住せり、

耕作の暇には薪を伐りて江戸へおくり、傍ら養蚕のこともなせり、村内尾張殿の鷹場にして、村民其役を勤めり、

検地は寛文九年岡上次郎兵衛・近山五左衛門司どれり、又延寶二年（1674）は彼の二人に今井九右衛門加りて司どれり、元禄三年（1690）は細井九右衛門奉りて検地をなせしことあり、天正の頃は逸見四郎左衛門が知行せしよし、故ありて上地となり、天和三年（1683）の頃より御料となれり、御代官の遷替は詳ならず、今は小野田三郎右衛門支配せり、



明治15年（1882）測量迅速図

高札場 村の中央にあり

小名 南谷戸（村の南を云）宅部（北方なり）内堀（西北を云）杉元（中央なり）

山川 狭山 村の北通り多摩・入間両郡の界にあり、上り大抵二十三町、箱根ヶ崎村より久米川村、及入間郡辺まで三里、村山郷に属せし村々、この山の根通りにかかれる、猶総説狭山の条に出せり、

石川 村の北の方を流る、

狭山池 村の北の方字小澤の溜池なり、水田の南方山合に三十間許なる堤を設けて、用水を備ふ、又此池の上に古池と云あり、これも溜池の如くなり、もとは一つなりしが、水災のとき地形沿革して、此の如くなりしものにや、歌にも詠み名高き所なり、箱根ヶ崎村合はせみるべし、

水利 溜め池五ヶ所

神社 稲荷社 見捨地、七八間四方、わづかなる祠なり、

山神社 除地、五段一畝六歩、南畑中にあり、纒（わづか）なる祠なり、村内圓乗院の持なり、

神明社 字南分と云所にあり、これもわづかなる祠なり、傍にひらきの古木あり、囲み七尺許、其外にも古木多く見えたれば、古社なるべし、もとより鎮座の初め年代は失へり、

天狗社 これも同じ辺にあり、纒（わづか）なる祠にて、上屋は六尺四方、前に鳥居を立り、これも鎮座の初めを伝へず、

御領明神社 除地、六畝二十歩、小名内堀にあり、この辺を宮の下山根と云ふ、二間に三間の上屋を造りて、内にわづかなる宮をおけるなり、

末社 愛宕社 わづかなる祠にて、後の方にあり、

寺院 圓乗院 除地 七畝二十六歩、是も字南分と云ふ所にあり、新義真言宗、豊嶋郡石神井村三寶寺末なり、愛宕山東圓坊と號す、開山は賢普法印と云、平治元年（1159）二月八日寂せり、本堂七間に六間半南向、本尊木の坐像二尺五寸許、又薬師の像八寸許なるを安置す、恵心の作なるよしをいへど、秘してみることをゆるさずと云、

鐘楼、本堂の正面に建つ、二間に三間、鐘は圓径二尺二寸、このかね寛延二年（1749）十月住持乗譽の代に鑄成したれば、銘文に載せず、

愛宕祠 境内の鎮守にて、本堂の後にあり、小祠、下田七畝二十六歩の除地となせり

宝珠庵 字杉本にあり、里正勘右衛門代々の墳墓あり、其守りに造立せる庵なるよし、庵は二間半に四間半あり、本尊地藏を安せり、木の立像にし て長五尺許の古の作なりと云へり、

観音堂 字南分にあり、二間半に五間、南向、如意輪の座像木にて作る、丈八寸許り、

古碑 一基 長二尺余、貞治七戊申（つちのえさる^{ぼしん}＝ 1368）四月十九日とあり、

旧跡 陣屋跡 字杉本にあり、古へ逸見四郎左衛門住 居せし所なりしよし、今は百姓九右衛門が住居となれり、

蔵屋舗跡 これも字杉本にあり、陣屋跡のもよりにあれども、逸見某の蔵屋舗と云にも非ず、ここ

の名主勘左衛門は、旧家にて其地につづきたれば、往古其家の蔵屋舗ありし跡なるべしと云えども定かならず、此所に杉の大木ありて蔵王の小祠を建つ、

旧家 百姓勘左衛門 もとは氏を石井といいしが、いつの比よりか改めて杉本と称せり、遠祖は春日丸と云、その二十五代の孫を石井勘解由といへり、この人大阪御陣の時、地頭逸見四郎左衛門と共に其役に出、それより今日に至て三十六代此地に住し、代々名主役を勤めたり、旧家にて家系も蔵したれど、秘して見することをゆるさず、

◎この他に「狭山之栞」は
前野稻荷 神祠（諏訪、八幡）
をあげています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

◎後ヶ谷村

「狭山之栞」は狭山村を次のように分けます。

旧後ヶ谷村	戸数 49 軒
旧宅部村	戸数 42 軒
狭山村之内宅部	戸数 12 軒
狭山村之内宅部郷内堀	戸数 28 軒

後に、この 4 地域が合併して「狭山村」を構成しています。「狭山之栞」が書かれた江戸時代末から明治初年にかけては、実生活上このように区分けされていたことが理解されますが、現在の地図に置き直す事がまだ出来ていません。

理由は 4 地域を単純に合計すると 131 軒になります。新編武蔵風土記稿（1828）87 軒、安政 2 年書き上げ（1855）87 軒と約 30 年間、ほとんど軒数に変化がありません。ところが「狭山之栞」（1882）で、単純計算すると、131 軒と急速に増加することになります。これは、単純に加算することが間違いで、重複が考えられます。推測すれば、旧宅部村の内書きが狭山村之内宅部、狭山村之内宅部郷内堀とも考えられます。

「狭山之栞」は狭山村之内宅部郷内堀を「旧後ヶ谷村の枝郷」として、慶長 2 年（1597）3 月、溝口佐左衛門の采地とし、元文 3 年（1738）6 月、逸見氏が上地をし、この時、宅部村としたとします。

狭山村之内宅部には屯倉があり、「往古、^{みやけべ}「屯倉部」と云ひしが、何時の頃よりか^{やけべ}「宅部」と呼ぶに至る。」として、宅部は「旧地頭逸見氏の蔵屋敷なりと云えど然らず」としています。

明治 8 年（1875）6 月 4 日、後ヶ谷村と宅部村を合併して狭山村と改称しました。

後ヶ谷村の村名については、「狭山之栞」が「旧後ヶ谷村は後に大なる谷ありて狭山が池ある故、初め後垣外村（うしろがいとむら）といひ、其の後に後ヶ谷戸村といふ。」としています。武蔵村山市にも「後ヶ谷戸」という地名があり、同様な地形をしています。

◎神明社の櫓

「狭山之栞」は神明社の櫓について

『神木 廻り 1 丈 4 尺 文化年間に、別当円乗院の本堂を建て替えの時、この櫓一本で五寸角の柱が 36 本取れるからと寺壇の協議が整い、時の住職が読経し、二本の籤をを無心無垢の子供にひかせたところ凶と出たので中止した。』

ところが、嘉永年間異国船が渡来したので、蒸気船を新調するため、御用商人が伐採の申し込



神明社の所在地の現状、右端に碑あり

みをしてきた。先の状況を話し断ったが、江川太郎左衛門から幕府の用材だから是非ないので相当の代価をもって、売り渡すべき、との指令があった。

代金 25 両で売り渡したが、その時、村の一人が根の切りくずを貰って焚き物に使ったところ隠宅を焼失した。その後、盗賊が入り質蔵を切り破って材物を奪って火を付けた。樺を切った久米川村の升五郎は大熱病を患い、神罰だと悟って日参して神慮を慰めたが、遂に妻を失った。

村の責任者は代金の 25 両で神楽を奏して神に詫びたが、叶わず、疫病が流行し 5 年目によりやく退散した。』との話を伝えます。

◎天狗社・天宮神社

また、天狗社について、『もとは字「上の屋敷」に神明社の遙拝所として「天宮神社」があったものを、天保 8 年 8 月の祭礼の時、幟を納めたが、その時誤って天狗大明神と染めてしまったので、現在天狗社と呼んでいる、それは誤りである。』としています。

「上の屋敷」は円乗院の前身である「延寿院」があったところで、廻田谷ツの最奥にあたり、後ヶ谷村の丘陵南麓唯一の水田を一望するところです。廻田谷ツ遺跡から平安時代の住居跡が発掘されています。武蔵村山市に、中世武士の発生を指摘される「境堀」が検討されていますが、非常に良く似た地形を形成しています。

◎御料神社・御霊明神

新編武蔵風土記稿では御領明神社を「小名内堀にあり」として後ヶ谷村に入っていますが、「狭山之栞」では宅部村には御料神社（御霊明神）と末社弁財天と天王社（八坂と改称）があり、さらに新編武蔵風土記稿の記す愛宕神社があったと区別して記しています。

御霊神社は鎌倉権五郎景正を祀り、別当は景正の臣・寺島小重郎で、聖護院宮末で、「常覚院」を名乗り、維新の際、複飾して、内堀宅美と改めて、神官になったことを伝えます。



内堀にあった御領明神社
東大和市史資料編 2 p 99

◎現在の狭山神社



江戸時代の神明社、天狗社などの神々は合祀されて「狭山神社」となっています。その経過から行事・祭礼は個別に分かれていたときの日程で行われています。鎌倉権五郎景正を祀る御霊神社が合祀されていることは、残念ながら一般的には知られていません。

②円乗院

東大和市付近では珍しく、上石神井三宝寺末です。真義真言宗、智山派、本尊・不動明王で、狭山にあります。新編武蔵風土記稿は「開山は賢叡法印と云、平治元年二月八日寂せり、」としています。平治元年（1159）は東大和市で三光院（天永3年＝1112）に次ぐ開基となります。

また、「狭山之栞」には、「古時、延寿院と云える寺、字上の屋敷に在りしが、慶長12年（1607）8月18日風禍により坊舎悉く吹き潰されしを愛宕山へ移し山を愛宕山と呼ぶに至る」との記事があります。

新編武蔵風土記稿が『愛宕祠 境内の鎮守にて、本堂の後にあり、小祠、下田七畝二十六歩の除地となせり』として、本堂の後に鎮守の愛宕神社があつて、円乗院が別当をつとめていることを記しているのが、この愛宕祠です。現在は狭山神社に合祀されています。



円乗院の山門は寛延2年（1749）に建造、市内では古い建築物のひとつです。仁王像は昭和58年、弘法大師1150年御遠忌にあたりあらたに造立されました。上階に梵鐘が懸けられていて、除夜の鐘には近隣から多くの参拝者があります。

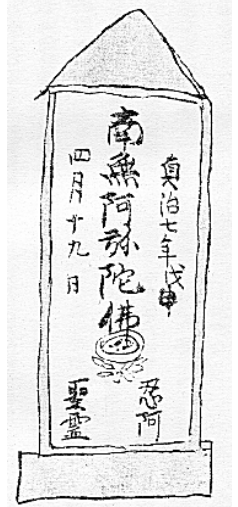
◎観音堂



「狭山之栞」では「嶺松庵観音堂」として、「狭山南峰の出鼻に在り。円乗院の持ちにして本尊如意輪大士は恵心僧都の作。狭山十七番の霊地なり。内に村里の墓あり、碑あり、・・・」としています。

碑あり、として、「貞治7年4月19日、南無阿弥陀仏」の名号板碑があつたことが図示されています。残念ながら、所在が不明です。第2編歴史の流れの中で改めて紹介しますが、貞治7年（1368）は、この地方で独自に使われた年号で、普通の歴史年表では応安元年と記されます。山口氏が平一揆の乱に荷担して、一時衰退した年で、何らかの関連を語るものとして、私は特に注意しています。

観音堂は、現在は建て替えられて、上画像のようになっています。位置、方向は変わっていません。



(2) — 1 狭山村之内宅部 (戸数 12 軒)

60 清水囃子のけいこ (133) 88 こさ池とかゆ塚 (195)

新編武蔵風土記稿では後ヶ谷村と一緒にして記しています。
「狭山之栞」は後ヶ谷村と宅部を書き分けて、宅部について次のように記します。

みやけ 屯倉跡

除地中畑四畝六歩、杉本氏の宅地続きにありしが、不用地なるにより、元禄度上地して高入れを願ひ収税す。「往古、此地にも屯倉ありし故に「屯倉部」と云ひしが、何時の頃よりか「宅部」と呼ぶに至る。旧地頭逸見氏の蔵屋敷なりと云えど然らず。逸見氏上地の後、延宝五年再検地の砌、設楽孫兵衛蔵屋敷として是を除く

宝珠山西樂庵地藏堂

寶珠山西樂庵地藏堂は往時宅部山三光院の末寺にして、西樂寺地藏院と號し、本尊延命地藏尊は長五尺、脇士不動尊は長四尺なりしが、故ありて、幡ヶ谷村莊嚴寺へ移し廢寺となりし跡に、一字を建て西樂庵地藏堂と呼ぶ。

杉本家の持にて代々の墓あり。什宝に弘法大師御筆の不動尊一軸ありて、文政六未年三月五日火災の砌も無難なりしを旦那杉本定賢經師に命じ、板厨子を補修し張り置き、邸宅内に安置せしところ、弘化三丙午年二月二日の火災にて焼失したり。本尊の地蔵菩薩も文政六年度焼失後、神力房光保彫刻の地藏尊を安置す。長二尺余の立像也。地内に廻り六尺五寸のヨク (たらのき) の木あり。

吾庵稻荷

吾庵稻荷は字吾庵ヶ谷戸にあり。昔道金寺の鎮守なりしといひ伝ふ。道金寺の本尊は吾庵の薬師如来なり。日暮里村へ移し廢寺となる。今に、此地を道金寺場といふ。然し俗称誤りて道金嶋と呼べり。・・・

狭山が池

春ふかみ 狭山が池の ねぬなわの くるしけも啼く蛙かな 仲実
みくりくる 狭山が池の便りにし かげは」ひかれぬ 青柳の糸 隆祐
・・・

右の古歌にいつる狭山が池は此地にあり。字古沢を現今小沢の字を誤り用ゆ。周囲の旧反別七町歩の御料林なりしが元文度割地と成り、開発山と称す。往古は松柏密生し池の堤の長さ二十五間余、高さ一丈六間、馬踏三間余、奥行五十間余あるべし。・・・この池水をもて宅部、後ヶ谷、廻り田村までの田用水とす。・・・ジュンサイ生じ、蛙多く棲む。

○その他、「狭山之栞」は三島神社、諏訪神社があったことを伝えます。

○その他、武蔵名所図絵は宅部について次の記載をします。

陣屋跡

後ヶ谷村にあり。文禄年中(一五九二一九六)逸見某に賜い、住居の跡なりと云。いまはその家絶えたり。又、隣村芋久保村にも陣屋跡というあり。これも先年地頭酒井極之助という人の住居の跡なり。

逸見氏は北条安房守氏規(ママ)が臣なり。天正十八年(一七九〇)相州厚木にて戦死せる四郎左衛門氏久が子にて、小四郎左衛門義次といい、その子弥吉というもの御当家に属したるものなり。

小沢の池

宅部村にあり。この池は後ヶ谷、清水、廻り田の三ヶ村に属する池なり。或云古沢池ともいい、狭山続きの溪間にあり。土俗云この池は狭山の谷合にあるゆえ、往古は狭山の池と号するはこれなりという。その説不詳。この池にジュンサイ多し。・・・
と記しています。

☆☆☆☆☆☆☆☆

◎西楽庵地藏堂

地元で「セイラクジ」「カサ堂」と親しまれていた「西楽庵地藏堂」・「西楽寺地藏院」は、実に興味ある話題を抱えています。「狭山之栞」の記述は

- ・「西楽庵地藏堂」は三光院の末で「西楽寺地藏院」と呼ばれていた。
- ・本尊は延命地藏尊で、長五尺 脇士の不動尊は長四尺であった。
- ・「西楽寺地藏院」は渋谷区幡ヶ谷の荘厳寺へ移した。
- ・その跡に「西楽庵地藏堂」を建てた。

○この場合、「西楽寺地藏院」と「本尊（延命地藏尊・長五尺）」と「脇士（不動尊・長四尺）」が共に荘厳寺へ移ったのかどうかは解釈の仕方が分かります。

○一方で、新編武蔵風土記稿は幡ヶ谷村の項で「荘厳寺」について

『不動堂木佛立像長三尺三寸智証大師作（と）縁起二云。智証大師三井寺開基ノ時、自（みずから）此不動ヲ彫刻シ、彼（かの）寺ノ本尊トセシカ、天慶二年、平貞盛、藤原秀郷等、平将門追討ノ時、秀郷此不動に祈誓ヲコメ、陣中マテ守り行きテ、喝 仰怠り無ク果シ、勝利ヲ得タリシカハ、凱陣の頃、下野国小山ノ郷ニ安置セリ。

其後遥（はるかに）星霜を経テ、永禄年中、武田信玄甲州七覚山辺ニ移シ、崇敬セシヲ、北条氏政奪取テ、相州筑井県勝院ニ納ム。然ルニ、天正一八年、北条氏没落ノ後、東照宮、代々ノ武将崇敬アリシ像ナル事ヲ聞シ召シテ、多磨郡宅部村三光院ニ移シ給ヒ、延享四年九月、霊夢ノ告アリテ、当寺ニ安置スト云』
と記しています。

○荘厳寺の「不動堂の木佛 立像 長三尺三寸」の不動尊は、平貞盛、藤原秀郷等に信仰され、徳川家康が多磨郡宅部村三光院から移したものの

となっています。荘厳寺では秘仏として絶対に公開しません。その背景に何があったのか？

また、不動尊像の実態は？などが実証されたら、と思うとワクワクします。

○また、「セイラクジ」は新田開発に伴い「大岱新田」に譲渡する話がありました。その往復文書を見ると、当時の為政者のありようが推察されて、興味深い内容を秘めています。墓地は嶺松庵観音堂の墓地に移されました。

○「セイラクジ」の脇をって北は所沢、南は杉本坂を抜けて青梅街道に抜ける道を「鎌倉街道」とする伝承があります。88 こさ池とかゆ塚（195）の話と通じます。

◎狭山が池

「狭山之栞」では、古歌にうたわれる「狭山が池」は宅部の古沢池だと主張します。「狭山が池」は近くには瑞穂町の箱根ヶ崎にあり、武蔵名所図絵は大阪府南河内郡狭山町の「狭山池」としてしています。

武蔵名所図絵では、「狭山が池」は宅部の古沢池だとの主張に対し、「その説不詳」と退けています。清水村生まれの大久保狭南は「武野八景」の一章「宅部の寒雁」で、次のように詠んでいます。宅部の状況が描かれますので引用します。

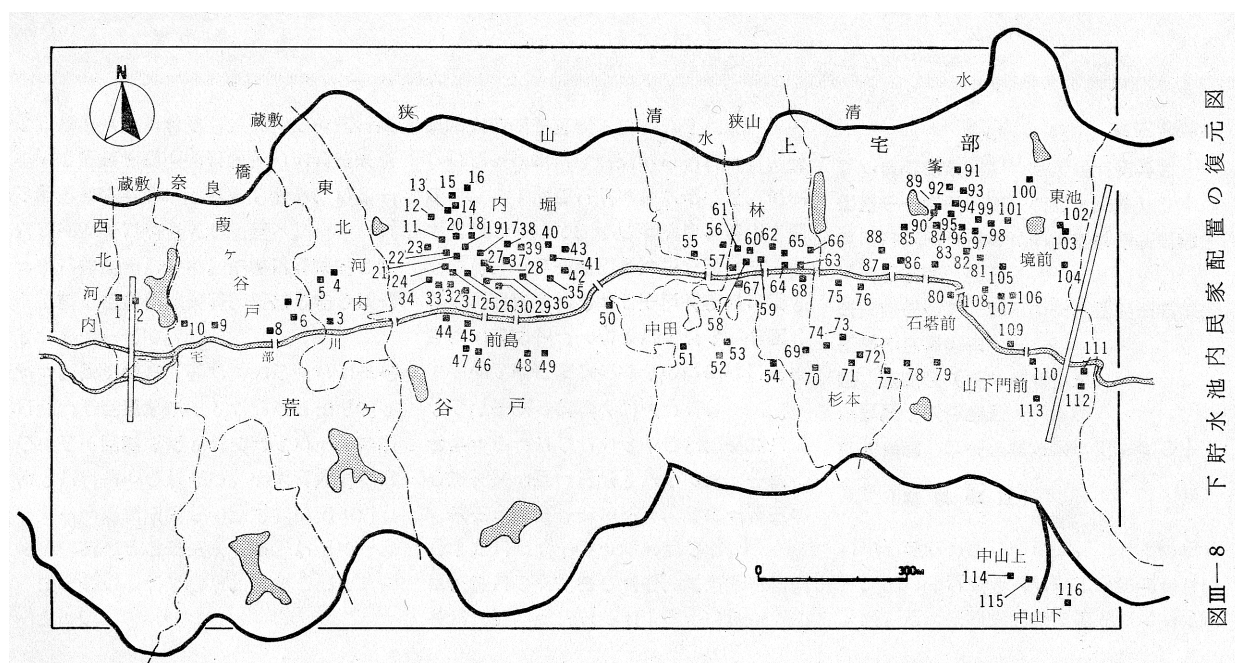
『宅部は狭山の半ばより以東、南北に分裂する中間、東西半里ばかり、後谷・清水・廻田の三村に属する里名なり。其の地皆稲田にして、三冬氷雪の中、鴻雁歳々棲集し、飛去り飛還りて、往往陣を整え、鳴声相和して昼夜絶えず、幽趣余りありといふ。

南北民家有り、南は嶺小に麓平にして、屋後を林叢の間より望み、北は田畔の小河を隔てて、直ちに崔嵬に倚（より）り高低斉しからず。宅辺多く柿を種ゆ。秋冬の交、実熟する時は則ち濃淡画綵（さい）の如く頗る奇観たり。千載集頭季の歌に曰く

五月闇狭山が峰にともす火は
雲の絶間の星かとぞみる

当時斥（さ）す所何れの峰なることを知らず。此の境今其の意にかなふに似たり。西偏より南の方溪間に入ること数百歩にして古池有り。蓴菜を生ず。四辺の山中、盛んに松露・薇蕨を生ず。郷人称して小沢の池といふ。』

この地域は東大和市域の狭山丘陵の中で、屯倉、陣屋跡、西樂庵地藏堂、吾庵稻荷、狭山の池など話題が多く、歴史的にも一つの核を成した所でしょう。「狭山之栞」では「こさいけ」を「古池」として次の宅部村（内堀）に含めています。



(多摩湖の歴史 p 227)

多摩湖・下貯水池に沈んだ部分の民家配置図です。右から上宅部、林、杉本、内堀の区域分けがなされています。大きくくくれば、上宅部が清水村、林・杉本が狭山村の内宅部、内堀が狭山村の内宅部郷内堀＝宅部村になります。

(3) 宅部村(狭山村之内宅部郷内堀)(戸数?)

10 内堀部落の女堀 (23)	53 ぶんさんのはなし (116)	54 馬方勝っあん (118)
66 三日の正月 (144)	88 こさ池とかゆ塚 (195)	94 行人塚 (206)

○宅部村 宅部村は、宅部郷に係り、庄名は博へす、村名の事を尋るに、元は宅部の内内堀と云ひし所なりしが近き頃より宅部村とは唱ふるよし、江戸日本橋より行程九里半、四方の堺、東は清水村に續き、南は奈良橋・高木の二村に隣り、西は藏舗村に接し、北は山上を境として入間郡菩提木村に交り、東西凡八町、南北十四町許、民家四十二烟、

地形は北に山をうけ、半ば平かにして半ば不平なり、土性山根には少しく眞土あり、この辺に水田を開き、山間の清水を用て耕耨(こうどう)の助となせり、陸田の方は野土なり、元は水口佐左衛門知行たり、後御料所となり大屋奎之助支配せり、それも次第にかわりて、今は小野田三郎右衛門信利の支配所となれり、

高札所 字内田にあり、

小名 内堀(西北なり)林(東北を云)廻り田谷戸

山川 山 北の方にあり、中央にもあり、登り十二丁許、

水利 溜池四ヶ所 字小澤、宮ノ下、堂ノ入、廻り田谷戸等にあり、この外悪水堀三条、村内を通、

寺院 阿彌陀堂 字内堀にあり、堂三間半に二間半東向、本尊木の立像、長一尺三寸許、清水三光院の持なり、

◎この他「狭山之栞」は、狭山村之内宅部郷内堀に、

御料神社、愛宕神社

神祠(瘡守稻荷、峯稻荷、大神宮、大六天、失物稻荷)

古塚(行人塚、東光院塚、大塚、庚申塚、御判塚、塚の腰、送神塚、靈光塚)

をあげています。

☆☆☆☆☆☆☆☆

◎宅部村

「宅部」に関しては関連する事柄が多く整理に困ります。早急な整理が待たれます。

①広域な地域名

宅部郷という、東大和市域内から東村山市域内に至る広域な地域の呼称がある。

上宅部(＝東大和市域内)、下宅部(東村山市域内)の区別がある。

②東大和市域内では、狭山村の地域を後ヶ谷と宅部に分ける場合がある

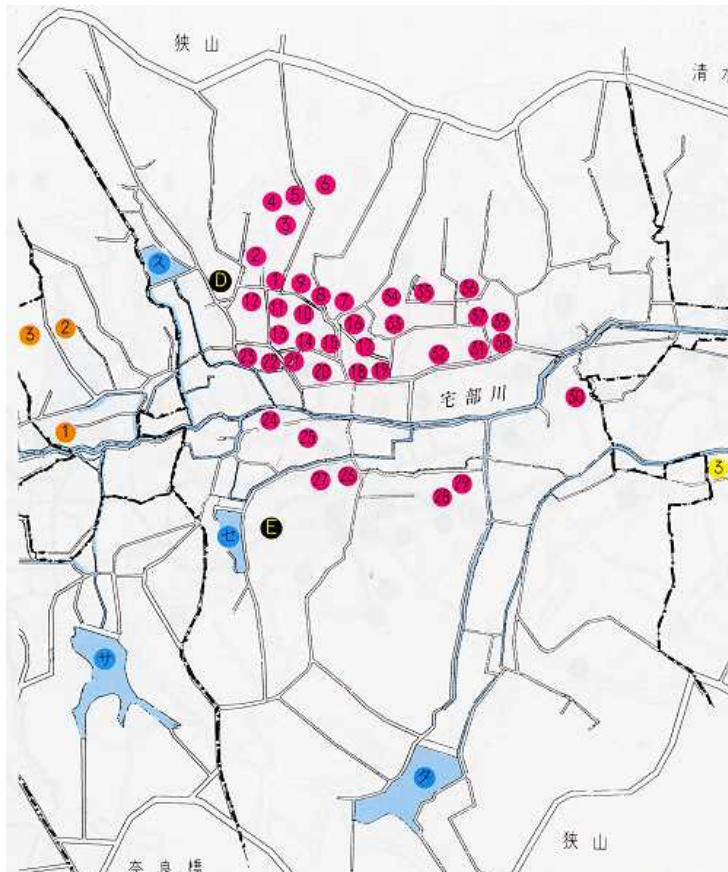
「狭山之栞」では「狭山村之内宅部」「狭山村の内宅部郷内堀」として一区域を分けている。

③江戸時代には「宅部村」と呼ばれる行政区域があり、独立区域としていたことがある。

新編武蔵風土記稿は「元は宅部の内、内堀と云ひし所なりしが、近き頃より宅部村とは唱ふるよし、」として、その履歴と区域を記す。

このように様々な呼び方と区別がされていますが、pの多摩湖の歴史p227図の区分が東大和市域内での宅部の区分とすることになりそうです。明治8年(1875)3月、宅部村と後ヶ谷村を合併して「狭山村」とするときの事情に、明治政府が新たに地券を発行して地番と面積の確定をしようとした際、番地や区域の錯綜が激しくて、合併して整理することになったとの云い伝えがあ

ることからも、その錯綜ぶりがうかがえます。



大正初年貯水池建設時の旧宅部村＝「内堀」を取り出してみると（東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p 61）、新編武蔵風土記稿が『北に山をうけ、半ば平かにして半ば不平なり、土性山根には少しく眞土あり、この辺に水田を開き、山間の清水を用て耕耨（こうどう）の助となせり、陸田の方は野土なり、・・・』の状況がそのまま残っていることがわかります。

D、阿弥陀堂 E、御料神社（御霊明神）、タ、小沢池

◎御判塚

88 こさ池とかゆ塚（195）

「狭山之葉」には、この地区にたくさんの塚があったことを伝えます。御判塚もその一つで、よもやまばなし「88 こさ池とかゆ塚（195）」では、新田義貞軍の鎌倉攻めの時の伝承を伝えます。

◎行人塚

94 行人塚（206）

よもやまばなしにその内の一つ「行人塚」の話があります。「足腰の立たなくなった老人や、行きだおれの病人達が、静かに死を待つ」この地方には珍しい姥捨て伝承の一つです。

(4) 高木村附持添新田 (戸数 56 軒)

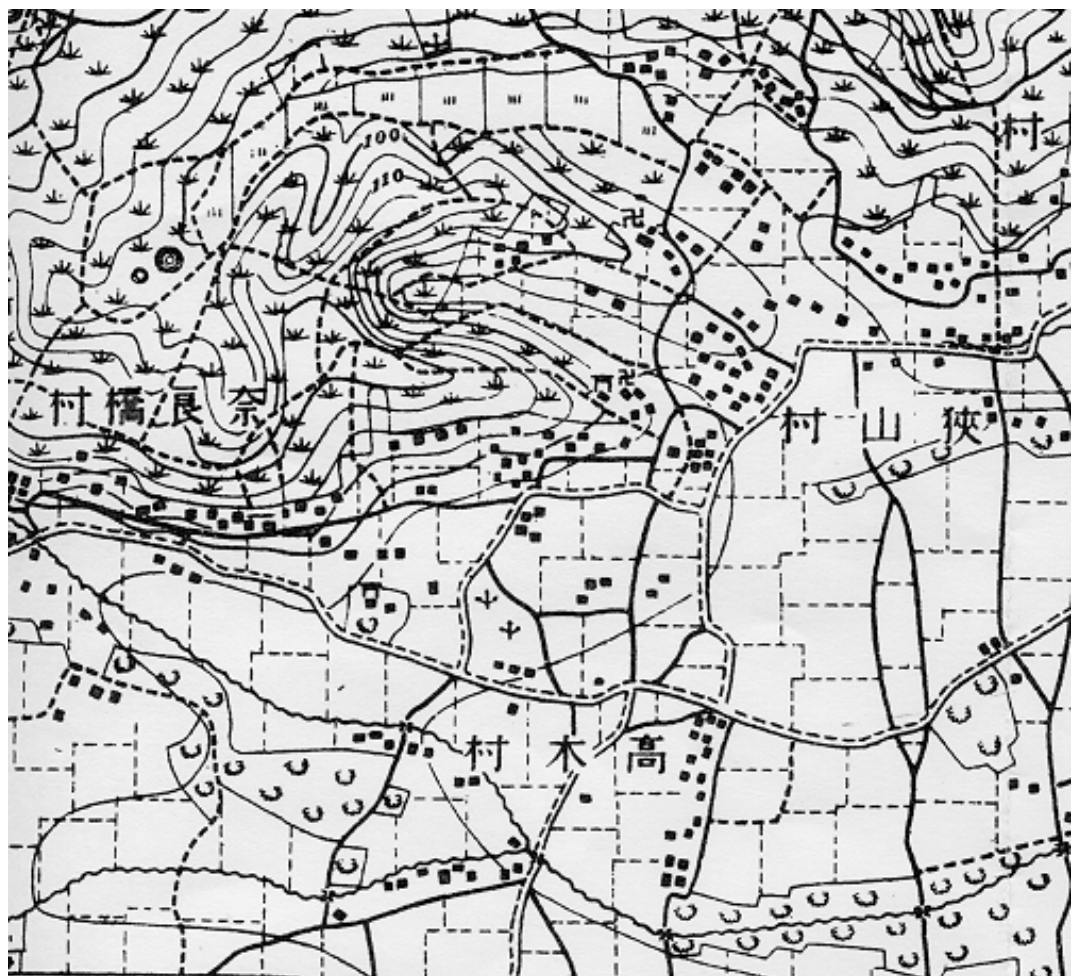
2 松っこごれ地蔵 (4) 5 西山の夜泣きさま (11) 6 笠森稻荷 (13)
 7 高木の塩釜様 (16) 19 火伏せの神様 (41) 31 高木のまんじっ鉦 (68)
 46 楽隊(明治時代) (102) 58 綿入れ着ても無理だった (128) 59 村の運動会 (130)
 61 高木の獅子舞 (135) 69 櫛のめざまし (149) 76 歯をとぎに来たむじな (169)
 97 比翼塚 (211)

○高木村は、郡の良^{うしとら}にあり、郷庄の唱を伝へず、東は後ヶ谷村、西は奈良橋村、南は小川村、北も亦 後ヶ谷村及び宅部^{えん}の二村に続きり、東西凡七町、南北二十町、元禄三年 細井久右衛門検地せり、民戸五十二烟、

ここも女は木綿縞をおり かひこをなすこと近村ほぼ同じ、土性野土にて粗薄なり、水田はなく陸田のみなり、

此村 御料 私領 入會なれども、いつの頃より御料所となりしと云ことは傳へず、寛文年中は岡上次郎兵衛・近山五左衛門、延寶年中 中川八郎左衛門、元禄年中 細井九右衛門等次第に支配せり、私領は天正年中より酒井極之助・同郷三に給はれり、郷三が知行せる方は年代をしらず、上地となれり、今は大岡源右衛門御代官所にて、私領酒井清次郎の知行交れり、

外に武蔵野新田あり、東南は廻り田新田に境ひ、西は奈良橋新田、北は後ヶ谷・清水村等に限れり、ここは民戸なし、元文元年大岡越前守が検地なり、



明治15年(1882)測量迅速図

小名 本村（中央なり） 砂（南方を云） 水窪（中央より東方なり）

山川 用水堀 南境を流、幅八九尺 この外悪水堀二条あり、

神社 山神社 除地、一畝、字中原と云所にあり、わづかなる祠、
村内 尉殿権現じょうどのごんげんの別当、明楽寺の持

尉殿権現社じょうどのごんげん 除地、一畝、字砂にあり、上屋二間に三間、内にわづかなる宮を置き、
前に鳥居をたつ、

別当明楽寺 社地の東にあり、高木山と号す、真義真言宗、豊島郡石神井村三宝寺の末、
草創の始を伝えず、本堂四間四方南向、本尊不動木の立像一尺二寸を置き、

寺院 地藏堂 字砂にあり、二間四方、南向、地藏は木の座像長五寸ばかり、

阿弥陀堂 同じ辺にあり、二間半に三間、本尊八寸許座像なり、

薬師堂 字がが峯にあり、二間半に二間、本尊五寸許、木の座像十二神を左右に置き、
各長八寸許り、

○「狭山之栞」では、蟹峰堂、新堂、阿弥陀堂があります。

☆☆☆☆☆☆☆☆

◎高木村

村名の由来は「狭山之栞」に、「当地の名の起こりは、往昔、鎮守尉殿権現の社地に松杉の大木
繁茂し、南は多摩川府中辺より、西は青梅・五日市、東は田無・保谷あたりより望見し得られし故、
自らいでものなりといふ。」としています。

◎尉殿神社じょうどの

新編武蔵風土記稿では尉殿権現社じょうどのごんげんとします。「狭山之栞」では尉殿神社として、次のように記し
ています。

『尉殿神社は村の惣鎮守也。祭神不詳。博云ふには手力雄命たじからおのみことなりと。境内五畝廿歩除地となりしが
維新の際奉遷す。祭典は毎歳九月十九日獅子舞の神事を古例とす。別当妙楽寺なりしが維新以來遠
山左衛門尉家口鐵右衛門復飾の上、宮島岩保と改称して神官となる。明治十丁丑年四月十日傍に塩
竈神社を勧請す。』

創建は不明ですが、その他の資料で宝暦8
年（1758）に再建とされます。高木神社
となったのは明治になってからです。

なぜ改称したかの経緯ははっきりしませ
ん。現在の西東京市の田無地域に尉殿権現が
あり、明治5年（1872）の神仏分離令に
より、熊野神社、八幡神社を合祀し、田無神
社と社名を改めている例があります。これか
ら推測すれば、恐らく同じような背景から高
木村でも「高木神社」と改称したのだと考えられます。また、現在の高木神社は高皇産霊大神を祭
神としています。



現在の高木神社 清戸街道に正面参道を持つ

「尉殿神社」は東京では数少ない神社で、わずかに田無方面にあります。現在も「尉殿神社」を祀っている保谷上宿の尉殿権現の縁起を見ますと



『この神社の創建は永正二年(一五〇五)と伝えられる。・・・神体は木彫俱利伽羅不動像である。権現社であるから垂迹の神を定めて龍田風神の級長津彦命(しなつひこのみこと)・級長戸辺命(しなとべのみこと)の男女二座を祀った。』とし、・・・要するに水にかかわる神であり、・・・中世の小集落に特有の水の神を起原とする。』(保谷市史通史編2 p 88～91) としています。左は俱利伽羅不動庚申 豊島区高田2-12-39 金乗院慈眼寺(目白不動)

高木村は貯水池の中に集落を持たない唯一の村でした。他の神社が丘陵の中にあるのに比べて、尉殿神社は清戸街道に面して正面を持ちます。ここに創建時の背景があるようです。



保谷 上宿の尉殿神社

高木村の人々は武蔵野の原に向かって開発を進め、さらに親村を離れて国分寺市に属する地域へ新田開発をして、そこに新たに立村を求めて移動しています。これらのことからすると水を求める村人達の願いの現れが一因であったとも考えられます。祭神を手力雄命(たぢからおのみこと)・高皇産霊神としたのは、明治13年(1880)高木神社と改めたときで、明治新政府の政策への歩み寄りかも知れません。別当を勤めた明楽寺は廃仏毀釈のため廃寺となっています。

また、火伏せの神様である秋葉神社が合祀されていることも注意を引きます。「狭山之栞」では、稻荷二社(内一社は旧地頭酒井郷蔵の勧請と伝う)があることを伝えます。

◎塩竈神社

7 高木の塩釜様 (16) 8 塩釜講 (18)

新編武蔵風土記稿では伝えず、「狭山之栞」で、「明治十丁丑年四月十日傍に塩竈神社を勧請」したことがわかります。よもやまばなし「高木の塩釜様」では、この神社の成り立ちを説明しています。

「塩釜講」では遙か遠くまで信仰されていたことを伝えます。東大和の村々以外からも信仰が厚く、講を構成した人数は数千人とされます。多摩市や東久留米市からも講のメンバーがお参りしています。それほど、当時の出産には危険が伴い、また、幼児の生育率が低かったことを物語ります。

この神社はもともとは名主の家に祀られていました。それが、次のような経緯をたどって、高木神社に祀られています。

『・・・当社の総本社は宮城県の塩釜市にあ



り、祭神を塩釜神と称するもので、当社はその分社にあたる。記録によると「明治十丁丑年四月十日、尉殿神社の隣に塩釜神社を勧請す」と記載されているように、江戸末期から明治時代の初期にかけて、高木村の尾崎金左衛門という人物の土地に屋敷神として祀っていたものの、明治になると金左衛門は「一軒の家には、長い間に栄枯盛衰があり、後の世までお祀りできるかどうかかわからぬ。」と考えて、屋敷神を高木神社の境内に移した。』（東大和市史資料編 8 信仰のすがたと造形 p 25）

この背景には、明治政府の名主・年寄り制度の廃止も絡んでいたと考えられています。安産祈願の様子は p に記します。

◎明楽寺

97 比翼塚 (211) 31 高木のまんじっ鉦 (68)

よもやまばなしに「比翼塚」では、江戸南町奉行遠山家ゆかりの武士が来住し、寺子屋を開いた話、「高木のまんじっ鉦」では明楽寺の鐘が火の見櫓で活躍する話が伝えられます。

高木にありましたが、現在は廃寺となり、その姿は見られません。新編武蔵風土記稿では社地の東にあり、高木山と号す、真義真言宗、豊島郡石神井村三宝寺の末、草創の始を伝えず、本堂四間四方南向、本尊不動木の立像一尺二寸を置き、

としています。円乗院の隠居寺とも云われ、円乗院と深い関係があります。明治維新後は、高木他五か村連合や組合村の会所となり、東大和市を構成する村々が共同して近代地方自治の産声を上げたところでもあります。



高木・奈良橋略図

改正前の

高木・奈良橋略図

地名は小字名

- 30 -

(5) 奈良橋村 (戸数 59 軒)

4 川端稲荷大明神 (9) 38 ザンザラ (87) 76 歯をとぎに来たむじな (169) 99 土の中から出た表忠碑 (216)

○奈良橋村は、郡の良^{うしとら}にあり、此辺阿豆佐美^{あづさみ}の里と称し、村山郷に係れり、庄名は殿ヶ谷戸なりといへど、この庄名は外に聞ことなし、

郡内蔵舗村^{ぞうしきむら}は正徳年中この村より分郷せしことは其所に弁せり、

されば地形犬牙して慥^{たしか}には分ちがたけれど、其大略をいへば、東は高木村に境ひ、南は小川・砂川の両村に接し、西は芋久保村により、北は山峯を限として入間郡新堀村^{ひつじさる}に交はり、坤^{ひつじさる}（南西）は蔵舗村につづけり、蔵舗を合して東西十町、南北へ二十町余の地なり、

地形平かに北方には山を環らせり、土性は野土なれば土軽きゆへ、田間に宇津木を植て風除などせり、陸田多く水田はわずかに北方山よりの所に開き、そこの清水を引て用水となせり、民戸五十八軒、

耕作の暇には木綿織をおれる外に、蚕を以て女子の業となせり、

この村開闢の昔はいつと云ことを伝へされど、郡中芋久保村鹿島神社に掛たる建武三年の鐘銘に、此村名をのせたとれば此村名も古くより唱へしことなるべし、

天正年中より石川太郎右衛門が知行と、外に武蔵野新田の方は酒井清次郎が知行交れり、萬治年中御料所となりし頃は、中川八郎右衛門・今井九右衛門等支配せり、いつの頃かここの地頭石川某検地せしことあり、新田をば元文元年大岡越前守検地せしよし、今は御料所にて大岡源右衛門支配所なり、

高札場 村の西にあり

山川 山の北の方にあり、上り一二町許り

水利 用水堀 村の南、新田の境を流れり、他に悪水堀三条村内を通ぜり、

神社 山神社 除地、三畝、南の畑中に在、わづかなる祠なり、

八幡宮 除地六段、村の西北方にあり、上屋二間に三間、内に五尺の社を置り、
拝殿は二間半に三間、前に鳥居をたつ、

山王社 除地、南の畑中にあり、以上の社鎮座の初は伝えず、いづれも村内の修験、覺實院の持、

愛宕社 除地、雲性寺の東にあり、わづかなる祠にて、上屋は九尺四方、
ここも鎮座の初は伝えず、村内大徳院持、

日月宮 除地、六畝、わづかなる祠なり、

寺院 雲性寺 除地、二段五畝、村の北山麓にあり、天王山観音院と号す、真義真言宗、中藤村真福寺の末、開山開基の人を伝えず、本堂五間に七間南向、本尊弥陀木の座像一尺六寸を安せり、境内には此所の地頭石川太郎右衛門代々の墳墓あり、

観音堂 門を入て右にあり、二間四方、観音は十一面木の座像一尺二寸許なり、

天王杜 境内後背の山の中腹にあり、則村内の鎮守なり、
大徳院 除地、二段、修験なり、府中門前坊の末、愛宕山と称す、寛永十六年聖護院宮より、
金襴の袈裟を給はりしと、その故を伝えざれど、この頃よりの修験なるべし、

覚寶院 これも修験にて、八幡山と号す、同じ支配なり、

旧跡 屋敷跡 蔵舗村の境にあり、

蔵屋舗跡 同じ辺にあり、石川某の住居せし屋舗跡、及び其人の蔵屋舗跡なりと云、石川某は
所の地頭なれば、元はここに住居ありしなるべし、

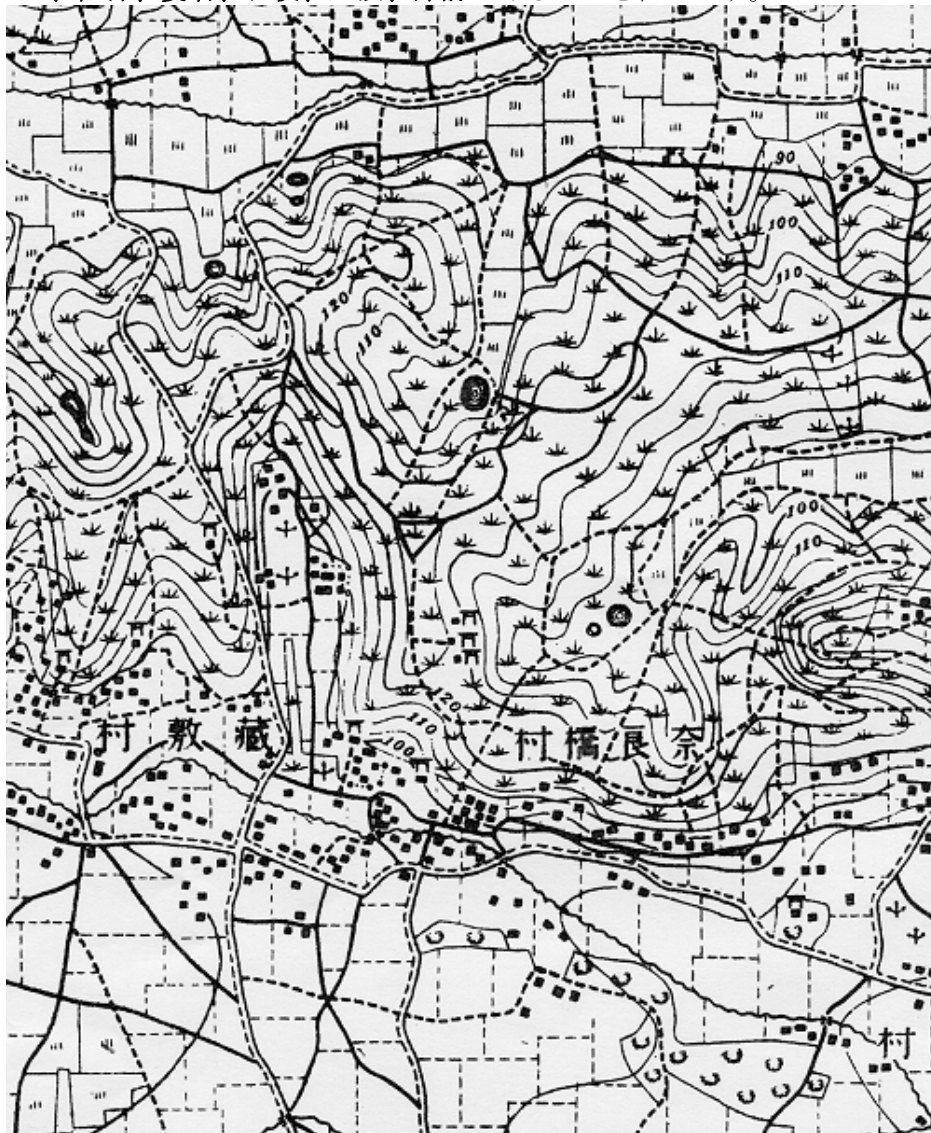
塚 宅部境にあり、東覚塚と云、何のゆえんなりや詳ならず、

旧家 百姓勘左衛門 先祖 岸入道右近尉吉家、天正十五年六月死とのみ伝えり、旧家なる由を
云へど拠所はなし、

○「狭山之栞」では、

霹靂体稻荷 日月神社

神祠として、山神、愛宕、日枝、八坂、諏訪があることを伝えます。



明治15年（1882）測量迅速図

◎奈良橋村（戸数 59 軒）

村名の由来については、さすがの「狭山之栞」も触れていません。高橋源一郎が芋窪の豊鹿島神社の創建棟札には「上奈良橋郷」があり、芋窪村は上奈良橋郷に属していました。江戸時代には、西から「芋窪村」「蔵敷村」「奈良橋村」と並んでいましたが、蔵敷村は奈良橋村から分離独立した経過があり、芋窪村と奈良橋村は隣接していたことになります。これらから考えると奈良橋はある程度広域な地名であったことが考えられます。

また、「上奈良橋郷」がある以上、「下奈良橋郷」も考える必要があります。これらは何れも未解決になっています。

◎八幡神社

76 歯をとぎに来たむじな（169）

「歯をとぎに来たむじな」は八幡神社の裏山にくらす^{むじな}猪の話です。八幡神社はうっそうとして立つ松の大木に囲まれていた姿を伝えます。家康から任命された石川地頭が社伝などを整備したことが伝えられます。

八幡神社は奈良橋村の鎮守です。八幡神社の神官が東大和市内の神社の多くを管理しています。東大和市内では、現在、芋窪の豊鹿島神社と奈良橋の八幡神社が代表的な神社ですが、新編武蔵風土記稿は至って簡略に

『八幡宮 除地六段、村の西北方にあり、上屋二間に三間、内に五尺の社を置き、
拝殿は二間半に三間、前に鳥居をたつ、』

としています。「狭山之栞」では

『村里の惣鎮守なれど勧請年紀を不詳。祭神は菅田和気尊、応神天皇也。祭典毎歳八月十五日。別当本山修験八幡山覚實院は聖護院旧宮末小田原玉龍坊配下府中門善坊霞下也。・・・』

と記しています。東大和市史資料集 8 信仰のすがたと造形では、社伝を紹介して

『社伝によれば、その昔、戦いによって宮が壊れようとした時に、武士がこの森に逃げて来て露営しようとして辺りを見渡すと、暗い中に宮があったので、その中で眠ることにした。

そうすると、夢の中に「吾は八幡の神なり。」と八幡神が現れて、当社によく宿ってくれたと述べてから、宮が破損しようとしているので村人に建て替えることを知らせてほしいと言った。そこで武士は夢からさめて地領に行き、その旨を伝えたという。



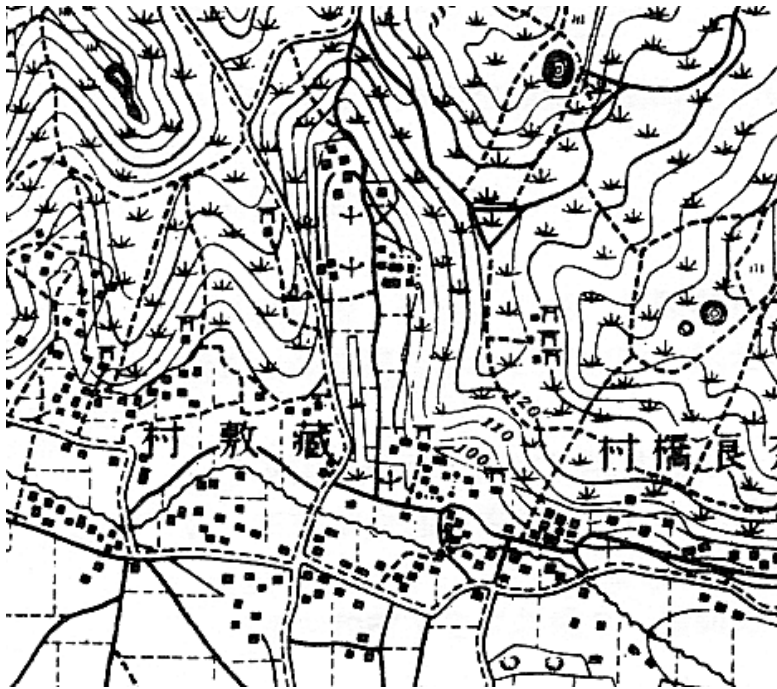
社殿は天正 3 年（1575）11 月、領主石川太郎右衛門の寄付により社殿が再興され、その後元禄 2 年（1689）9 月、旧領主石川太郎右衛門ならびに岸隼人によって拝殿が建てられ、その後、昭和 7 年（1932）本殿、幣殿、拝殿が改築された。

主祭神として^{ほんだわけのみこと}菅田和気尊を祀り、その他の祭神に^{おおやまつみのみこと}大山祇命・^{にちげつのおおかみ}日月大神・^{しきしまひめのみこと}市杵島姫命・^{ほむすびのみこと}火産日神・^{たけみなかたのみこと}建御名方命を祀る。末社には富士浅間社・神明社・武内社・御嶽社・大六天社を祀る。』としています。

天正3年（1575）に領主石川太郎右衛門（徳川家康の直属家臣）の寄付により社殿が再興されたとされます。しかし、家康の直属家臣が東大和市域の村に配属されたのは天正19年（1591）5月が最初で、石川氏はそれ以降になります。従って何らかの年号の行き違いがありそうです。むしろ、社伝の中にある、八幡を信ずる地元武士の創建説の方が実態に近かったのではないのでしょうか。



富士塚と浅間社



ていたり、神社本殿の裏側にこんもりと富士塚が築かれて、富士浅間社が祀られています。

八幡神社には、多くの神々が合祀されています。村人達は、鎮守（総鎮守）とともに、左の明治15年の地図でも辿れるように自分たちの身近な地域にそれぞれ神社を祀っていました。

また、養蚕の神などのように、生産に直結する神を集団で祀ることもありました。それが明治初年の宗教政策により、この地方では急速に鎮守に合祀される傾向を示しています。

その表れが、八幡神社にも豊鹿島神社にも凝結されているようです。養蚕の神が大木の下に祀られて

◎修験・大徳院・覚實院

奈良橋村には、修験の大徳院と覚實院がいました。修験は、村人達に大きな関わりを持っていましたが、これも明治初年の宗教政策により廃止されました。それらを含め別項でまとめます。

◎雲性寺

真義真言宗、豊山派 本尊 阿弥陀三尊 中藤村真福寺の末 狭山之栞は

『天王山雲性寺観音院は以前は本尊不動明王なりしが後三尊阿弥陀如来を安置す。長二尺許り。脇士勢至観音二体は立像にて長一尺余。中藤村真福寺の支院にして後の山に天王宮ある故天王山と號す。又観音堂あるため院を然か名付く。』

法流開基法印伝榮は享保三^{いぬ}戌年五月五日寂す。地内観音堂本尊は十一面観世音にして狭山第十八場の霊場たり。除地式反五畝歩は維新の際奉還す。門前に弁財天の小祠ありしが維新の際天王の社と共に諏訪山に引移す。旧地頭石川太郎右衛門代々の墓碑七本各高二尺位也。』

とし、東大和市史資料集8信仰のすがたと造形は

『後世の他誌類、寺伝などによれば、永享11年（1439）に堂宇を建設し天下の安穩、仏法興隆を祈誓したことに始まるという。その後、栄枯盛衰を重ね、天正元年（1573）に法印承永が再興し、元禄年間（1688～1703）には地頭石川大郎右衛門により新伽藍を整備されたと伝えら

れる。』

と堂宇の建設について経過を明らかにしています。住職が勝楽寺村から奈良橋村の雲性寺に来られたため、勝楽寺村にあった將軍地藏と蔵敷の太子堂前に祀られている將軍地藏との関係についてpで紹介しました。奈良橋村を治めた地頭・石川氏の墓があります。



雲性寺は狭山丘陵の谷ツの低い台地にあります。かつては正面の参道の両側に水田があり、参道を行く人の影を映していました。水田は画像左側の谷ツの奥まで丹精されていました。さらに画像左は、八幡神社になります。

◎石川地頭

4 川端稲荷大明神 (9)

奈良橋村を最初に治めたのが石川地頭でした。実際に奈良橋に住み村を治めました。よもやまばなし「川端稲荷大明神」は石川地頭の祀った稲荷との伝承があります。雲性寺に石川地頭の墓があります。地頭については、歴史の流れの中にまとめます。

◎霹靂体稲荷



まるでクイズ問題のようですが、「霹靂体稲荷」様が奈良橋に祀られています。「狭山之栞」は「霹靂体稲荷は岸氏邸内にあり。神体を霹靂体と称す。図左の如し」として紹介しています。「青天の霹靂」の霹靂です。何とお呼びするのでしょうか？

島根県宍摩郡仁摩町に鎮座する国分寺霹靂神社は「こくぶんじへきれきじんじゃ」と呼ばれ「雷神、玉依姫命」を祀ります。島根県浜田市国分町の国分寺霹靂神社は同じ読み方で「雷神、事代主神、国常立命ほか」を祀ります。

奈良県五條市の「宮前霹靂神社」は「みやさきかんとけじんじゃ」と呼ばれ「雷神」を祀ります。

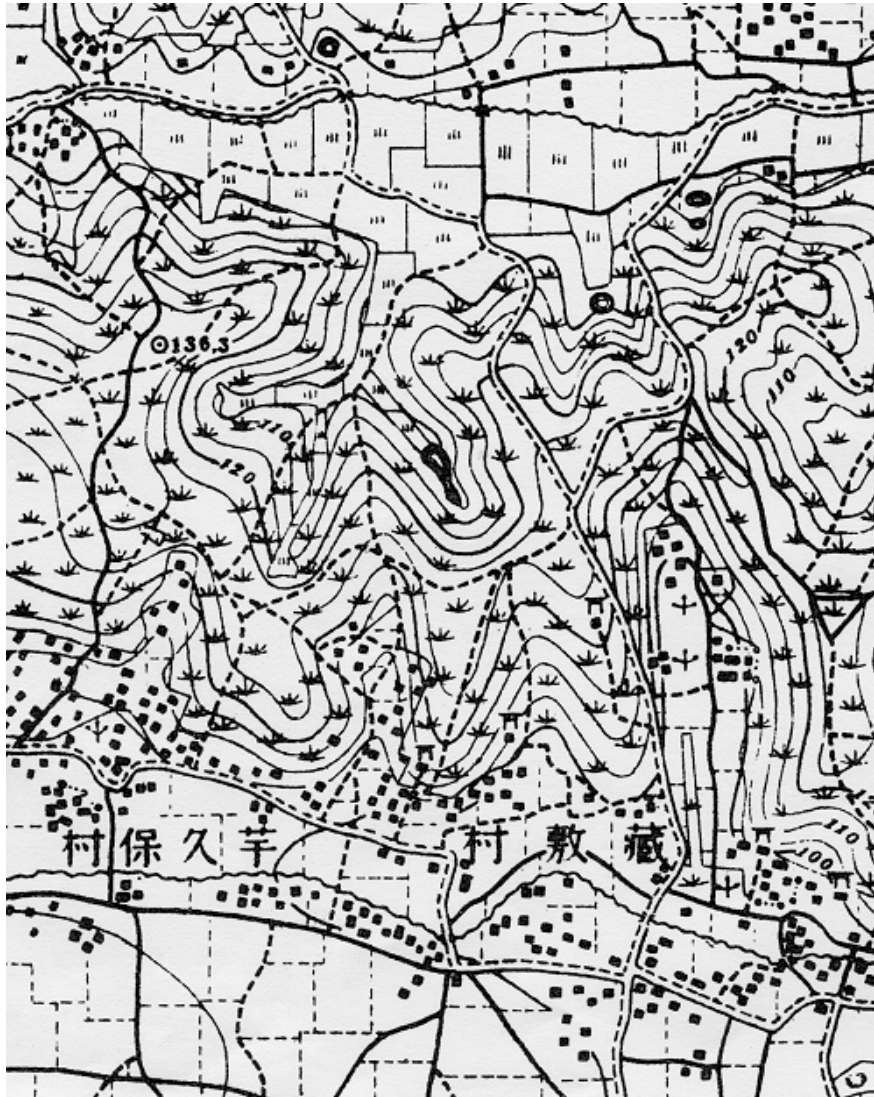
京都の伏見稲荷に次のような伝承があるそうです。

『稲荷山は神奈備山で、「お塚」と呼ばれる磐境が目立つ。磐境は参拝者が「ここに神が降臨する」として祀れば、そこが霊所となる。菅公の怨霊が雷となって都を襲った際、この社に雷神の鎮魂を祈ったと言う。同時に祈雨の祈りを受けている事からは雷神でもあった。稲荷のキツネは神使である。オオカミの変じたものとされる。』

このようなことから、岸家の「霹靂体稲荷」も恐らく雷様を祀ったものと思われるかもしれませんが？

(6) 奈良橋村枝郷 蔵舗村 (戸数? 奈良橋村戸数 59 軒)

11 雨乞い (26) 16 おみたらし (36) 17 おしゃぶき様 (37) 67 三本杉 (145)
62 子供みこしのこと (137) 74 しし穴の話 (165) 83 からす二題 (182)
84 狭山丘陵の古狸往生記 (184) 87 ねずみ沢のかっぱ (193) 98 力石 (213)
90 貯水槽になった弁天池 (198) 96 かたき討の話 (209) 100 ばばあのおふところ (218)



明治15年(1882)測量迅速図

○蔵舗村は、奈良橋の内に属す、正徳年中分村せしといえど、郡村名寄帳にも見えず、一村には立かたし、故にここに隸す、或は蔵式と書り、民家五十五軒なり、

御代官は奈良橋と同く、大岡源右衛門孟清なり、新田の方は大岡越前守開発して、元文年間検地せり、この所は今に至って人家もなく、本田のもの持添の地なり、

小名 弁天山 (村内にあり、弁天の社ある故に云)

神社 熊野杜 除地、村の東の方にあり、祠は二尺四方、上屋九尺に二間半、村内の鎮守なり、

弁天社 除地、字弁天山にあり、一尺五寸の小祠にて、二間四方の上屋を設く、寛永六年鎮座せしといへど、其詳なることを伝へず、

御嶽杜 東の方にあり、小祠にて九尺に二間の覆屋を設く、南向、

寺院 太子堂 是も東の方にあり、堂は三間に五間、本尊は立像にて長一尺三寸なるよしをいへど、秘仏なりとて見ることを許さず、

地藏堂 東の村境にあり、三間に五間の堂なり、南向、ここには村民の墓あり、

この他に「狭山之栞」では

神祠（熊野、御嶽、山王）

があることを伝えます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

◎蔵敷村（戸数 59 軒）

蔵敷村は奈良橋号の枝村で奈良橋村の内蔵敷分として、奈良橋村の地頭・石川太郎右衛門の支配下にありました。新編武蔵風土記稿は「正徳年中（1711～15）分村せしといえど、郡村名寄帳にも見えず、一村には立かたし、故にここに隸す、」として奈良橋村枝郷蔵舗村としています。

「狭山之栞」では「維新の際葦山県より村号を受け、独立せる一村と成る。・・・旧地頭石川氏の郷蔵ありし故、村号となりぬ。」としています。

内野左衛門が蔵敷村の名主に就任したのは寛延2年（1749）とされ、早くから分村していたようですが、天保14年（1843）の検地書き上げには、奈良橋村蔵敷分の記載があります。早くから新田開発に努め、寛文期（1611～1673）には新田開発によって25名が新しく本百姓に取り立てられています。恐らくこのような苦労を重ね、独立村としての自立を目指したものと思われます。享保9年（1724）には現在の東大和市駅周辺を蔵敷村に属する農民が開発しました。

◎熊野神社

11 雨乞い（26）	62 子供みこしのこと（137）	98 力石（213）
------------	------------------	------------

「雨乞い」は御嶽神社の「みたらしの水」を汲んできて、熊野神社で雨乞いをしたことが語られます。「子供みこしのこと」は熊野神社の祭礼で、青梅街道に万灯が並ぶ姿を伝えます。熊野神社は蔵敷の狭山丘陵南麓に鎮座しています。

「狭山之栞」は、『熊野神社は村長内野氏の鬼門除けに建立せしと。現在は村里の鎮守とす。同家十五軒ありて、此处より東西へ七軒宛住居す。神木杉の廻り一丈五寸。坂の半にあり。』としています。

創建は不明で、この神社の創立に関しては様々な見解があり、東大和市史資料編8では次のように説明しています。

『当社が、いつ創建されたかは不明であるが『狭山之栞』によれば、明治初期頃までに蔵敷村の村長であった内野氏の鬼門除けに建立され、当地区の鎮守として祀られるようになったと伝わる。



手前に見えるのが力石

また、内野家の伝えによると蔵敷一三六七に鎮座する巖島神社が永禄年間(一五五八～一五七二)前後の創立といわれるところから、同一時期に創建されたものと推測される。しかし、小島蔵之助氏方の古文書によれば、創建は天文二年(一五三三)とあり、社殿の造営は寛永六年(一六二九)十一月と記されている。

さらに、一説には修験が信仰の対象として勧請したとも伝わる。祭神に、伊弉諾・伊弉冉^{いざなぎ いざなみ}の両尊を祀る。かつては熊野大権現と称されたが、明治元年(一八六八)熊野大神と改称され、同六年(一八七三)村社となった。例祭は九月十九日に行われる。

境内に末社として、稻荷神社を含む三社を祀る。』(p 38)

神社の前には力石が奉納されています。

◎御嶽神社^{みたけ}

11 雨乞い (26) 16 おみたらし (36) 74 しし穴の話 (165)

よもやまばなし「雨乞い」「おみたらし」とともに御嶽神社の湧き水の霊験の話です。おみたらしは眼病に効きました。現在もわずかですが霊水は湧きだしています。現在、神社は蔵敷の狭山丘陵南麓に東向きに社が建てられています。新編武蔵風土記稿は

御嶽社 東の方にあり、小祠にて九尺に二間の覆屋を設く、南向

とあります。「狭山之栞」には『御嶽神社の地中樫^{もみ}の大木廻り一丈七尺余』

とあります。御嶽神社の鎮座する谷戸は「しし穴の話」で千光谷と呼ばれ、行者の「千光坊」が住んでいたところです。また、蔵敷村にはもう一人「玉泉坊」という行者が活動していました(蔵敷庚申塚にある碑)。この碑は「湯殿山大権現」で天明2年(1782)銘があります。

御嶽神社の過去の記録は非常にさっぱりしていて、この神社の由来を明確に出来ません。青梅の御嶽神社およびその修験道と「千光坊」が何らかの関係を持つとすれば、また湯殿山の修験道と「玉泉坊」との関係が明らかになれば、新たな面の歴史が迎えそうで研究が待たれます。



御嶽社は狭山丘陵の中腹にあります。



「雨乞い」「おみたらし」の湧き水

◎巖島神社^{いつくしま}

90 貯水槽になった弁天池 (198)

よもやまばなし「貯水槽になった弁天池」は巖島神社の弁天池で、子供が大蛇に吞まれたこと、

時代が変わってその池が底の無い防火貯水槽になったことを話題とします。

厳島神社は蔵敷の狭山丘陵南麓に鎮座する弁天様を祭神とする神社です。新編武蔵風土記稿は

弁天社 除地、字弁天山にあり、一尺五寸の小祠にて、二間四方の上屋を設く、寛永六年鎮座せしといへど、其詳なることを伝へず、

とし、「狭山之栞」は

弁財天女の祠は内野氏宅の乾^{いぬい}にあり。昔同氏の創建なりしが、天保14年再建す。維新の際、厳島大明神と改称す

とあります。なお、天正6年（1588）創建説などがあります。祭神は市杵島姫命を祀ります。谷戸の水源確保に、村の人々の願いが強く深いものがあつたことの反映でしょうか。



左画像 厳島神社



右画像 貯水槽になった弁天池

◎太子堂

蔵敷に聖徳太子を祀る太子堂があります。寺子屋、明治の学制発布による学校となり、村の教育機関でもありました。上に紹介した、将軍地蔵が入り口向かって右に地蔵尊とともに祀られています。堂の裏側に洞窟があり、ここで、芋窪礫層を見ることが出来ます。

東大和市史資料編8では、聖徳太子の信仰について

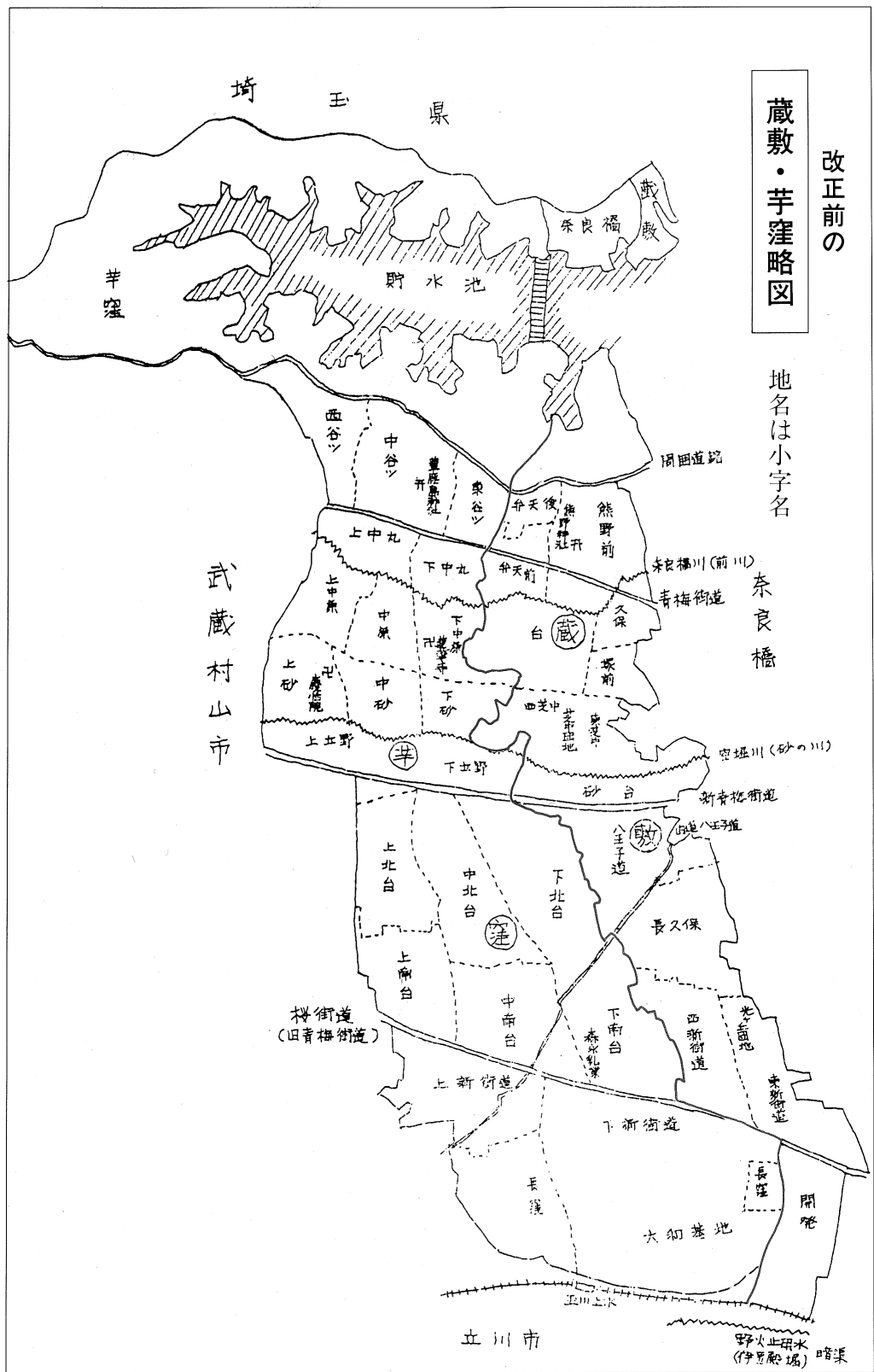
『聖徳太子は仏教とその思想において古くから日本仏教の祖として崇められ信仰の対象にされてきた。一方、近世になると、聖徳太子の建立した建築が火災を免れ、倒壊することなく千年の歴史に耐え抜いてきたことから、建築関係とくに大工、左官、建具などの職人たちから絶大なる信仰がもたれるようになり、聖徳太子の像を造りまつるようになった。』



とし、学問とともに職人たちからの信仰をあげています。また、太子堂の創建については、文化4年（1807）の普請入用をもとに、この時期を推定しています。新編武蔵風土記稿は次のように記し

『太子堂 是も東の方にあり、堂は三間に五間、本尊は立像にて長一尺三寸なるよしをいへど、秘仏なりとて見ることを許さず、』

として、本尊が秘仏であったことを伝えます。この像は盗難に遭い、現在は新しく購入された像が祀られています。



(東大和市史資料編 9 p 47)

(7) 芋久保村 (戸数 82 軒)

18 耳んだれさま (39) 24 ほっぼきの話 (52) 29 村山緋 (62) 38 ザンザラ (87)
40 乗合バス (91) 51 食べ物を運んでくれた天狗 (113) 56 親分とバクチの話 (123)
68 鹿島さまの櫓 (147) 73 藤兵衛さんと狼 (163) 75 頭(つちんど槌) (167)
77 きつねの嫁どり・きつねの嫁入り (171) 81 きつねの恩返し (179)
82 三本足のきつね (181) 91 鹿島さまの要石 (200) 95 いかづちさま (208)
96 かたき討の話 (209) 98 力石 (213)

○芋久保村は、郡の ^{うしとら} 良 にあり、村内鹿島神社に掛たる建武三年の鐘銘によれば、元は奈良橋村内に属せし地なるべけれど、一村となりし年暦は詳にせず、今は奈良橋郷に係り、庄名は唱へを失へり、江戸日本橋より九里半の行程なり、

名義は鹿島社の西方に古井戸の跡のこれり、この辺りはいかにも井戸を ^{うが} 鑿つことなし、かたきよし、旧くは井の窪、或いは井能窪とも記せるもの見ゆこれら村名の起こりしなどいへり、されど井をうかつことをなしがたきとき、井能窪と記せるなど云も、いかなるうえなるや覚束なし、

東は蔵舗村に続き、南は砂川村に境ひ、西は中藤村により、北は山上の峰を限りとして、入間郡勝楽寺村なり、東西凡七町、南北二十五町、

地形この辺は平なれど北方には山をうけたり、土性畑の方は野土にて祖薄なり、山根には真土の所もあり、民戸 1 4 0 烟、

陸田多く水田は山間に六町六段余を開けり、御入國以來延寶二年六月細井九右衛門、元禄三年八月今井九右衛門・近山五左衛門等、命を奉じて税務のことを検定せり、正保の頃は酒井郷藏・酒井極之助知行せしよし、今は酒井清次郎知行所なり、

高札場 鹿島神社の大門前にあり

小名 西谷戸 (西の方なり) 東谷戸 (東方を云)
鹿島谷戸 (村の中央なり) 石川 (北方なり)

山川 山 北の方にあり、登一二町

石川 小名石川の山間より出る小流なり、此外に悪水堀村中を流る、又溜め池七ヶ所あり、いずれもわずかなる池なり、



高札場があったとされる鹿島神社の大門前

神社 鹿島神社、社地、一萬三千六百六十四坪、御朱印十三石、本社六尺上屋を設く、拝殿二間に五間半、幣殿二間に二間半、社傳を閲るに、慶雲四年の鎮座にて、武甕槌命 ^{たけみかづちのみこと} を祭神とし、神体は龍王丸とて、則武甕槌命の太刀なりしといへど、神主も拝することを得ざるよし、

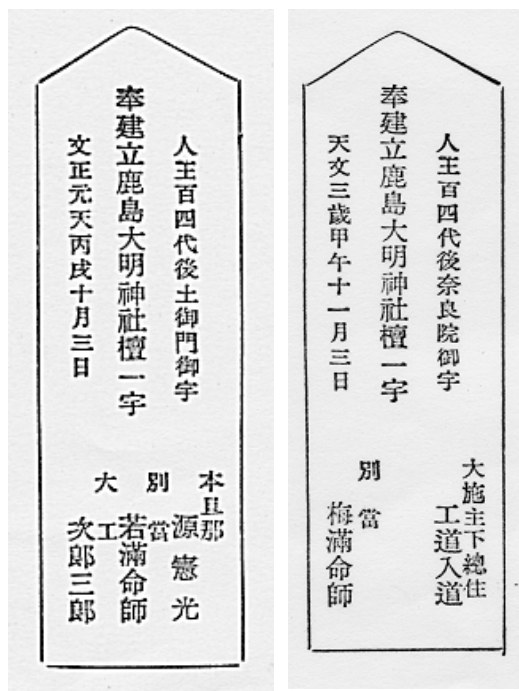
社を造立ありしは、天智天皇第四姫官なりしとも、又蘇我山田石河麻呂たりしとも記し、この外疑ふべきことをも記したれば、此社傳もいちいちには信すべからず、さはあれ後にのせたる文正・天文等の棟札あるをもて見れば、旧きよりの鎮座なりしことは知るべし、例祭は九月十五日なり、

神宝 武甕槌命鎧の袖 (5 寸許)、黄金石 (5 寸許)、錦几帳 (東照宮御寄進なし給ひしよし、外に尾州亜相公この辺遊覧の折柄、当社に詣て自ら書して賜ひしという歌などありと云))

鐘（大鐘なり、銘 別図）按するにここに載たる鐘銘に、多東郡上奈良橋村とあれば、当社草創の頃はこの辺り奈良橋村の内にて後 別に一村となりしに、其おりからこの社も今の如くこの地に属せしものたるべし、

又深井三郎光義といへる人は、外に所見なし、もし此社の棟札にしるせる、本且那源憲光といへるものも、深井の子孫なるにや、これらのことその徴とすべきものあらざれば今より知りがたし、又此鐘社頭につけおきしを、いつの頃にかありけん 奪はれて今はなし、ただ鐘銘のみをかつたえり、

奉納撞鐘一口
鹿島太神宮神前
建武三年三月十三日
武州多東郡上奈良橋村
深井三郎源光義妻敬白



新編武蔵風土記稿記載の豊鹿島神社棟札

末社 白山祠 子の神祠 山王祠（本社を左右にあり、何れも僅かなる祠なり、

神主 石井市之進 社地の西方に住めり、此人の先祖石川出羽守は、ここの地頭酒井某と共に、大阪御陣にも出たりなどいへど、させる記録はなし、

石 社前の原上むはら生ひ茂れる中にあり、要石と称す、其さまをいはば、長さ二尺五寸許、横四尺許、経一尺五寸、黒色にしていと潤澤あり、

かかる田間にありては、耕作の妨たりとて、いつの頃か百姓等よりつどひ、穿ちすてんとせしに、地下に至るほど石の形ますます大にして、たやすく掘得べきにも非れば、是より土人 要石と称せる名を得たりと、村老の口碑にのこれり、按るにこの石適々 鹿嶋社前にあれば、かかる話を附會せしにや、覺束なし、

寺院 愛染院、除地、六畝、字前坂にあり、石澤山蓮華寺と号す、真言宗新義、中藤村真福寺の末、開山開基の年◎を伝えず、本堂八間半に七間東向、本尊不動木の立像長一尺三寸なるを安せり、

医王寺 除地、五畝十八歩、字石川にあり、白部山慶性院と号す、これも同寺の末、開山承秀 慶長六年十一月二十八日寂せり、本堂 五間に八間南向、本尊薬師 木の立像長一尺六寸、行基の作を置き、鐘楼に鐘を掛たれども、正徳年中の新鑄なり、ことに考証とすべきことなければ、銘文はとらず、

観音堂 字林と云所にあり、三間に三間半、観音は如意輪にて、長九寸許、行基の作なりと云、

五輪塔 字杉山と云所にあり、ここの地頭酒井極之助が先祖の墳墓なり、往古はこの所に居住せしよし、その地を今陣屋と字せり、

○「狭山之栞」は、この他に

神祠（子神、石神、滝澤、山王、弁天、稻荷、大六天、羽黒、神明、熊野、愛宕）
を記しています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

◎芋窪村（戸数 82 軒）

村名の由来を新編武蔵風土記稿は「旧くは井の窪、或いは井能窪とも記せるもの見ゆこれら村名の起こりしなどいへり、されど井をうかつことをなしがたきとき、井能窪と記せるなど云も、いかなるうえなるや覚束なし、」としています。武蔵名所図絵は

『芋窪村 山口領なり。往古は井野窪と唱えしなり、いつの頃よりか芋窪と五音の転じたるなり。』
としています。日高市にも「芋窪村」があり、これから研究される項目です。

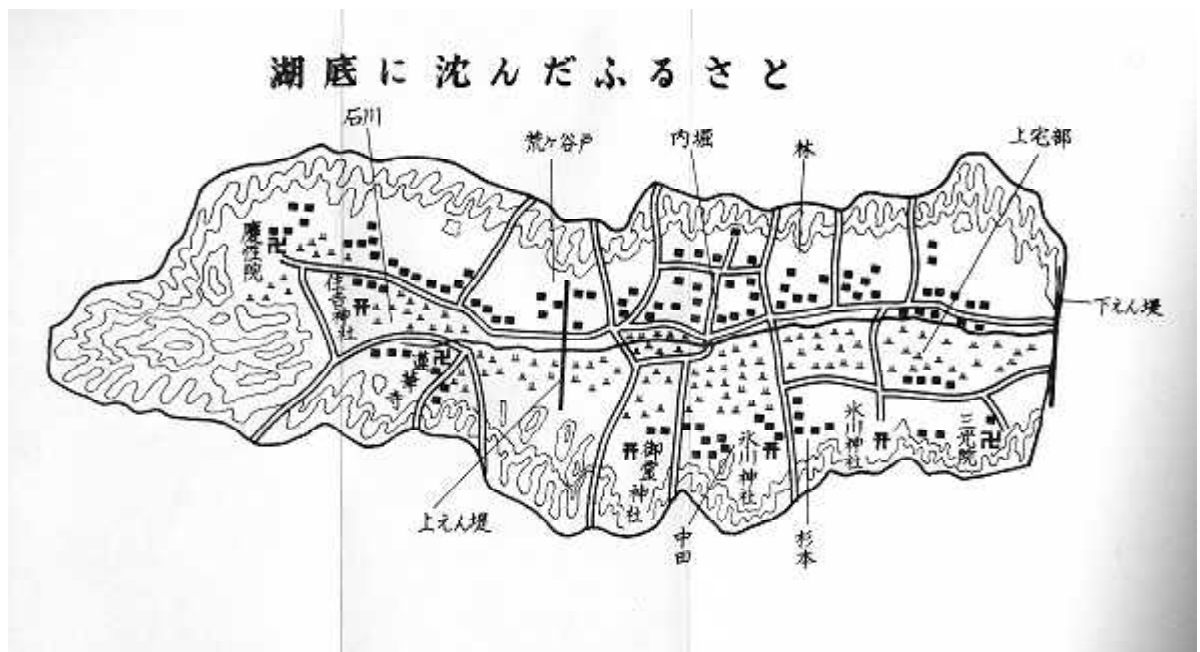
豊鹿島神社の創建棟札に、「上奈良橋郷」の記載があり、文政元年（1466）当時は、狭山丘陵南麓には西から、村山郷、上奈良橋郷、宅部郷とあったことがわかり、注目されています。

芋窪村は貯水池に沈んだ部分に「石川」があつて、狭山丘陵南麓に三つの谷ツ（西、中、東）があり、これらが一緒になって村を構成していました。「狭山之栞」では

石川 蓮花寺 慶性院 住吉神社

狭山丘陵南麓 豊鹿島神社 要石 伊豆殿堀（野火止用水） 林堂 神祠（子神、石神、滝澤、
山王、弁天、稻荷、大六天、羽黒、神明、熊野、愛宕）

をあげています。冒頭にあげたように、多くの「よもやまばなし」が残り、この両地域にわたって興味ある伝承を残しています。



貯水池に沈んだ石川の位置図 内堀小重郎 湖底に沈んだふるさと

◎豊鹿島神社

18 耳んだれさま (39)	68 鹿島さまの櫓 (147)	91 鹿島さまの要石 (200)
96 かたき討の話 (209)	98 力石 (213)	

よもやまばなし「耳んだれさま」は中耳炎に御利益がありました。「鹿島さまの櫓」は樹齢千余年で、創建の古さを証し、勢いよく水を吸い上げる音が聞こえました。「鹿島さまの要石」は虫占いと神代の時代の伝承を伝えます。「かたき討の話」は蔵敷に豊鹿島神社が管理する芋窪の飛び地があつて、そこで、敵討ちが行われました。

神社本殿

東大和市で最古の創建伝承を持つのが豊鹿島神社です。伝承については第2編 歴史の流れの中で紹介します。ここでは、現在伝えられる本殿についてまとめます。

豊鹿島神社は立派な社殿を構えていて、本殿はこの建物の中、拝殿の奥にあります。



豊鹿島神社全景 正面に見える社殿の中に右画像の本殿がある。本殿は東京都内で最古の室町時代神社建築として東京都の指定文化財に指定されています。



本殿がいつつくられたのかについては、平成4年、本殿解体修理工事の時に、創建時と考えられる棟札が発見され

文正元年（1466）「鹿嶋大明神」本大檀那 源朝臣憲光 別当若満命姉

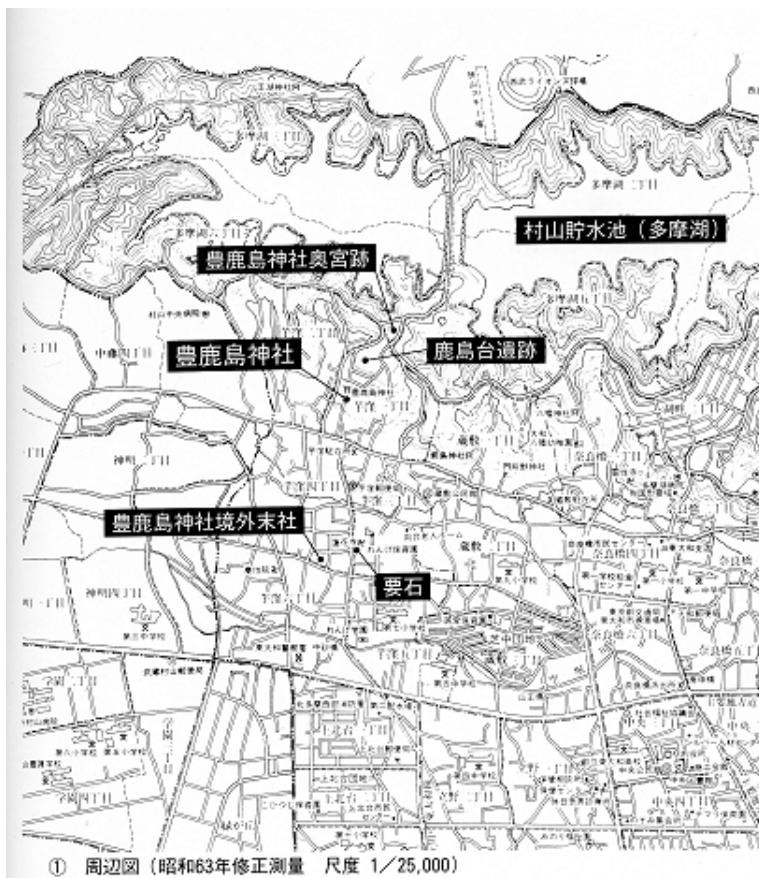
の記載があることがわかりました。東京都内では最古の室町時代神社建築で、東京都の指定文化財となっています。その説明書には、次のように書かれています。

『本殿は一間社流造で、都内に現存する最古、かつ唯一の室町時代に建立された神社本殿です。その規模は、桁行(間口)が 170.7cm、身舎の梁間(奥行)が 152.4cm、向拝の梁間はやや狭くて 140.4cm です。』

この本殿の建築年代は、社家に伝わり、本殿内に保管されていた天文19年(1550)の棟札をもって建立されたと考えられてきました。しかし、解体修理時に発見された棟札により、文正元年(1466)に大工二郎三郎近吉の手により建立されたことが明らかとなりました。同時に、古くは屋根が厚板葺きであったことも判明しました。』

武蔵名勝図絵には、建武3年（1336）の銘を持つ鐘があつたとして次のように記します。

『鐘社頭。鐘銘「奉撞鐘一口、鹿島大神宮神前、建武三子年(一三三六)三月十二日、武州多東郡



正保3年(1646) 武州多摩府上奈良橋郷
文化5年(1808) 武州多摩郡芋窪村

上奈良橋村、井沢三郎源光義妻敬白
鐘銘に上奈良橋村とあれば、建武の
頃は斯く号せしにや。数百年前のこ
となれば、さもありぬべし。この鐘
は四、五十年以前に盗人のために失
せしとなり。惜しむべきことなり。』

祭神の武御加豆智命は常陸一宮
「鹿島神宮」に祀られる建御雷命と
同じ神で、中臣・藤原氏の氏神です。
中臣氏は大化改新の中臣鎌足で、6
69年藤原姓を賜り、神事は中臣、
政治は藤原としました。「豊鹿島神
社」と「豊」がつくのは、明治以降
です。

豊鹿島神社は左図のように本社、
奥宮、要石と3カ所の史跡により、
その規模を知ることができます。ま
た、96かたき討の話(209)では、
蔵敷に豊鹿島神社管理の飛び地があ
ったことを伝えます。

この地域は縄文時代からの遺跡が
集中するところで、本社と奥宮の間
に規模の大きい「鹿島台遺跡」があ
ります。

左図は明治15年の状況を示し、
貯水池に沈む前の丘陵の中の集落と
の関係がわかります。

図は豊鹿島神社本殿修理工事報告
書から引用させていただきました。

上奈良橋郷

重要なことは神社に保存されてい
る創建棟札以降の棟札に、次の地名
が記載されていることです。

文政元年(1466) 武州多東
郡上奈良橋郷

天文19年(1550) 武州多東
郡上奈良橋郷

天正4年(1576) 武州多東
郡上奈良橋郷

慶長6年(1601) 武州多東
郡奈良橋内芋窪

このように、文政時代には「武州多東郡上奈良橋郷」と云う「郷」があったことがわかります。狭山丘陵南側の郷は西から「村山郷」「宅部郷」の存在が別の資料からわかっていました。「上奈良橋郷」はこの棟札を中心にしてその存在が明確になりました。東大和市域は、最も小さい範囲でも「上奈良橋郷」と「宅部郷」があったことがはっきりします。また、慶長になって「奈良橋内芋窪」が出てきています。これが何を意味するのか、どの範囲で、他の郷との関係などは不明です。前ページ下図はおおむねその範囲を示します。

神主は「大阪御陣」に出陣

新編武蔵風土記稿は豊鹿島神社の神官について次のように記しています。

『石井市之進 社地の西方に住めり、此人の先祖石川出羽守は、ここの地頭酒井某と共に、大阪御陣にも出たりなどいへど、させる記録はなし、』

新編武蔵風土記稿が伝える「大阪御陣」は慶長19年（1614）、元和元年（1615）に起こった豊臣秀頼と家康の戦いです。この戦いに神主は地頭と一緒に出陣したことになります。石井神主は先祖が石川出羽守という名前からも武士の出身であることが推定されます。

いずれかの武士階級の出身者が帰農して谷ツの集落を興し、実力者（土豪）となって村を指導していたのでしょうか。

◎要石

現在の蓮花寺の南側に豊鹿島神社の要石があります。神話の時代の伝承を伝えるものです。第2編歴史の流れの中で、まとめます。

◎観音堂・林堂

狭山三十三観音十九番札所で、建て替えられて現地にあります。東大和市域内最後で、次は武蔵村山市中藤の真福寺になります。

東大和市教育委員会の説明版には

「・・・霊場は狭山丘陵周辺に点在し、武蔵野狭山観世音巡礼記序によれば、享保三年に指定されている。

観音巡りは、一人の人間としての安らぎを求めるためのもので、明治の中期ごろまで盛んであった。」と記されています。



◎石川

73 藤兵衛さんと狼（163）	75 槌頭(つちんど)（167）	95 いかづちさま（208）
-----------------	------------------	----------------

藤兵衛さんと狼、槌頭(つちんど)、「いかづちさま」などの伝承があり、東大和市の最も西に位置する地域です。石川（宅部川）と呼ばれる川の源流部分になります。「狭山之葉」は石川について、次のように記します。

『此地は高反別戸数とも芋久保村に包含せらる。宅部川の水源は字槌が窪に発し、新ヶ谷戸内、宅部、清水、廻り田、野口の各村を経て入間郡久米村に至り柳瀬川に合流す。

昔、当地は人家を去ること十丁四方もあり、沼池の周囲には松柏生ひ茂り森々とせるため、水自ら満ちて大海の如く人跡絶えし幽谷をなし槌頭と云う大蛇棲息し、峰谷には猿鹿狐狸栖息し、従って谷水は早魃の折りも涸るなかりしが、元禄年間御料林払下げに相なるにつき、伐木するも故障なきや否やを訊したところ、差支なき旨答上せるため、立木を伐り払い、そのあとを農人持とせる

がために、池水自ら減じ、大蛇なども何処へか姿をかくしたりと云い伝ふ。槌の窪と呼びしは、槌の形をしたる頭の蛇棲める故なりと』

また、石川は、豊鹿島神社を創建した「石川麻呂（麻呂・麿）」の居住地と伝えられます。武蔵名勝図絵は

『村内の小名に石川という地あり。村の北方にて、狭山続きの山なり。広さ二町程なり。往古ここに石川入道というもの居住せし跡なりと云。馬場の跡あり。年代不知。』
としています。

◎八雲住吉神社

73 藤兵衛さんと狼（163）

よもやまばなし「藤兵衛さんと狼」は、木こりの藤兵衛さんが住吉様が祀られる石川（貯水池に沈んだ）に住み、狼を助ける話です。そして、藤兵衛さんが祀った「大口真神」の祠は、貯水池建設により住吉様と一緒に原に移転しました。「大口真神」は御嶽神社（青梅市）のお使いの狼が御神像になっています。「狭山之栞」は

『住吉神社は当地の鎮守なり。祭神底筒男命、中筒男命、表筒男命、素戔鳴尊等なり。』と記しています。地元では「天王様」と呼んでいます。



現在の住吉神社は通称四街道、豊鹿島神社関連図で、要石の左に「豊鹿島神社境外末社」と記入されたところにあります。



鳥居の正面が住吉神社で、その左側に、藤兵衛さんの「大口真神」が祀られています。その左側にいくつかの石碑があり、95 いかづちさま（208）は中央に祀られています。

◎蓮花寺

貯水池に沈んだ石川にありました。大正12年、貯水地の建設にともない現在地に移転しました。右図は移転前の写生画です。東大和市史資料編8では、

『芋窪三丁目一六一五番地 新義真言宗、豊山派。本尊・不動三尊。石澤山愛染院と号す。中藤村・真福寺の末。

寛永八年(一六三一)四月十二日入寂した承雲を中興開祖とするが、当寺の草創・開山、開基は不詳である。寺記によれば、承雲の入滅に先立つ寛永六年(一、六二九)十一月に検地のことがあり、寺屋敷ともに畑四畝二十四歩が蓮華坊へ下付されている。

その後寛保三年(一七四三)十一月二日。法印賢真の代にいたり、中藤村真福寺法印宥範より印可を受けたと伝えられる。このことをもって法流開基とする。天保十年(一八三九)に火災があり、同十四年に再建されている。それまでも火災にまわれ、あるいは無住の時期(天保八、九年の頃)もあるなど荒廃をくりかえしてきた。』(p53)

としています。自由民権運動に関して、明治11年1月17日、ここで、結社「衆楽会」を結成して学習会を開催しました。これが、現在では三多摩自由民権運動の一番最初の学習会とされます。

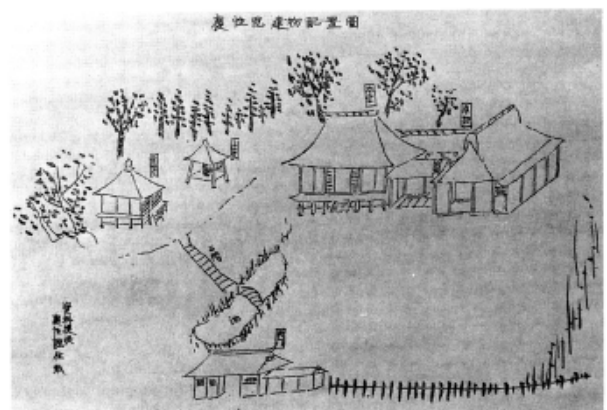
また、昭和19年(1944)、第二次世界大戦の最中、都内赤坂小学校の児童の集団疎開を受入れ、翌年には戦災孤児となった13名の子供たちの世話をしました。

◎慶性院

貯水池に沈んだ石川にあり、東大和市域では最も西に位置して、勝楽寺村とは峰続きでした。大正11年に、芋窪6丁目1353番地に移転しました。白部山慶性院の院号から慶長年代の創建を指摘されます。豊鹿島神社に白山神社が合祀されていますが、「狭山之栞」の記述と併せ、この寺との関係を指摘する人もいます。

真義真言宗、豊山派 本尊 不動明王 中藤村真福寺の末。「狭山之栞」には創建を天文16年(1547)以前とし、「地内白山神社ある故、白部山と号し薬師堂あるにつき医王寺と呼ぶ。」とします。

旧地にあった配置図から山門を入ると正面に本堂があり、左側に池、石段を上がって薬師堂が見えます。山門は村山貯水池上堰堤湖畔に復元されています。



慶性院には「水天像」が祀られています。東大和市教育委員会の説明があつて

「この水天像は慶性院の第十九世住職円鏡法印慈賢が江戸時代末期に建立したものである。

水天は、世界を守護する十二天の一つで、水難除けや雨乞いの祈願の対象となるため、池や川の



水天像

ほとりに建てられる例が多い。この像は大正十一年（1922）村山貯水池建設に伴って寺が移転した際、現在地に移されたものである。

水天像は、全国的にも例が少なく、都内に存在する三基の中の一基で、きわめて貴重である。」として市の重宝に指定（昭和 58 年）されています。



移築された慶性門

◎槌頭（つちんど）

石川には興味ある伝承が残りますが、槌頭は大蛇の話とともに、石川の谷の奥が御料林になっていたことを伝え貴重です。よもやまばなしは次のように紹介します。

『貯水池に沈んでしまった村に石川という所がありました。石川には池がたくさんあり、槌ヶ窪の池もその一つです。昔、槌ヶ窪の池の廻りはずっと家がなく、松が生い茂り灌木があたりをふさいでいました。山には猿や狐、狸などが棲み、深い谷には人影もなく林と池に囲まれていました。水は海のように豊かに、ひでりの時も洞れることなく四季の姿をうつしたそうです。』

そこに槌頭という大蛇が棲んでいました。槌頭とは頭が槌の形をした蛇で、槌ヶ窪の地名の由来ともいわれます。その蛇が槌ヶ窪の主だったのでしょいか。元禄年間御料林の払下げがあり、立木を伐り払うと池の水はへり、大蛇はどこかへ行ってしまい再びその姿を見た者はないといひます。』

◎新編武蔵風土記稿

1828 年（文政 11）成立。昌平覺地理局總裁林述斎編。全 265 卷。武蔵国の総国図説から建置沿革、山川、名所、産物、芸文と各郡村里に分かれている。文書や記録も収録され、村の地勢、領主、小名、寺社、山川や物産等の記述は詳細で正確である。幕府官選の地誌として武蔵国研究にとって重要な史料。《大日本地誌大系》所収。神崎 彰利（平凡社 世界大百科）

◎武蔵名所図絵

多摩地域を中心とした地誌で、植田孟縉（八王子千人同心組頭）が文政 6 年（1823）に著しました。「新編武蔵風土記稿」の編纂に八王子千人同心が携わりましたが、その際の副産物とも云われます。

◎「狭山之栞」

後ヶ谷村の名主杉本林志が狭山丘陵を中心とする周辺の村々の歴史をまとめたものです。江戸末期から明治初年にかけての様子が細かく描かれています。明治 14 ～ 5 年に書き上げたとされます。

第2編 歴史の流れの中で

第1章 鹿島さまの要石 でいだらの井戸(前史)

(1) 鹿島さまの祭神・建御雷命たけみかづちのみことが船をつないだところ

91 鹿島さまの要石 (200)

①「建御雷命」の伝承

東大和のよもやまばなし「鹿島さまの要石かなめいし」は、「虫占い」と「建御雷命」の伝承を伝えます。

『・・・、大古の昔このあたりが海だったころ、建御雷命が東国に降った折に、船をつないだのがこの石だという伝説もあります。』

よもやまばなしはこのように伝えます。芋窪街道、奈良橋川の南、蓮花寺に南接した森の中に鳥居があり、小さな祠が祀られていて、そのもとに要石はあります。

鹿島さまは芋窪に所在する豊鹿島神社です。その祭神が「建御雷命」「武御加豆智命」です。「建御雷命」は古事記、日本書紀に記載される神です。古事記では「葦原中国平定」の項に、荒ぶる神々を制圧して、建御名方神との戦いに勝利して、葦原中国を平定した神とされています。「建御雷神」と「建御名方神」との戦の情景は次のように描かれます。

建御雷之男神が建御名方神に国譲りを迫ります。建御名方神は巨大な岩を抱えて来て、「然らば力競べせむ」と云って建御雷之男神の手を握ると、たちまちその手は、氷柱と剣の刃に変化します。次に、建御雷之男神が建御名方神の手を握ると、建御名方神の手は葦の若葉をつかむように握りつぶされ、放り出されました。

建御名方神は逃げ出し、建御雷之男神が追いかけます。二人は諏訪湖までやってきて、建御名方神が建御雷之男神に、「私はもう諏訪を離れてはどこにも行きません」と嘆願して戦いが終わります。要石はこの時に「建御雷命」が東国に来て船を繋いだとするものです。

東大和市にこのような神話からの伝承があるのは、豊鹿島神社と常陸一宮の「鹿島神宮」が密接に関係するところにあります。神社名が同一であること、「鹿島神宮」の祭神が武甕槌大神で、祭神が一致することです。現在、「豊鹿島神社」となっていますが、創建当時は「鹿嶋大明神」でした。そのことは創建棟札によってわかります。

文正元年（1466）「鹿嶋大明神」本大檀那 源朝臣憲光
別当若満命姉

とあります。なお、豊鹿島神社の創建について「武蔵名勝図絵」は左のような伝承を伝えます。

『社伝は云う。当社は慶雲4年（707）丁未ひのとひつじ、武蔵国うしどろへ鬼神が来たとき、常陸の峯にて鬼神を鎮め給ふ。今、鹿島の良（北東）の



社伝云当社者慶雲四年（七〇七）丁未武蔵国江鬼神来留
時、常陸峯仁天鬼神鎮給婦。今、鹿島之良之方二町仁有六
本松。登云御陣場登言伝婦。天智天皇第四之姫宮、又蘇我
山田石川麿登申須人建立也。今、祭礼仁獅子舞有。其獅子
之頭三面奈留乎用油。是者鬼神之頭三面仁志氏身長一丈六尺
有利志鬼神也。夫乎鎮給婦古例奈利登楚。

方、二町（220町）に六本松がある。登りて「御陣場」と云うと伝ふ。天智天皇第四之姫宮、又、蘇我山田石川麿と申す人の建立なり。今、祭礼に獅子舞あり、その獅子の頭が三面であるのをを用いる。是は鬼神の頭が三面にして、身長が一丈六尺有りし鬼神である（ことによる）。それを鎮め給ふ古例なりとぞ。』

「常陸の峯に鬼神を鎮め給ふ」に何らかの関連づけをしていることも考えられます。「鹿島神宮」では祭神を武神として祀っていることもあって、豊鹿島神社についても狭山丘陵に定着した中世武士団との関連が考えられています。

なお、神社の本殿は『・・・一間社流造で、都内に現存する最古、かつ唯一の室町時代に建立された神社本殿・・・』として、東京都の指定文化財となっています。

②海・渚の時代

鹿島さまの要石はこの地方がかって海であったことを伝えます。実際の歴史の上でも、海であり、渚の時代がありました。200 万年～ 100 万年前と考えられていますが、当時の貝の化石が貯水池に沈んだ地域で発見されています。また、地層調査（第一中学校プール付近）でも、明確にその時代の地層の状況を伝えます。「東大和市史資料編5 狭山丘陵と生きものたち」では、海と渚の時代を次のように図示しています。

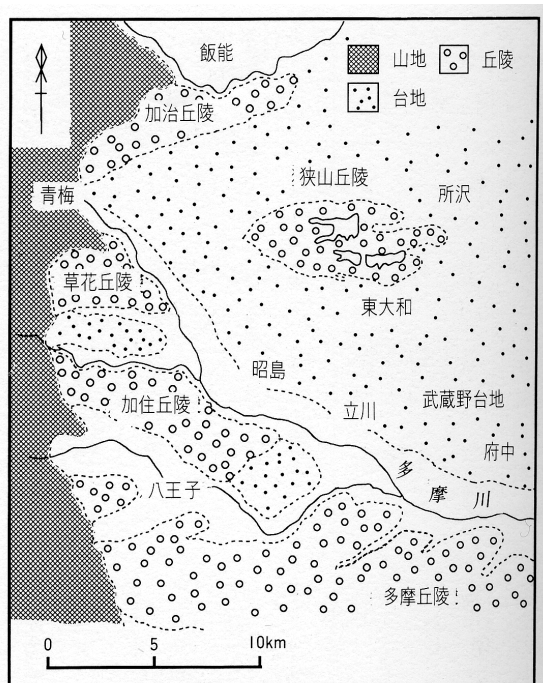


図1 関東平野西部の地形

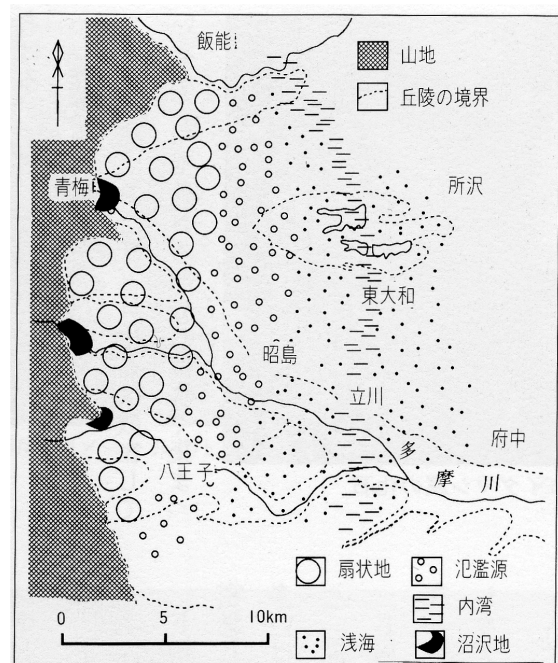


図8 関東平野西部の昔の様子
(50～200万年前)

東大和市史資料編5 狭山丘陵と生きものたち p 25～36



左 サメの骨（日野市 多摩川）



右 カキの化石（東大和市 多摩湖）

(2) 狭山丘陵の創成

85 でいだらの井戸 (186)

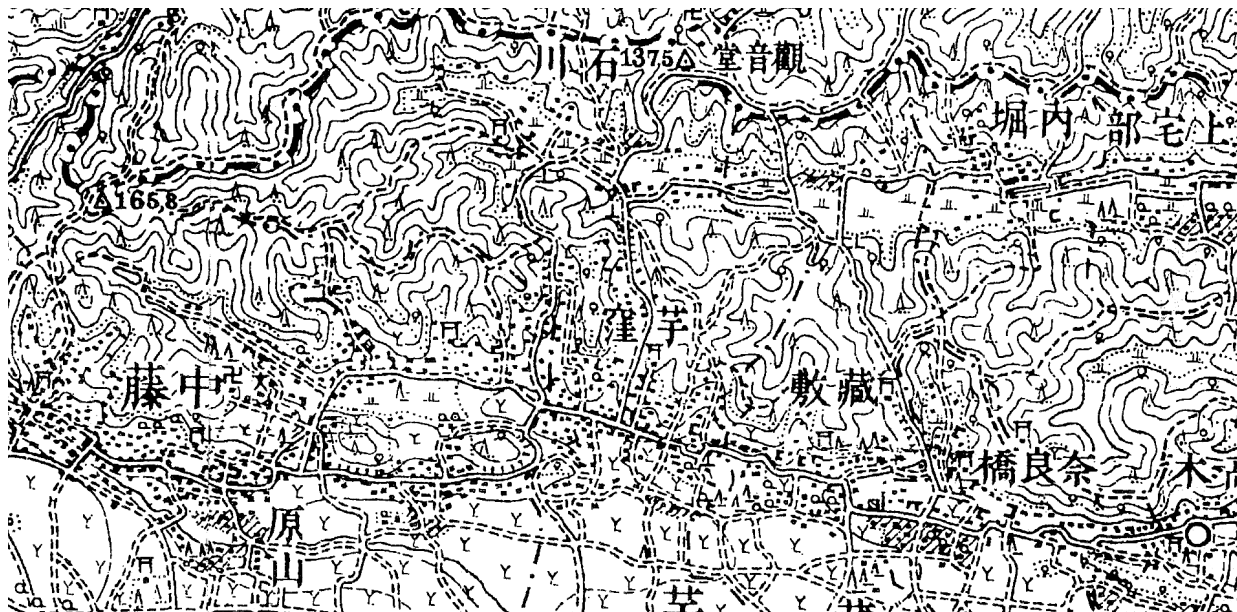
①大男の丘陵と井戸づくり

『大昔、狭山の山に“大平法師(だいだらぼっち)”という大力無双の大男が棲んでいました。ある時、なにを思ったかだいだらぼっち、藤づるで山をしょって、のっしのっしと歩いてきました。ところが丈夫なはずの藤づるがプツリと切れて、背中の山を落してしまいました。切れた藤づるは北の方角に投げ出され、それ以後不思議なことに北には藤が生えても、南には一本も生えなくなったということです。』

不意をつかれただいだらぼちは思わずのけぞり、ぐっとふんばった両足の跡が大きな穴になり、水が湧き出て井戸になりました。常に豊富な水を満々とたたえてかんばつの時も洞れることなく、近隣の人々は大変助かったといわれます。だいだらぼっちの恩恵に感謝して“でいだらの井戸”と名づけました。』

だいだらぼっち
「大平法師」は「丸山」・「向山」(武蔵村山市)をつくり、踏ん張った足跡が泉や井戸になったと伝えます。東大和市を生んだ母とも云える狭山丘陵とその南に広がる武蔵野の誕生にかかわる伝承です。

デイダラボッチ・ダイダラボッチの伝承は全国にあります。関東では、大男が富士山や榛名山をつくり、甲府盆地や榛名湖をつくります。狭山丘陵周辺では、狭山丘陵の一部をつくり、そこには、水が絶対に涸れない泉や井戸が生まれる話が共通します。「常陸国風土記」の「ダイタボウ」が原型ではないかとされます。



よもやまばなしでは武蔵村山市の丸山・向山の伝承を伝えますが、東大和市内では、貯水池に沈んだ内堀にありました。

『貯水池内に伝わった井戸は、内堀の通称「源氏」といわれる家にあった。この家は「縄大尽」ともいわれ、明治から杉本氏を名のっている。聞くとところによると、この井戸は「デンドロの井戸」と言い伝えてきた。周囲には大樺が立ち並び、常に清水が湧き出ていたという。・・・』

東大和市史資料編2105では、このように伝えます。隣接する武蔵村山市では、デイダラボッチが歩いた足跡に、神明ヶ谷戸、入り、赤堀、岸と連続して井戸がつくられる話となっています。狭山丘陵の水場を連ねていて、伝承としてばかりでなく、歴史的な意味を語るかのようで興味を惹

きます。

また、今は青梅街道が「丸山」・「向山」を切り通して、大曲となって通過していますが、明治までの交通は山越えか南麗を廻っていました。南麗の地域は芋窪と境界を接し、生活も共通性を持っていました。このようなところから、芋窪の人々も神明ヶ谷戸の井戸を使っていて、でいだらの井戸の伝承が伝えられているものと思われます。

②狭山丘陵と武蔵野台地

海の時代に続いて狭山丘陵と武蔵野台地が誕生しました。

狭山丘陵が形成されたのは、50 万年～ 30 万年前とされます。どのように形成されていったのかは、次のように考えられています。
(右図は東村山市史通史編上 p 55)

図のように、狭山丘陵は周辺の草花丘陵（多摩川南岸）、加住丘陵、多摩丘陵、加治丘陵（霞川の北岸）などほぼ同じ地質で同じような高さであることがわかっています。

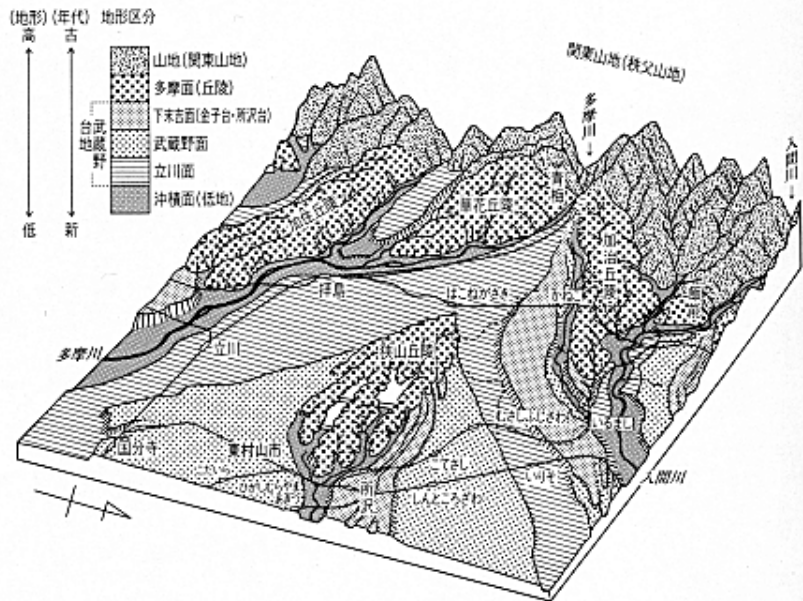


図 1-11 武蔵野台地西部の模式鳥瞰図

小田部、1997(1)をもとに作成

そして、青梅を扇の要として扇状地（三角州）が広

（洪積世の中頃）がります。このことから、狭山丘陵は海の時代の後、「古多摩川」が削り残した丘陵とされます。そして

①陸地に多摩川などの河川が流れ、砂礫や粘土を堆積した。（芋窪礫層が堆積した）

②河川の浸食作用が進み、丘陵の原型ができた。

草花丘陵 加住丘陵 多摩丘陵 加治丘陵

③火山灰が降り「多摩ローム層」ができた。これが武蔵野台地の原型となった。「多摩ローム層」の下に芋窪礫層がある

④多摩川が移った→崖線ができた（国分寺崖線 府中崖線）

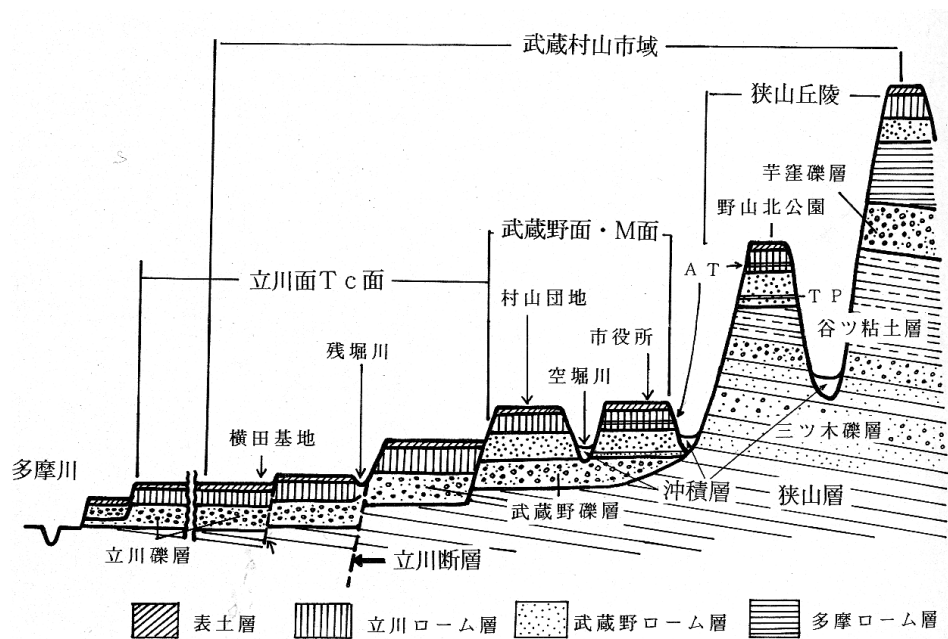
⑤多摩川が移ったあとに火山灰が降った（4回）。

その火山灰が武蔵野台地のそれぞれの地層となった



芋窪礫層

との経過を辿って丘陵と武蔵野台地が出来上がりました。東大和市にはその過程を示す貴重な礫層が残されています。海の時代後に川が運んで積み残された礫層で、その上に、その後降った火山灰が堆積して「多摩ローム層」を形成していることから、丘陵形成のメカニズムがはっきりされてきました。芋窪から蔵敷にかけて、丘陵の根本部分で見られるところから「芋窪礫層」と名づける名称を得ています。



図I-3 武蔵村山市の地形断面模式図

(武蔵村山市史 通史編 上 p 5)

各地層の積み重なるの状況については、武蔵村山市史が上の断面模式図を発表しています。このそれぞれの地表に人が住み始めたのは、現在の所、約3万年前と考えられています。

第2章 籐兵衛さんと狼 ばばあのおふところ 出ば出ろ (東大和の地形・古代)

(1) 狭山丘陵の谷戸と集落

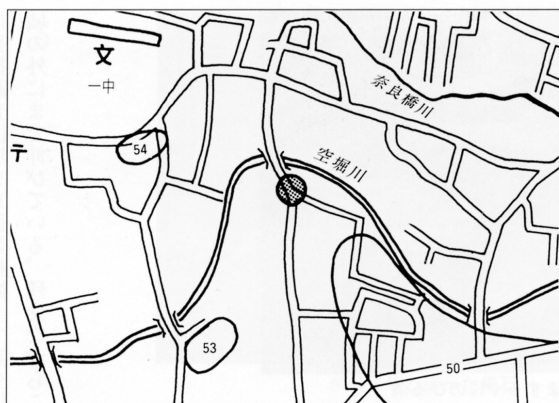
75 槌頭(つちんど) (167)	73 籐兵衛さんと狼 (163)	100 ばばあのおふところ (218)
32 三光院の鐘 (70)	52 出ば出ろ (115)	74 しし穴の話 (165)

囲みの中の「よもやまばなし」は東大和市の特徴的な地名が出てくる話です。石川、宅部、千光ヶ谷、雁ヶ谷戸、姥がふところなどです。東大和市の歴史は貯水池に沈んだ石川～宅部、丘陵南麓の谷戸から始まります。

「よもやまばなし」の話題は、ほぼ江戸時代から始まっていますが、よもやまばなしの主人公達は、まだ発見されていない話題を早く発見してくれるのを待ち望んでいると思われますので、人の活動の跡が残されている最初に遡ってみます。

①旧石器時代

東大和市域に人が住み始めたのは、現在のところ、今から約1万5千年～2万年前(旧石器時代)とされます。狭山丘陵と空堀川の周辺に遺跡が残されています。



左 第一中学校の東南にある遺跡の位置

右 旧石器人が残した暖房か蒸し焼きに使った礫



市内最古の石器

いずれも東大和市史資料編3 発掘された先人のくらしから引用

狩猟採集を中心とする生活で、石器を中心とし、土器の使用はなかったとされます。発見された遺跡は、移動途中のキャンプの場ではないかとの説があります。

②縄文時代

旧石器時代の次に、縄文時代に入ります。縄目模様の土器を使い、丘陵の日だまりに、素堀の床に、炉をもった竪穴住居が発見されています。紀元前1万年前から、約1万年続く長い時代です。

狭山丘陵は「縄文銀座」と云われるように一挙に人が活動しました。東大和市の場合、約5千年前の縄文中期に、狭山丘陵の南斜面を中心に急速に活動の場が広がったようです。

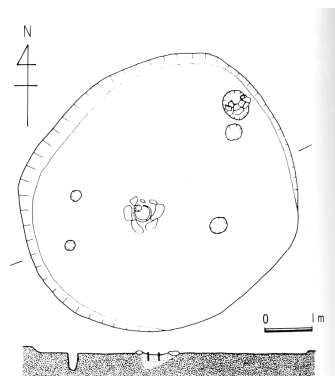
東大和市の縄文時代中期の代表的遺跡である諏訪山遺跡の一例を紹介します。



諏訪山遺跡の位置



I号住の石囲炉



住居の状況

約3千年前の晩期になると、東大和市では急速に活動の跡がたどれなくなり、近くでは東村山の下宅部遺跡や武蔵村山市の吉祥山遺跡ぐらいに限定されてきます。東村山市の下宅部遺跡では、漆塗りの弓や加工した木材、河川を利用した食物の渋やアク抜きのためのさらし場などが設けられています。

③東大和市の最初の発掘者

「狭山之栞」に次のような記事があります。

『明治二年巳三月内野清左衛門宅地の良方に里長杢左衛門の私有地あり、自庭の普請の為に彼地の土を取りしに深八尺許の下に灰あり、長さ九尺程の筋目になり連るを調べみるに、栗殻か笹をもやしたる如く節あり。又丸石一筐程出づ。其外挽臼の碎け挿鉢のかけなどもありしが昔何に用ゐしか知る人なし。』

これは、縄文時代の竪穴住居跡の可能性が高いと考えられています。とすれば、偶然ですが、東大和市最初の発掘者になりそうです。

③弥生時代

狭山丘陵周辺では、縄文時代人とは入れ替わるように、米作の技術を持った人々が新たに定着する時代が来ます。土器の形式から弥生時代と呼ばれますが、残念ながら、東大和市では遺跡が見つかりません。



現在の所、狭山丘陵周辺で発掘された遺跡は図のような分布をしています。

- 1 吉祥山遺跡（武蔵村山市）
- 2 後ヶ谷戸遺跡（武蔵村山市 溝状遺構 集落 の水路か？）
狭山遺跡B（瑞穂町）
- 3 日向遺跡（所沢市 三ヶ島 住居址13軒）
- 4 椿峰遺跡（所沢市）
宮前遺跡（所沢市 北野 方形周溝墓3基）
馬先遺跡（所沢市 北野 住居址5軒）
台遺跡（所沢市 堀之内 住居址2軒 古墳 時代に連なる）
あすまのうえ 東の上遺跡（所沢市 久米 住居址13軒）

いずれも河川と重要な関係を持ち、その源流に近いところに位置しています。これからすると、東大和市では、槌頭(つちんど)や藤兵衛さんと狼の話に出てくる、貯水池に沈んだ「石川」(宅部川)にその可能性を考えることが出来ます。所沢市の様子を描いたイラストが発表されていますが、いわゆる「谷戸田」であり、東大和市の江戸時代の様子によく似ています。



所沢市教育委員会 ぼくらの祖先達は一日向遺跡編—p 20—21

④古墳時代

次の時代は、弥生時代とは格段に生産・生活基盤が整備されて、特定の指導者に権力が集中し、その指導者が埋葬されたお墓のあり方で時代を区切る古墳時代となります。早いところでは掘っ立て柱の住宅がつくられ、堅穴でも、きちんとしたカマドを持ち、炊飯、蒸し器、衣料など生活用品は豊かになります。

東大和市域内の村々にもいくつかの塚の名が残されていますが、残念ながら、古墳とは考えられません。狭山丘陵では、その遺跡は弥生時代と重なるように下図の通り、河川の上流に面したところに立地しています。



古墳

7	所沢市山口	山下後遺跡	円墳	2基	7世紀中葉
	所沢市柳瀬	滝之城横穴墓群		7基	7世紀中葉
9	所沢市北秋津	北秋津横穴墓群		1基	7世紀中葉

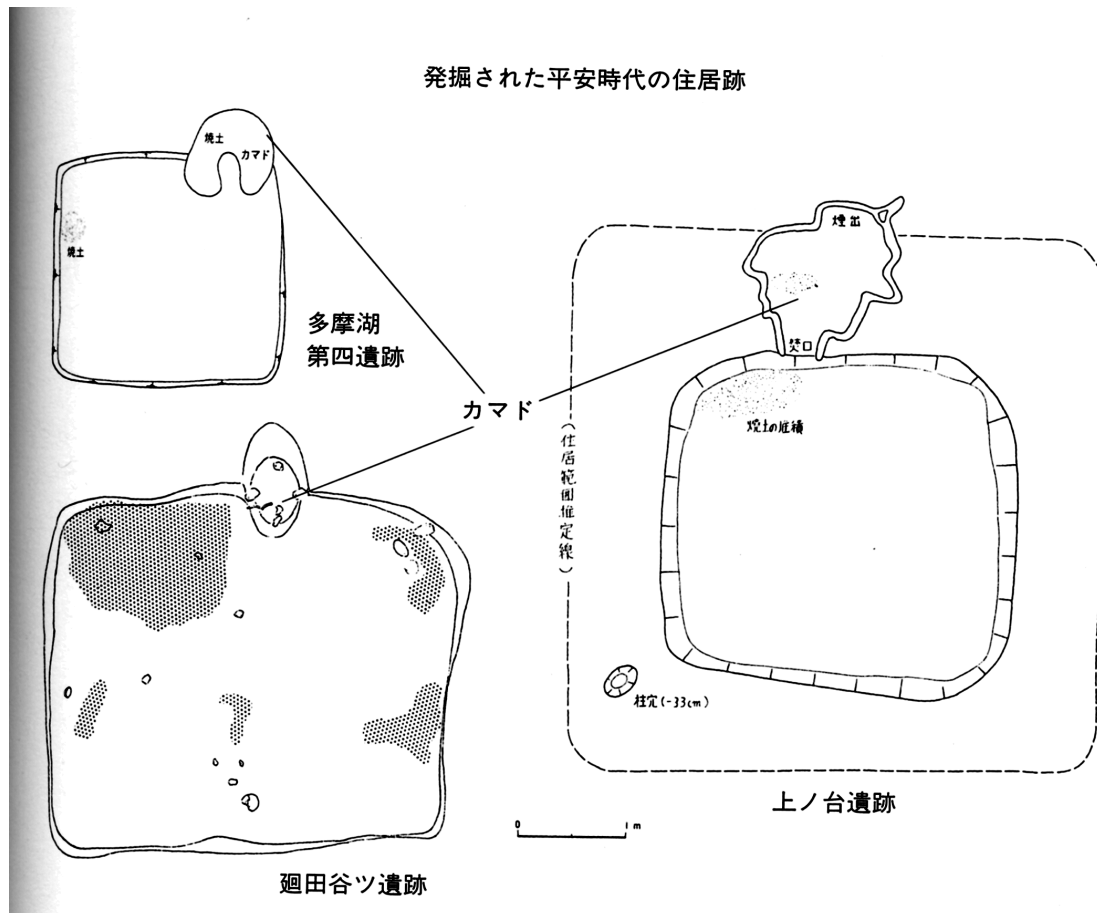
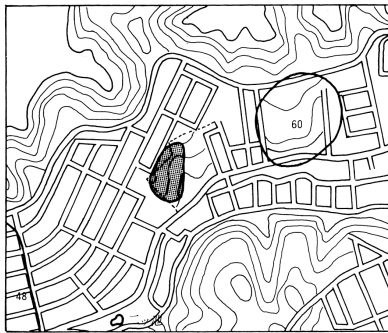
集落、住居跡

1	日向北遺跡	かまど跡	鬼高期	東村山市多摩湖町
2	吉祥山遺跡	火災住居址と生活跡	鬼高期	武蔵村山市中藤
3	後が谷戸遺跡	流路、溝（木製品土器片）		武蔵村山市岸
4	お伊勢山遺跡	住居址	1 4軒 和泉、鬼高期	所沢市三ヶ島
5	日向遺跡	住居址	2 4軒 鬼高期	所沢市三ヶ島
6	高峰遺跡	住居址	3 3軒 和泉、鬼高期	所沢市北野
6	野竹遺跡	住居址	9軒 鬼高期	所沢市北野

東大和市内で発見されている住居跡などの古墳時代の遺跡は、現在のところ、貯水池内と鹿島台西にしかありません。しかし、この時代、東大和市域にも、谷間の小規模な耕地を耕し、わずかな家族が生活していたことが想定されます。

⑤奈良・平安時代

奈良・平安時代にかけて、わずかですが東大和市域にも活動の跡が残されてきます。それらはいずれも狭山丘陵のひだである「谷戸」「谷ツ」に位置します。よもやまばなしの内容は、いずれも江戸時代以降の伝承と思われますが、地形と地名にこの時代からの記憶が残されているようです。



東大和市では、平安時代の後半から末頃と考えられる廻田谷ツ遺跡（湖畔）で、東西3 m 、南北4 m 、東側の壁にカマドを持つ竪穴式住居が発掘されています。上段右端図は自然の釉薬がかけられたつぼです。

廻田谷ツ遺跡を中心にして東大和市で発掘された平安時代の家の比較ですが、右の清水神社南の「上ノ台遺跡」（平安時代前期）では、一辺が3.4 m で、竪穴のほりこみの外側に約1 m ぐらいの余地が付けられています。

上の図は貯水池に沈んだ多摩湖第四遺跡ですが、この住居址は驚くほど狭く、畳2畳になります。通常の住居であったのか、出作小屋のような作業用の小屋であったのか議論が沸くところですが、通常の家であったとしたら、どのような生活をしていたのか、様々に今後の課題が残されています。

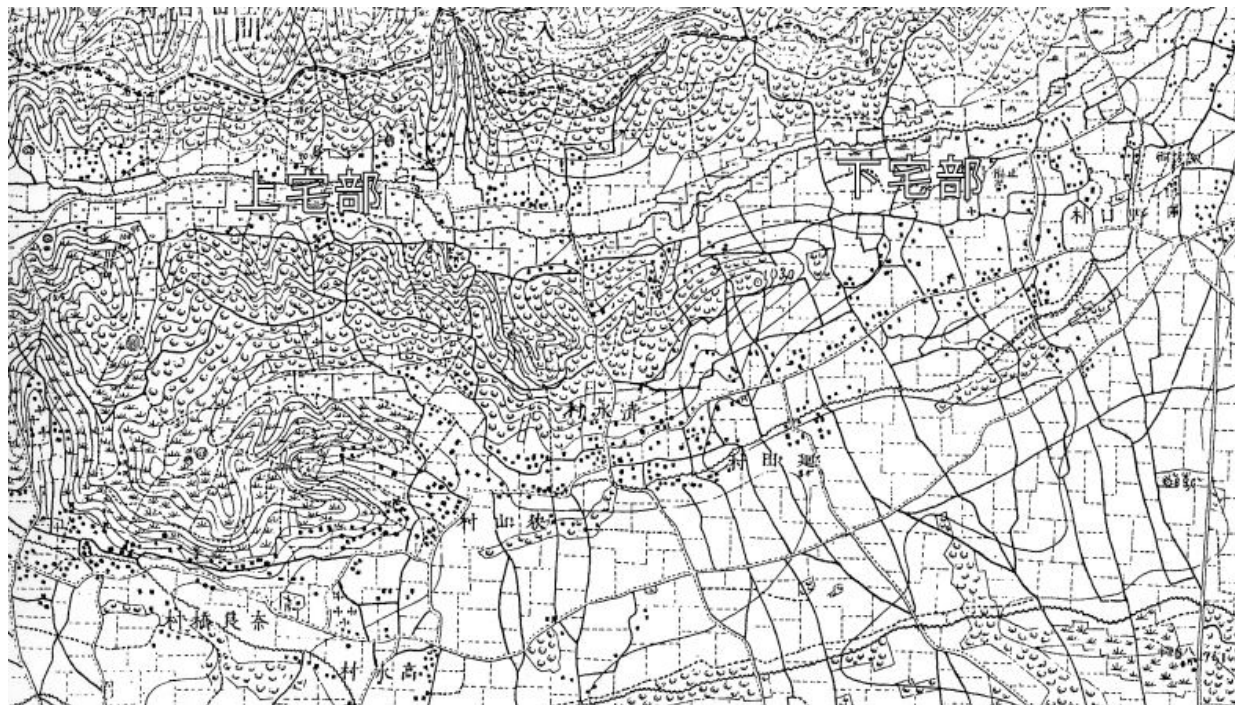
よもやまばなし「ばばあのおふところ」は、蔵敷の「山あいのくぼ地に、奥深く広がる場所で、自然に風を防ぎ日当たりも良く、ちょうど乳母のおふところのような地形を紹介しています。奈良・平安時代以降の家はほとんどがこのような場所を選んで設けられています。

それは中世から戦国、江戸時代を通じて現在まで一貫して、丘陵の南側の快適な場所とされています。東大和市の歴史はこのような地形を選んだ人々によって始められたようです。ただし、谷戸の水田は湧き水利用のため、生産性が低く、食の上では、常に飢餓との戦いであったようです。

9 戸隠講 (20) 31 高木のまんじっ鉦 (68) 52 出ば出ろ (115)
10 内堀部落の女堰 (23) 60 清水囃子のけいこ (133) 81 きつねの恩返し (179)
89 たっちゃん池 (196) 93 石神の話 (204)

東大和のよもやまばなしの中に「宅部」という地名が出るのが上の囲み線の中の話です。101 話の中で8話に登載されています。密度の濃い使われ方です。東大和市の歴史は狭山丘陵の大きな谷の一つ「石川」の谷と丘陵の南側に刻まれたいくつかの谷をもとにして出発しました。宅部はその「石川」の谷の出口に位置します。いわば東大和市発生の地の代表格といえます。そのことから、数多く使われていると考えられます

また、「宅部」は「宅部郷」として、一定の広がりを持つ地域を表す言葉として使われてきました。事実、宅部は東大和市から東村山駅周辺までに達する大きな地域名です。東大和市域内を「上宅部」東村山市域内を「下宅部」と区別しています。



「宅部」はまた、歴史上、古代史ならば「屯倉^{みやけ}」に通じ、中世史ならば、豪族の領地・住宅地に通ずることを暗示します。狭山丘陵周辺で中世史で大きな謎とされる「村山氏」の拠点が明らかでないだけにこの言葉は魅力的です。

石川は下流が柳瀬川になり、流末は利根川になります。弥生文化は川を遡って来たとされますが、柳瀬川で北上し、所沢の「東の上」で開花しています。柳瀬川的一方の上流である石川の谷戸が貯水池に沈んでいるため、この地域での遺跡は確認されていません。古墳、奈良・平安時代も同様です。いわば、歴史調査はまだ手が付けられていないといつてよいようです。

同様に中世史でも、この地域の解明は進んでいません。このように、「宅部」は今後の解明が待たれる歴史上謎を秘めた地域名です。古代の国・郡・里の制度から「宅部」を追ってみます。

②東山道武蔵路

600年代の中頃から末にかけて（650～675年）、狭山丘陵の東端に幅12^里で丘陵を直線で超えて国分寺、府中方面にほぼ真っ直ぐに走る道路が造られました。群馬県から相模まで連絡しています。

狭山丘陵付近では、所沢市立南稜中学校の校庭（東の上遺跡）



～東村山駅の東側～野口橋付近を通ります。

古代中央政府の威信をかけてつくられた官道です。「駅」が設けられて、広域にわたる人と物の流れ、

軍事の基盤となりました。「宅部」は恐らくこの道に接したと考えられます。

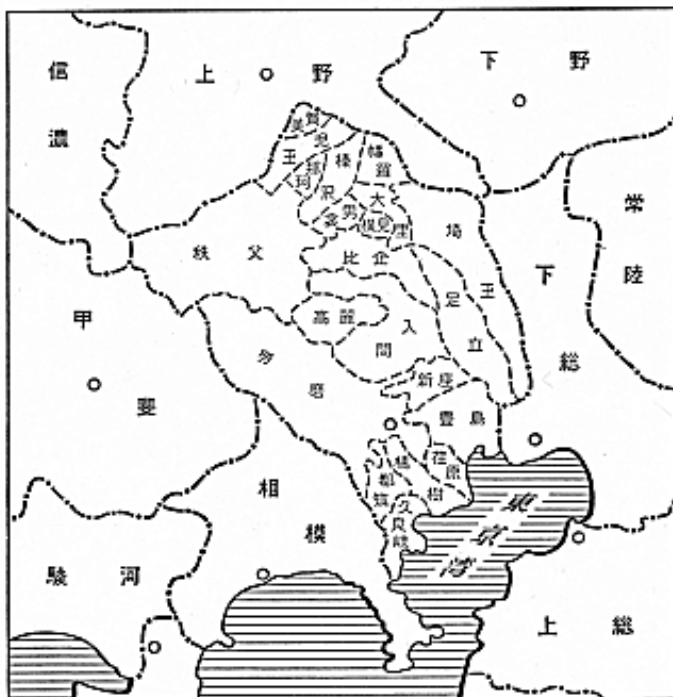


③国・郡・里の制度

狭山丘陵の東端に「東山道武蔵路」が走り、現在の府中市に「武蔵国府」（7世紀末～8世紀初頭）、国分寺市に「武蔵国分寺」（758年新羅郡の建郡以前）が造営された頃、武蔵にも中央政府によって、国・郡・里の制度が設けられました。東大和市域にも人々が定着し始めました。

国は郡と里によって構成され、武蔵国には21郡が置かれました。東大和市は「多摩郡」に属しました。隣接は「入間郡」で、この境界が狭山丘陵の一つの峰でした。現在の東京・埼玉の行政境と同様と考えられますが、後に様々な混乱が生じます。里は大体50戸で構成される決まりでしたが、実態は不明です。やがて、里が郷に変更されます。

（府中市史上p119から引用）



第76図 武蔵国21郡の区画（大日本歴史地図による）

郷

霊亀元年（715）「里」が「郷」と変更されました。多摩郡は11郷で構成（和名抄＝平安時代の百科事典）されました。

乎^{おがわ}加^わ波^か=小川^{かわぐち}、加^か波^わ久^く知^ち=川口^{かわぐち}、乎^お也^や木^き=小楊^{こやぎ}、乎^お乃^の=小野^{この}、爾^に布^い多^だ=新田^{しん} 乎^お之^の万^ま=小島^{こしま}、安^あ万^ま田^た=海田^{かい}、伊^い之^の都^と=石津^{いしづ}、古^こ万^ま江^え=狛江^{こまえ}、勢^せ多^た
がその郷で、多摩川沿いに現在もこれらの地名が残っています。隣接の入間郡は8郷で次のよう
に記録されています。
麻羽^{あさば}、大家^{おうち}、郡家^{ぐんけ}、高階^{たかしな}、安刀^{あ と}、山田^{やま}、広瀬^{ひろ}、余戸^{あまるべ}

残念ながら、肝心の東大和市の地域がどの「郷」に属したかは不明です。50 戸に達せず「郷」にならなかったのかも知れません。

④中世・同族集団の定着

これらから、古代の郷には「宅部郷」は当てはまらないようです。周辺の状況から、中世の郷名と思われます。中世の項で図を紹介します。東大和市域で宅部に相当する地域には、後に内堀と上宅部に区分される地域の人々が石川をほぼ中央に挟んで、定着したようです。内堀には鎌倉権五郎景正に象徴される武の神・御霊神社が祀られました。

石川の谷は、豊鹿島神社を創建した、蘇我山田石川麿の居住地と見なされています。従って、石川の谷と、狭山丘陵南麓の西谷ツ、中谷ツ、東谷ツの三つの谷戸に素朴な形で、武の神・鹿島大明神を奉斎する同族集団が定着し、やがて中世の東大和市域を構成していったものと考えられます。

⑤石川麻呂の伝承

豊鹿島神社の創建に関して「山田石川麻呂」がでてきます。大化の改新の立役者・蘇我の石川麻呂と関連づける事も考えられますが、別の石川麻呂伝承も考えられます。東大和市史資料編2 多摩湖の原風景では

『石川の谷津にははるかに時代が下るが、室町期の「石川麻呂」に関わる石造物が伝わっていた。三基の神名碑で一基は瀧沢明神社という石像を彫りつけた碑である。後土御門天皇の一四六六年(文正元)十月三日の年銘がある。他の一基は同年銘の雷大明神碑「東大和市生活文化財調査概要報告書」、三基目は白山祠で年銘は一五三四年(天文三)十一月三日であるから前の二基より六十八年の後のものである。』

どれにも「願主石川麻呂」と刻まれている。しかも三基とも江戸後期の文化四年新しい石碑に刻んだもののようである。貯水池の工事に伴ってそれぞれ移転し、雷大明神だけは芋窪四丁目の天王様の境内に祀られ、他の二基は現在豊鹿島神社の境内社になっている。

これらの碑面に残る「石川麻呂」は、どんな人だったのか？ その住居跡が石川の北側の畑にあったという。明治十三年調査の「皇国地誌」には、旧跡として次のように記されている。

下石川第二千四百十九番地にあり、凡そ一畝歩(三十坪)余りの地なり、往古石川麻呂住居の地なりという。

貯水池工事の際、この場所だけは発掘調査が行われたが、出土したのは馬具など五、六点のものだったという。移転までその附近に住んでいた瀧坂仙蔵さんは、別名を山田専蔵といい、「山田石川麻呂」の子孫と称していたという。』

ともあれ貯水池となった谷津は古い伝説がたくさん残っていた所で、特に落武者に関わる断片的な話が多かった。例えば、石川には「藤原の落武者」が白魚を持って来たので大正まで石川に白魚がいた。「武田の落武者」が棲みついた。宅部には「護良親王の子、高瀬丸」が家来と共に落ちて来た、などである。』 p 104

としています。石川の谷は伝承ばかりでなく、歴史的に究明することが山ほど詰まっています。

(3) 勝楽寺村（渡来人の村）

92 おこりぼとけ (202)

①勝楽寺村

よもやまばなし「おこりぼとけ」は貯水池建設により山口貯水池の湖底に沈む前の勝楽寺村の中笠にあった五輪塔、如意輪観音、地藏を芋窪に移転したことを伝えます。「勝楽寺村」は狭山丘陵のもう一つの大きな谷に成立した村でした。



勝楽寺村は一山越えればお互いの村と連なる関係から、東大和市域の村々と密接な関係を持っていました。近世においても、奈良橋・雲性寺の住職が勝楽寺・仏像院から移ってきたこともあって、彫り方がそっくりの將軍地藏が蔵敷と勝楽寺村仏像院に伝わるという事実もあります。

左側が仏像院將軍地藏
右側が蔵敷太子堂將軍地藏
1740～50年代



勝楽寺村にあった「仏像院」は、現在、所沢市山口に移転していますが、古代史に関わる重要な伝承を伝えます。現在、日高市に属している古代の「高麗郡」との関わりのある伝承です。

勝楽寺村は左図のように、石川の最奥地域と接し、武蔵村山市の中藤村と接していました。貯水池の建設される前には相互に交流があり、勝楽寺村が山口貯水池に沈むとき、一部の村人達は東大和市域に移転しています。

②高麗郡の設置

続日本紀は、霊亀2年（716）に、駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の七カ国の高麗人1799人を武蔵国に移して、高麗郡を置いたことを伝えます。日高市、入間市、狭山市、飯能市がその区域です。なお、天平宝字2年（758）には、新羅の僧32人、尼2人、男19人、女21人が移住して、新羅郡を置いています。現在の志木市、新座市がその中心となる地域です。

③仏像院の伝承

高麗郡の中でも、渡来の代表者・若^{じゃっこう}光が拠点としたと考えられる、高麗村＝現在の日高市に「聖天院」があります。この寺は、侍念僧「勝楽」が若光の菩提を祈るために751年（天平勝宝3年）に建立したことを伝えます。仏像院に、この建立に関して、次のような記録を伝えています。

『靈龜2年（716）高麗人が来て、一寺を建て、阿弥陀と歓喜天を祀り、勝楽寺聖天院と号した。4年後に二尊を抱いて北に移り、一寺を建て聖天院勝楽寺大彌堂として、今にある。・・・』

この伝承の歴史的評価は別にして、狭山丘陵の大きな谷には、すでに700年代に歴史的な大きな動きがあり、高麗郡からは武蔵国府の高級官僚が出ています。山口観音にも高麗との関連を示す品々が残されています。狭山丘陵の谷に渡来文化が早くから根付いていたことは注目すべきでしょう。

④鹿島さまの櫓

68 鹿島さまの櫓（147）

仏像院の伝承と同じくらいの年代の話に、豊鹿島神社の大櫓があります。よもやまばなしでは次のように伝えます。

『豊鹿島神社の櫓は樹令千余年、神社の歴史と同じ位といわれています。現在は、中ががらんどうになってしまい、昔の面影は全くありません。明治時代までは、枝が大きく茂り、人家が少なかったのも、夜はとてもこわくて、この近くは歩けませんでした。』

明治の中頃、この大木のうろ（空洞）に火のついたお札が投げこまれて、火事になってしまいました。近所の人達が、井戸より水をリレー式で運び、枝の上に乗り、車井戸を使って水をかけ火を消しました。

大正時代に、大きな枝が折れましたが、まだまだ櫓は大きく、子供達が十人位で手をつないでまわったり、地上から一メートル位上のこぶにのり、鬼どっこ（鬼ごっこ）などして遊ぶことができました。あけ方になると、「ブッ」「ブッ」と不気味な音が聞こえてきました。きっと櫓も水がほしくて、地下水を飲んでいたのかもしれない。この不気味な音は大正の末ごろまで毎晩聞こえてきたそうです。

現在の大櫓



暗くなると、オッポッポ（ふくろう）が、どこからかとんで来て、枝の上で目を光らせているので、若い娘達はこわくて、外に出る気にはなれませんでした。』

⑤櫓のめざまし

69 櫓のめざまし（149）

大櫓からは水を吸い上げる音が聞こえたようです。鹿島さまの櫓と同じように高木にも大櫓があって、よもやまばなしは、次のように語ります。

『昔、高木村にはその名のとおり、けやきの大木がうっそうと茂っておりました。そして、ある旧家の庭にも、直径七尺（二、二尺）もあるような大けやきが何本もありました。』

それは毎年夏のことです。早朝、東の空が白むころ、不思議な音が聞こえてきました。“ザーッザーッ、ザーッザーッ” 朝の静けさをぬうようにかすかに聞こえてきます。それは、けやきが水を吸いあげる音だということです。明るくなると音は止みますが、天気の良い日は毎朝きこえました。』

第3章 石神の話 こさ池とかゆ塚 いかづちさま 三光院の鐘(中世～戦国時代)

(1) 武蔵七党

93 石神の話 (204)

①中世の鍛冶・堺堀

平安時代、10世紀になると、谷戸田の開発がさらに進み、人々の居住地は丘陵の裾野に定着して、谷戸田と丘陵(畑、雑木、小規模放牧)が一体化した中世の集落をつくります。武蔵村山市の後ヶ谷戸遺跡や所沢市の椿峰遺跡群に、「中世の堺堀」と云われる、谷戸とその周辺一帯を含んだ領域を区切る地域性が指摘されるようになります。

そして、従来の農業生産に加えて、鉄器を作り、修繕をする役割を持った人々が出現します。武蔵村山市では、野鍛冶状の遺構(赤堀第三遺跡 平安時代末から鎌倉時代)が発見され、鉄器の生産を指摘しています。この鉄器が農具と武器であることから、狭山丘陵に土豪や武士の発生を告げるものと考えられています。

「よもやまばなし」には「石神の話」の中で、「鍛冶でも住んでいたように大量のカナクソ」が出てくる話があります。同時に、病氣回復のお礼として、鉄製の鳥居の奉納があったことが伝えられますが、カナクソと野鍛冶との関連も注意したいところです。また、所沢市の椿峰遺跡群では、武士の館(野竹遺跡の北側 鎌倉・室町時代)が発掘されています。

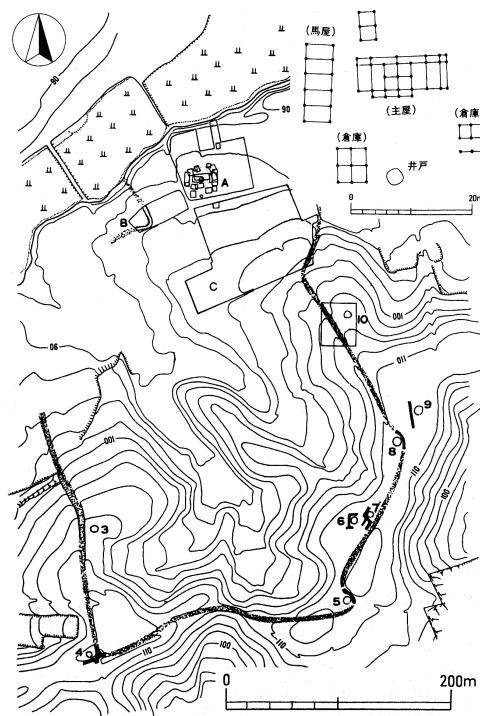


図586 所沢市椿峰遺跡群の中世の「堺堀」と武士の館
(右上はA地点の建物群のうち屋敷が整った時期の建物の配置図)

東村山市史5資料編考古 p 874

②野鍛冶の遺跡(武蔵村山市 赤堀遺跡)

赤堀遺跡は武蔵村山市中藤の谷ツ(空堀川の水源地の一つ)に形成される小さな台地にあります。標識はなく、現地を訪ねるにはわかりにくい場所ですが、「武蔵村山市文化財資料集3 赤堀」が発行されていて、詳細が発表されています。

遺跡からは岐阜県や愛知県で生産された灰釉陶器が発掘されていることから、すでに、その地域との交流があったことがわかります。この遺跡について、武蔵村山市史は次のように記しています。

『奈良～平安時代前期までは、鉄製農具や武器等を製作する鍛冶技術は国衙工房が抱える工人集団によって半ば独占的に行われていたが、一〇世紀以降になると、赤堀第三遺跡のように単独で山野において鍛冶作業を行う遺跡が出現する。このことは、集住型の集落遺跡とは明らかに異なる「杣」的様相をもつ集落として、丘陵地域の開発に関連して形成されたのではないかと考えられる。



図78 分析を行った鉄器の外観(矢印は分析試料抽出位置)

武蔵村山市史資料編考古 p 144

丘陵地における鍛冶技術の拡散は、新たに丘陵開発を進めるうえで重要な生産手段の一つに成り得たであろう。出土した鉄器の様相についてもやはり、一〇世紀以降急激な出土鉄器の増加が認め

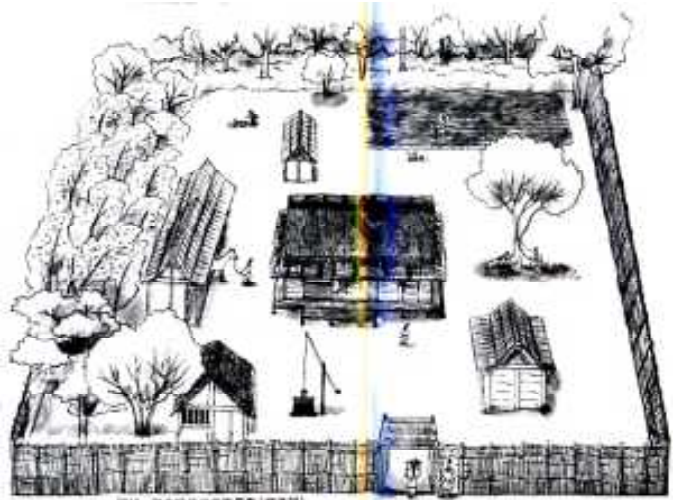
られる。しかも、工具や武器類の出土割合が突出して多いことから、丘陵開発の目的がたんに耕地の拡大だけでなく、資源や環境を活用した手工業生産の展開にあったことが窺える。』（通史編上 p 271）

武蔵村山市史資料編考古では、この遺跡から出土した鉄製品は 11 世紀のものとしています。

③武士の館（所沢市 椿峰）

所沢市では武士の館が発掘されています。山口城跡から北に一峰超えたところに位置します。所沢市では次のように説明しています。

『館は、広さ約 50×40 ㎡の敷地に、全部で 9 棟以上の建物跡と 2 基の井戸や溝跡などがあり、中からは、わずかですが中国(明)渡来の青磁・白磁や瀬戸地方の陶器のかけらが出ています。(館は長い間便われ、何回もの建て替があった)



館は、北側が崖と小川によって守られ、西には溝が回るので、東又は南に出入口が考えられます。入ってすぐに庭と井戸、その横に 2×2 間の小屋があります。右手にも同じ大きさの小屋があり、倉庫とか納屋かも知れません。

瓦が一つも発見されないで、建物の屋根は、かやなどの草ぶきだったと思われます。それでは、この館には、どんな武士が住んでいたのでしょうか。同じ時代で距離も近い山口城跡と比べると、この館は土塁や空堀などの防御施設はなく、規模もはるかに小さいものでした。恐らく、山口氏の家臣や一族で、椿峰と北野を領地とした武士ではないかと思われます。』（所沢市教育委員会 ぼくらの先祖達は 2 p 32）

武器制作に携わったとも指摘される野鍛冶状遺跡、武士の館を紹介しましたが、狭山丘陵に新しい集団として「武士」が生まれました。

③武蔵七党

実際に発掘された遺跡は極めて少ないですが、10 世紀中頃になると、狭山丘陵周辺には、指導者が率いる小規模な同族の結びつきを強めた「党」が形成され、武士団として成長していったことがわかります。その代表的なものとして

- ・野与党 埼玉郡を本拠
- ・猪俣党 埼玉県美里町付近を本拠
- ・丹党 秩父石田牧の別当から成長
- ・児玉党 本庄、越生などを本拠
- ・私市(きさいち)党 大里郡、埼玉地方を根拠
- ・綴党(都築) 神奈川県
- ・横山党(八王子市)
- ・西党(多摩郡西部 多摩川、秋川、浅川流域)
- ・村山党 入間多摩の郡界

などがあります。これらを総称して、武蔵七党と呼びます。どれをとって七党とするかはきまりがないようです。15 世紀に編纂された「節用集」では丹党、私市党、児玉党、猪俣党、西党、横山党、村山党とし、「武蔵七党系図」では、野与党、村山党、横山党、猪俣党、児玉党、丹党、西党としています。これらの党の指導者は在地の少領主として地域を支配し、党の間では協同的な関

係を維持していたものと考えられています。特に、狭山丘陵周辺、東大和市に関わりの深いのが「村山党」です。

(2) 村山党と山口氏

①村山貫主頼任

村山党はその名から、狭山丘陵及び周辺に勢力を培ったと考えられています。系図では、村山党の貫首は「頼任」で、「村山」に居住したとされます。しかし、居館など拠点となる明確な遺跡は確定されていません。武蔵村山市・瑞穂町一帯、東村山市などが候補にあがっていますが、ことによると、狭山丘陵の南麓に長大な地域を形成していた「宅部」が中世の郷であるとすれば、有力な候補地になるかも知れません。

②村山党の分立

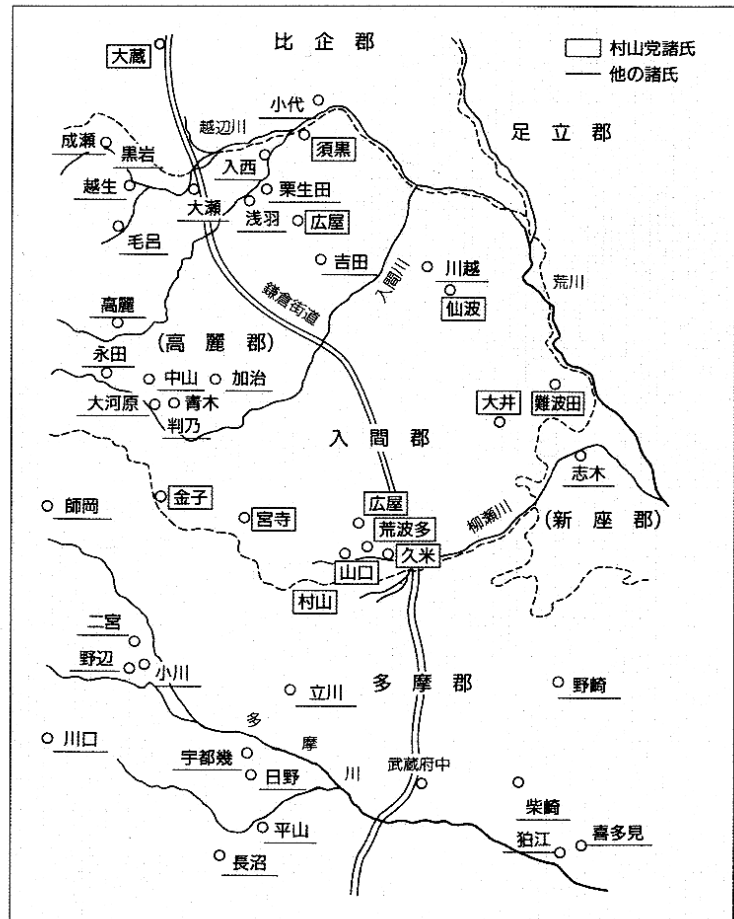
やがて、村山党は、現在も地名で迎れる、村山・大井・宮寺・金子・山口・須黒・横山・久米・仙波・広屋・荒波多・難波多(田)の諸氏に分かれ、源頼朝の時代に大活躍をします。

その根拠地は地名から追って右図のように考えられています。東村山市史通史編上巻 p 381

③山口氏

東大和市と最も関係の深いと考えられるのが山口氏です。本拠地を所沢市山口の「山口城」においていました。所沢市瑞岩寺に山口氏の位牌や宝篋印塔が伝えられています。

村山党系図では、頼任⇒頼家⇒までが村山貫首とされ、その後、大井、宮寺、金子、山口に分かれています。山口氏の初代は村山七郎を名乗っているところから、頼任、頼家は村山の地に本拠を置き、山口氏初代の村山七郎から山口に移ったと考えられています。残念ながら、村山市の本拠は不明です。



山口氏は一ノ谷の合戦で、義経に従って活躍しています(源平盛衰記)。山口貯水池の中に根古屋城がありますが、この城は山口氏の戦いのための城とされ、北野天神に様々な奉納をしていることからその支配地域はおおむね狭山丘陵全体に及んでいたことが推定されます。しかし、東大和市に山口氏との関係を明示する資料は残されていません。



左は在りし日の山口城跡

「よもやまばなし」によく出てくる地名に「内堀」があります。この地域では、鎌倉権五郎景正と関連する「御霊神社」を祀っていました。山口とは峰続きであり、何らかの関連が考えられるかも知れません。

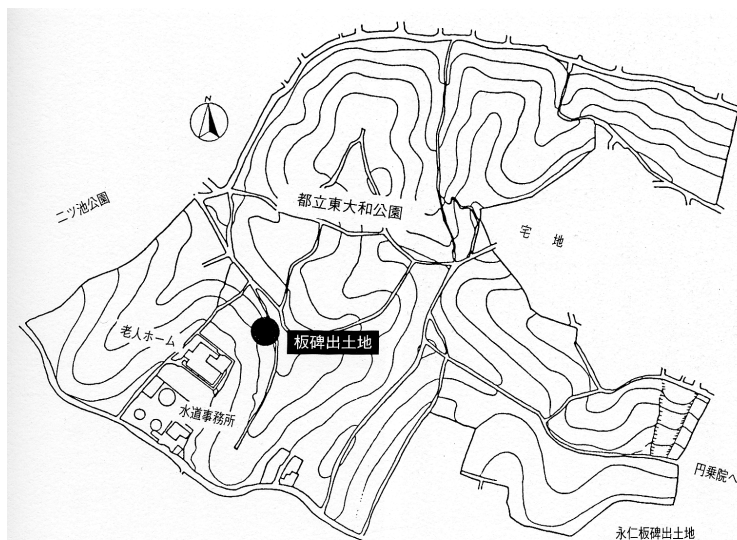
(3) 板碑

中世を語る代表的な遺物として「板碑」があります。関東では多くが秩父産の青石（秩父緑泥変岩）でつくられていることから「青石塔婆」とも呼ばれます。墓標ではなく、一種の供養塔で、追善や追福のために建てられたと考えられています。狭山丘陵東端の將軍塚にあった「元弘の板碑」（国宝 現在は徳蔵寺に保存）は新田義貞の鎌倉攻めの際に戦死した飽間兄弟のことが日時とともに刻まれていて有名です。

①東大和市の板碑

東大和市には、平成11年現在106枚が確認されていて、最古のものは永仁2年（1294）、最下限のものは天文11年（1542）のものです。現在の水道事務所の東下方に埋まっていた。武蔵村山市の阿弥陀ヶ峰にも同年の板碑が同じような姿で祀られていて、板碑の持つ意義や祀られ方の雰囲気良く伝えます。

板碑は、資料の少ない中世の歴史を語る史料として、造立の年代、種子、文字、石質などから、研究が進められています。祀られ方から、狭山丘陵に一定の墓域が住民の意識にあったのではないかと考えられています。



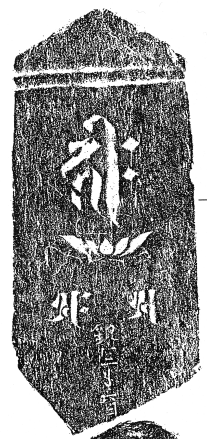
東大和市最古の板碑の出土地（東大和市郷土博物館原図）

左 東大和市最古の永仁2年（1294）の板碑、現在郷土博物館に展示されています。

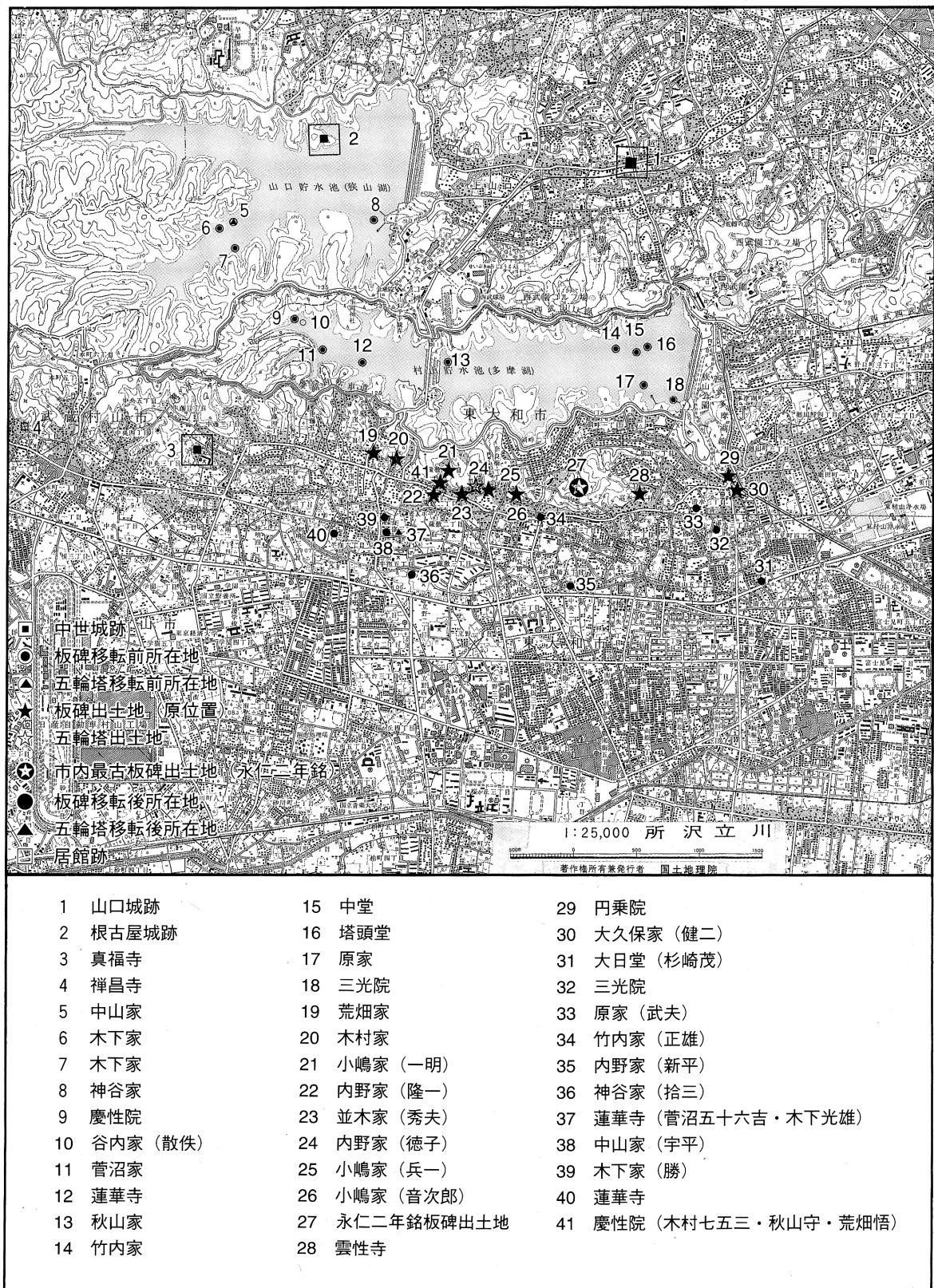
右 永仁の板碑の発掘された場所 多摩大和老人ホームの東側に位置し、東に円乗院、西に雲性寺があります。（東大和市史資料編 6p88）

②「石神の話」の板碑

石神の話にでる「石神」は観応三年六月（1352）の銘をもつ板碑で、その出土の状況がわかり、貴重です。この板碑は右図（東大和市史資料編6p112）のように梵字で種子・阿弥陀三尊像が彫られています。永仁の板碑は阿弥陀一尊像が彫られています。板碑には、釈迦や不動など多くの仏が彫られていますが、阿弥陀像が多いようです。中世、この地方に阿弥陀信仰が行きわたっていたことを示しています。



この板碑は、貯水池に沈んだ「上宅部の石塔前という所」にありました。・・・昔、原家の北を走る道の端から掘り出され・・・と書かれているように、石川の谷の下流、上宅部の中央部であり、板碑がこのような場所に祀られていたことがわかります。



東大和市の板碑の分布

この図は、山口城、根古屋城や真福寺など中世に関連する城の位置と東大和市内で発見された板碑の所在を示すものです。16が、石神のはなしの石塔前です。（東大和市史資料編 6 p 54）

(4) 新田義貞の鎌倉攻め

①こさ池

その中でも幹線とされるものに「上道」、「中道」、「下道」があります。狭山丘陵周辺では、「上道」が、所沢から東村山駅東側、小平、恋ヶ窪（国分寺市）、府中、鎌倉へと通じていました。その沿線には点々と当時の物語が濃厚に残されています。

上道は左図の右端の道を指しますが、最近左図の左端の中氷川神社から山口城址を通り小平市の「九道の辻」へ達する道筋が重要視されてきました。東大和市の場合、いずれにしても、上道とは少し

埼玉県教育委員会 古道を歩く p 19

そのような状況の中で、「こさ池とかゆ塚」が、元弘の合戦の際、義貞軍が東大和をも通過したことを伝え、貴重な伝承となっています。かゆ塚を通ったとすれば、左端の道を東大和市と書かれた方向に進むことになります。なお、市内には八幡神社の東側を通る道を鎌倉街道とする伝承があります。

②元弘の合戦

- 70 -

・小手差ヶ原（所沢市）の合戦

5月11日 義貞軍は幕府軍が派遣した北条氏と小手差ヶ原で終日激戦、勝敗決せず、幕府軍は久米川に退き、義貞軍は入間川に退きました。

・久米川の合戦 5月12日 両軍は久米川で再度合戦し、勝負はつかず、幕府軍は府中の分倍河原に退き、義貞軍は久米川に陣取りました。

・分倍河原の合戦 5月15～16日 府中市の多摩川分倍河原で両軍が相まみえ激戦

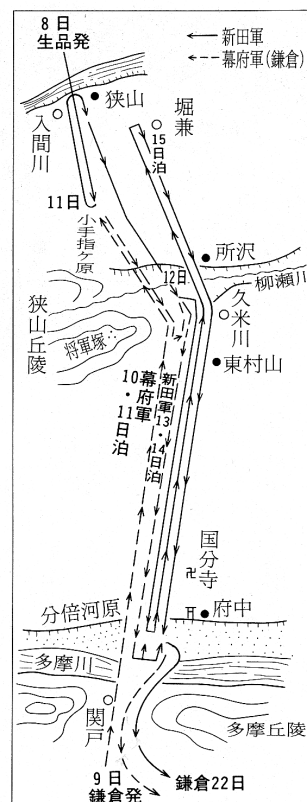
15日、義貞軍敗退 堀兼まで退く。

16日、義貞軍分倍河原を急襲、幕府軍敗退。

22日、稲村ヶ崎から突入、北条氏滅亡

鎌倉幕府滅亡 5月22日

の経過を辿りました。 右図は入間市史通史編 p 244



第4-3図 新田・幕府軍合戦要図

③武蔵武士の動向

・この合戦に村山党は新田義貞側についています。太平記に「坂東八平氏、武蔵七党」が義貞に属し、分倍河原に戦ったことを記しています。

原因は北条氏の専横に、御家人の窮迫が加わり、不満が充満していたことが背景に考えられています。

・この時の戦いで戦死した人を弔った「元弘3年（1333）板碑」が東村山市徳蔵寺にあります。

・同様に、野田の「円照寺」に「元弘3年5月22日銘」の板碑が残されています。鎌倉幕府側につき幕府と運命を共にした加治家貞の碑です。無学祖元（時宗が師と仰ぎ、円覚寺の開山）の漢詩が刻まれています。

・史跡として、小手指ヶ原古戦場、將軍塚、久米川古戦場、分倍河原古戦場などがあります。

④この伝承が事実であったなら！！

上記③の日程とコースから、こさ池とかゆ塚の伝承をどのように位置づけるかが問題となります。

小手差ヶ原と久米川の間は、通常、上記入間市史の図のように考えられています。こさ池とかゆ塚の伝承は、これを更に直線に狭山丘陵を横断させて、東村山市廻り田の金山神社に結びつけるものです。武蔵村山市には同種の「おびきやまご飯炊き」の話が残されています。狭山丘陵周辺の幻の中世を大いに研究したいものです。

（5）大石氏 文正元年（1466）の年号

93 石神の話 (204) 92 おこりぼとけ (202) 95 いかづちさま (208)

石神の話では、野鍛冶と観応3年（1352）の年号を刻んだ板碑、山口氏のことを紹介しました。山口氏は、1368年（正平23年）河越氏に加勢して上杉勢と戦い、これに敗れ、一時衰退します。この事件を「平一揆」と呼びます。

平一揆の後始末として、山口氏の領地は上杉氏に取り上げられ、上杉氏のもとで武蔵国守護代を勤めていた大石氏に引き継がれたことが伺えます。東大和一带も大石氏の配下に属したことが考えられますが、直接そのことを語る記録はありません。

①おこりぼとけの五輪塔

よもやまばなし「おこりぼとけ」は、勝楽寺村にあった2基の五輪塔について伝えます。この五

輪塔は年代がはっきりしませんが、形から室町時代末期のものとされます。五輪塔は仏塔（＝五重塔）で、空・風・火・水・地（宇宙の五大要素）を象徴し、同時に人の体の部分（五体）を表しているとも云われます。供養塔、墓標として造立されることが多いとされます。（右中山家五輪塔 画像は東大和市史資料編 6 p 189 から引用）



東大和市内にある五輪塔で最古のものは、蔵敷の狭山丘陵南麓に祀られる応永の年号が彫られた2基です。1基には応永10年（1403）、他の一基には応永25年（1418）の室町時代初期の年号が彫られています。この時代になると、板碑とともに、五輪塔を祀る力を有した人々が勝楽寺村や蔵敷に居住していることがわかります。（五輪塔は江戸時代まで造られるところから、市内には墓地内などに多数残されています。）左画像は東大和市最古の五輪塔（小島家）

応永10年（1403）前後は、室町幕府と鎌倉府との対立が表面化し、武蔵七党はそれぞれ分解して、同族集団、地縁集団、利益集団などになります。その集団が互いの利を求めて「一揆」を結集して、幕府、鎌倉府のどの体勢に組みするか迷った時期でした。

②神社・寺院の創建



応永14年（1407）に、東村山市にある正福寺地蔵堂の建立がなされたことが尾垂木の墨書銘からわかります。創建については弘安元年（1278）北条時宗によるとの伝承があります。応永25年（1418）は上杉禅秀の乱が23年に始まり、入間川に足利持氏が陣を敷き、関東の諸豪族が二分して争った時代でした。この時期に山口氏の根古屋城が造られたと考えられています。

よもやまばなしの「いかづちさま」では、石川に祀られていた「いかづちさま」に『雷大明神社 文正元戌十月三日（1466）』と彫られていることが伝えられます。この年は、豊鹿島神社の建物の最初の棟札に書かれている年号の年で、芋窪に本格的な神社建築が成されました。

また、現在の豊鹿島神社裏山に祀られている「滝沢明神社」が同じ年に創建されたことが石碑に彫られています。滝沢は貯水池に沈んだ石川と鹿島神社の所在する西谷ツとの間にありました。碑面に刻まれた像から、弁財天ではないかとされます。

③大石氏

大石氏は山内上杉氏の家臣で、武蔵守護代を勤めていますが、後に力を付ける扇谷上杉氏の家宰である太田道灌の活躍の陰に隠れ、あまり事跡が伝えられていません。しかし、永享2年（1430）久米の永源寺に大石信重の墓石があり、1400年代には、この地方に勢力を張っていたことがわかります。

永享11年（1439）には、雲性寺の堂宇が建設されたとの伝承があり、この頃東大和市の市域には石川の谷、丘陵南麓など一斉に神社や寺を建設する動きがあったことを伝えます。



永源寺 大石氏墓所

④くめくめ川（道興^{じゅうこう}准後の廻国雑記）

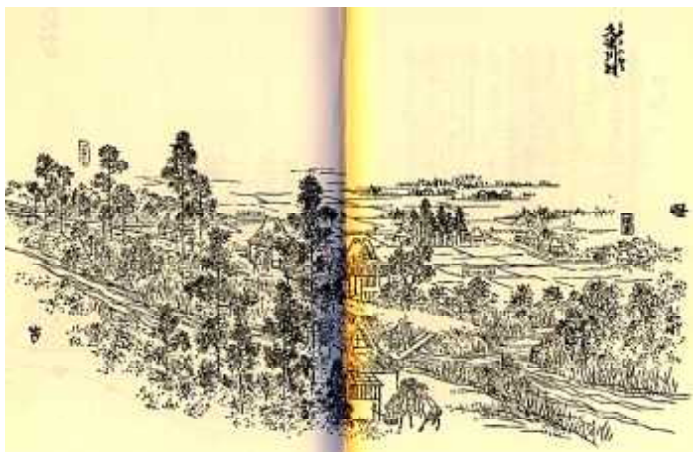
「おこりぼとけ」の15世紀、その時代の武蔵野の状況を率直に伝える記録があります。修験道総本山の聖護院門跡である道興准后が隣接の所沢、久米川に旅をしてきました。その時の旅日記（廻国雑記）です。文明18年（1486）道興准后は鎌倉街道を小野路（町田）、霞の関（関戸）、恋ヶ窪、堀兼の井、入間川に達し、河越、勝呂（坂戸市）、野火止（新座市）を訪れ、年の暮れに所沢に来て、久米川に立ち寄って、次のように書いています。

『・・・ところ沢といえる所へ遊覧に
まかりけるに、福泉という山伏、観音寺
にてささえ（竹筒）をとり出しけるに、
薯といえる物さかなに有けるを見て、俳諧、

野遊のさかなに山のいもそえて
ほりもとめたる野老沢^{ところさわ}かな

この所を過てくめくめ川という所侍り。
里の家々には井なども侍らで、ただ
この河をくみて朝夕もちひ侍となん申し
ければ、

里人のくめくめ川とゆふくれに
成なは水はこほりもそする・・・』



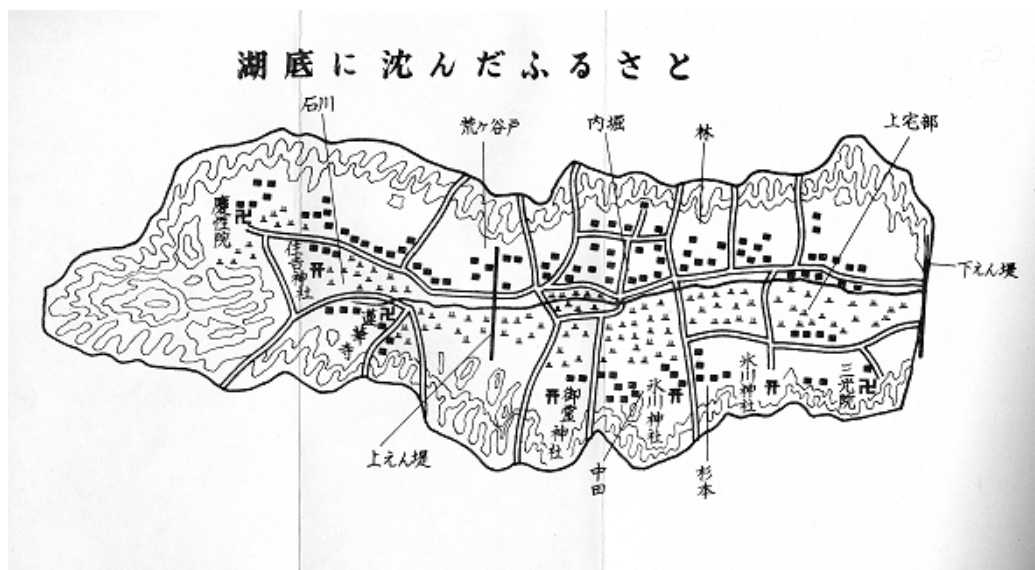
久米川宿 武蔵夜話

（6）後北条氏（氏照）から徳川家康へ

32 三光院の鐘（70）

①三光院の鐘（永禄3年＝1560）

よもやまばなし「三光院の鐘」には、三光院に設けられた初代の鐘が永禄3年（1560）に鑄造されたことを伝えます。この年は、東大和市域の村々にとって上層支配者の政権交代の狭間にたたれた年です。



多摩湖・村山貯水池内の状況 内堀戸十郎 湖底に沈んだふるさと

三光院の創建は不明で、新編武蔵風土記稿では天永3年（1187）、寺伝では延文2年（1357）としています。創建以来相当の年数を経て初代の鐘が設けられたことになりますが、鐘が鑄

造されたこの年、5月に桶狭間の戦いで、織田信長が今川義元を破っています。翌、永禄4年には、長尾景虎は小田原城を攻撃し、鶴岡八幡宮で上杉憲政治から上杉姓を譲られ、上杉謙信と名を改め関東管領職に就きました。

いよいよ戦国大名上杉謙信と北条家との戦いが始まる前夜です。狭山丘陵周辺にも慌ただしい空気が流れていたことと考えられます。

②他国衆・山口氏

鐘が鑄造される前年の永禄2年（1559）に、山口氏が北条氏（＝後北条氏）から所領を宛がわれた文書（北条氏所領役帳）があります。それには、他国衆として40貫文を得て

山口兵六 山口内 大かね（鐘）
藤沢分
小野分（北野）

と書かれています。他国衆とは北条氏に直結する家臣ではなくて、別扱いとされたものです。当時、山口氏は岩槻城主太田資正の家臣団であったようです。太田資正は永禄4年、上杉謙信に属して、北条氏に敵対しています。相当微妙な立場に山口氏は立っていたことが分かります。

文書から、山口氏は大鐘、藤沢、北野と支配領域が限定されています。「山口内」に東大和市域が入っていたとすれば、この時点で、東大和市域は山口氏の支配からはずされ、北条氏の直轄支配に入っていたのではないかと考えられます。その時期は次のことから天文11年（1542）から天文20年（1551）の間と考えられます。

③大石氏から北条氏（後北条氏）へ

当時、多摩の支配者は大石氏と三田氏でした。三田氏は青梅市など奥多摩地方から入間地方にかけ、大石氏は多摩・入間全域にかけて勢力を伸ばしていました。そこに、戦国大名である武田信玄、上杉謙信、北条早雲などの動きが強まり、次のような合戦が行われました。

明応3年（1494）9月、北条早雲 久米川（東村山市）に着陣
永正元年（1504） 立河原合戦
大永4年（1524） 江戸城攻略
天文6年（1537） 河越城攻略
天文15年（1546） 河越夜合戦

これらの合戦を通して、武蔵野の支配関係は変化し、河越夜合戦によって扇谷上杉方が滅亡します。その結果、多摩の支配者大石氏と三田氏は北条氏に服属し、武蔵国のほとんどが北条氏の領域になりました。東大和市域の村々も天文年間から永禄年間にかけて、北条氏、特に氏照に属したと思われる



滝山城跡

。北条氏は氏照が大石氏の婿になることで、実質的に政権交代をしました。それから間もない頃に三光院の鐘が鑄造されたことになります。

④八王子城の建設、武蔵支配

氏照は最初、滝山城に居ましたが、天正6年（1578）頃から八王子城の建設に入り、天正10年（1582）には、築城がなされ、現在残されているような形になったとされます（下山久治

八王子城主・北条氏照)。年代をはっきりさせる書類や文章がなく、現在も研究が続けられています。



築城に当たっては、周辺農民が夫役^{ぶやく}として徴用されました。東大和市域の奈良橋郷、宅部郷の農民もそれに従ったことが考えられます。ただし、氏照の支配領域に東大和地方は入らない見解もあり、北条氏直直轄地であったことも考えられます。

永禄10年(1567)には、後北条氏・氏照の統制が山口氏にも及んだらしく、北野天神社の神主を氏照が伊勢守に補任しています。任命者は山口氏ではなく北条氏照で、ここに権力の移動が終了したことを告げるものと考えられます。同年9月17日には、氏照が宮寺郷を検地し、村方の年貢を滝山城に納めるように指示しています。

蔵敷村の天正年間水帳(1573～1591)に「武蔵国多摩郡山口領村山郷蔵敷字林前」と記されています。このことから、後北条氏の支配下にあっても、山口領、村山郷が引き継がれたことがわかります。

⑤武田遺臣の来村、村山は荒地

北条氏照は武田氏と友好関係を維持していましたが、天正10年(1582)信長・家康の攻撃によって、武田氏は滅亡しました。その際、北条氏は家康に甲信を譲り、上州を自分の領分にすることを条件に和議をしました。このとき、武田氏の遺臣が北条家に属して、武蔵に移住してきました。

12月27日、氏照は、武田氏の家臣であった小坂新兵衛に滝山領内への移住を許可し、居住地として「村山之内立川分」を指定して移住を命じました。その文書の中に、「荒野の地にて知行開き次第、その者に下し置かれ候」という条項があり、移住は荒野の開発であったことがわかります。

また、多摩川の西には他国衆を置かないことを命じています。狭山丘陵から多摩川の間が原野の荒地であり、その地域には他国衆を置くこと、この地域が武田氏の遺臣によって開発されたことがわかります。東大和市の古老の話では、祖先は武田氏とするのが多いようです。

⑥小田原合戦・八王子城落城、武士の帰農

天下統一を目指す秀吉は天正17年(1589)11月24日、北条氏直に宣戦布告をし、氏直は徳川家康を通じて事態の回避を図りますが、秀吉はそれに乗らず、攻撃を開始、八王子城は落城します。天正18年(1590)6月23日 八王子城開城、7月5日、小田原城開城 家康の斡旋で北条氏直は降伏しました。

八王子城の落城により、北条氏家臣団は解体され帰農することを命ぜられました。こうして、次の時代、徳川氏による江戸時代に移ります。

第4章 川端稲荷大明神 村山絋 いづみのまわり地蔵さん おしゃぶき様（江戸時代）

江戸時代に入ると、よもやまばなしの主人公は急に忙しくなります。これまではあまり支配されていると感じなかったのに、直接の領主様が現れたからです。やがて、村には貨幣経済が押し寄せ、農業の他に換金作物や副業に追われ、飢饉に遭遇します。天災に次ぐ恐れは病気でした。医療機関がほとんどない中で、頼るのは、加持祈祷、おまじない、民間療法でした。

I 村が作られた

（1）家康の家臣が村に来た

小田原合戦が終結した、天正18年（1590）、豊臣秀吉は徳川家康に、従前の領地（駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5か国）から、伊豆・相模・武蔵・上総・下総・上野と下野の一部の7か国、計240万石（後北条氏の支配地）へと国代わりを命じました。家康は家中の反対を押し切って、関東に移りました。

東大和市域には、さっそく、家康直属の家臣が「地頭」として配属されてきました。

①最初の地頭

最初に配属されたのは、酒井実明で、早くも、天正19年（1591）5月に来ました。芋窪村と高木村を支配することになりました。しかも、450石と云う収入を保証されています。江戸では、まだ、江戸城も家臣団の居住地も整備されない状況でしたので、酒井実明は家族を連れて芋窪村に住みました。住居が間に合わない場合は、地元の勢力家、寺などに一時、仮の住まいを定めたとされますから、酒井地頭も誰か村の有力者の家を仮住まいとしたかも知れません。

②その後の地頭

その後の配属の状況は東大和市域の場合明確ではありません。周辺では、家康が江戸に入って約1年後に配置されています。東大和市域の状況がはっきりするのは約40年後の慶安2年（1649）で、江戸幕府が作成した「武蔵田園簿」では、東大和市域の全ての村々に配置されていることがわかります。

しかも、東大和市域に、芋久保村、奈良橋村、高木村、後ヶ谷村、清水村があることが記録されています。お隣の東村山市域内では、野口村、久米川村など街道の要衝を占める地域には地頭は配属されず徳川氏が直轄領として、代官が支配しました。

大和町史研究3では、右の表のように整理しています（p10）

③村切り

このような村が突如現れることになりませんが、これには訳があって、谷ツに自然発生的に成立した地域的な集団が、中世を通じて基盤をつくり、この

第8表

村名	村高	知行人・代官	知行高	※ 代官
芋久保村	380.石	酒井極之助 酒井郷蔵	170石 210	
奈良橋村	330.	石川太郎左衛門	330	
高木村	70.	酒井極之助 酒井郷蔵	30 40	
清水村	300.	浅井七平	300	
後ヶ谷村	300.	溝口佐左衛門 辺見四郎左衛門	150 150	
廻り田村	500.	中川佐平 富田平之丞	300 200	
野口村	584.9斗	※今井八郎左衛門	584.9斗	
久米川村	132.1.5升	※今井八郎左衛門	132.1.5升	
南秋津村	96.6.8.5合	※今井八郎左衛門	96.6.8.5合	
野塩村	113.	向坂与八郎	113	
宅部村				

時点で行政的に支配の対象となる「村」に仕立て上げられたと理解されます。これを「村切り」と呼びますが、その状況は第1編第1章のようであったと推定しています。

(2) 青梅街道ができた、玉川上水・野火止用水が開かれた

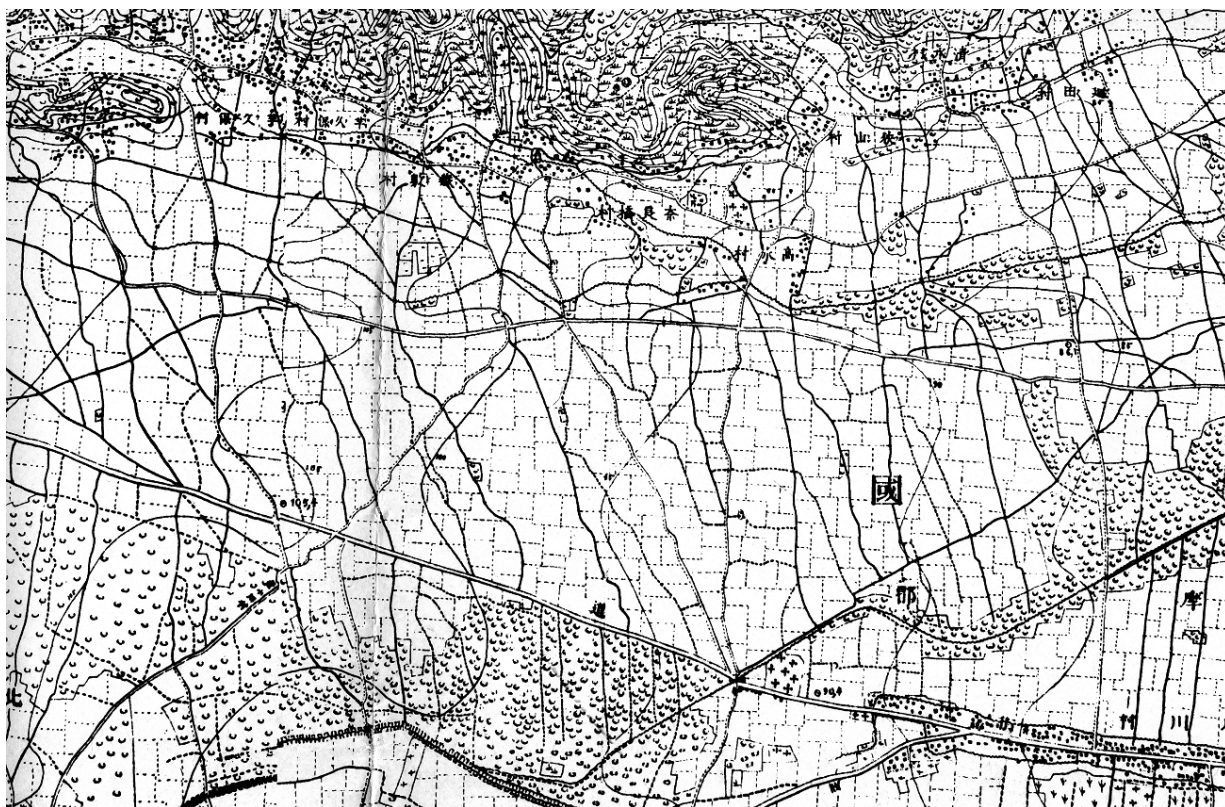
57 泥棒の話 (126) 80 芸者にばけた狐 (178)

丘陵の中と南麓に生活の基盤を置いていた、よもやまばなしの主人公達に転機が訪れます。青梅街道 玉川上水 野火止用水の開通、開削です。

57 泥棒の話 (126) では、現在の東大和市駅から青梅方面に向かう桜街道で事件が起きています。これは、青梅街道の一番最初の道筋でした。また、80 芸者にばけた狐 (178) は小川新田に用足しに行った金作さんが、野火止用水の新堀で狐に化かされます。

①青梅街道の開通

関ヶ原の戦いに勝利した家康は、慶長11年(1606)頃、江戸城と江戸市中の整備に着手します。大量の石灰が必要となり、青梅、成木地方で生産される石灰に目が付けられました。そして、焼いた石灰の運搬路として、広漠としていた武蔵野の原の中に、成木から江戸市中へ直通する道・成木街道(=青梅街道)がつけられました。



(明治14年測量図)

- ①江戸街道・旧青梅街道・成木街道 (現桜街道) ②江戸街道 (現新青梅街道)
③青梅街道 ④志木街道

最初のコースは、青梅から、箱根ヶ崎、中藤を通過、東大和市域を田無に向かいました。現在の新青梅街道がそのコースになります。

やがて、現在の青梅橋(玉川上水が開削されていないため橋はない)の辺りを通過、田無、中

野、江戸市中への道がつけられました。箱根ヶ崎から青梅橋、田無の間は人家のほとんどない原の中を横断する道路で、江戸竜の口の普請場まで13里30丁の新道とされます。

②玉川上水の開削

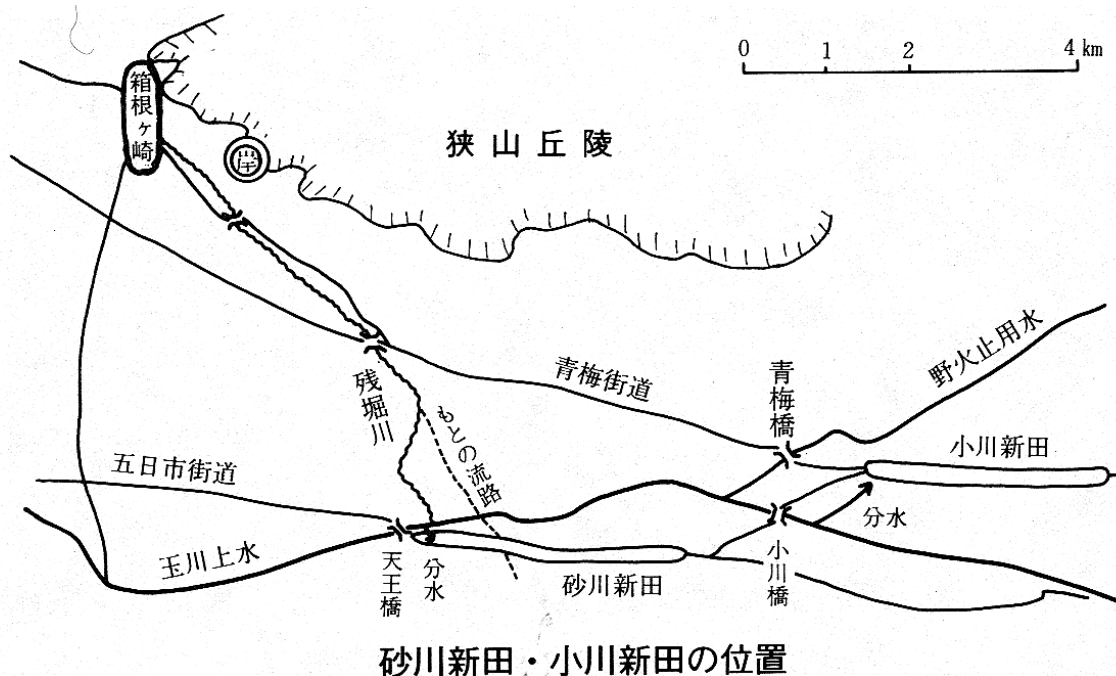
江戸市中の整備が進み、人口が増加すると飲み水の確保が課題となりました。承応2年（1653年）、舞台の幕が上がります。

立役者が揃いました。幕府の責任者は知恵伊豆と名高い老中の松平伊豆守信綱、設計・安松金右衛門、監督・伊奈半十郎（川や用水の専門家）、施工、玉川庄右衛門と清右衛門兄弟です。いよいよ新しい水路玉川上水の開削です。

承応2年（1653年）4月 4日、工事開始

同年 11月15日、四谷大木戸まで掘り上げ

この年は閏年で6月が2回あるため、それを均すと約8ヶ月の突貫工事です。引き続いて四谷から虎ノ門までの工事が行われ、承応3年（1654年）6月には、全ての工事が完了するという早業です。



(肥留間博 玉川上水 p 157)

③野火止用水の開削

玉川上水の工事が完成するのを待っていたかのように、野火止用水の開削に着手しました。なんと、玉川上水開削の総責任者であった松平信綱が、その褒美として、玉川上水からの分水の権利を得ていました。方向は自分の領地（水が無くて野火が留まらないところ）です。

工事は、承応4年（1655年）2月10日着工、同3月20日完成
超スピード工事です。80 芸者にばけた狐（178）の舞台になります。

④小川村の新田開発

この動きをじっと見ていたのが、岸村（武蔵村山市）小川九郎兵衛です。野火止用水の完成の翌年の明暦2年（1656）、幕府代官・今井八郎左衛門に新田開発の願いを出しています。

「小川村の敷地は南武蔵野に属し、東西には田無から箱根ヶ崎へ、南北には府中から所沢への二本の往還の交差点をなすにもかかわらず、全くの荒野であって、往還の人馬は寒暑風雨の節、飲水にかつて至極難渋し、行倒れて死ぬ者も多かった。ことに箱根が崎、田無の往還は江戸へ石灰を運ぶ道筋であるのに、両宿の距離が遠く五里のも及ぶので、差し支えになることが多かった。

については、「石灰御伝馬継」、さらには往還の人馬を救うために、自費をもって新田を取り立てた。

見事に、青梅街道の「石灰御伝馬継」を前面に出して、青梅街道筋への進出と新田開発を願ひ出しています。この願ひ出に、伝馬継の負担の重かった田無村の名主が早速賛成しました。小川九郎兵衛は、玉川上水から野火止用水の分水が行われるのを確認するかのよう、野火止用水の開削の翌年、明暦3年（1657）に新田開発事業に着手しています。

岸の禅昌寺に小川家の墓がありますが、小川家は後北条氏の家臣と伝えられます。この小川村の開発によって青梅街道の道筋は、箱根ヶ崎から青梅橋まで、東大和の村々の南に広がる武蔵野の中を斜めに走る直線道路に変わりました。57 泥棒の話（126）の舞台になります。

⑤青梅橋

6 笠森稲荷（13） 57 泥棒の話（126） 78 いたずらぎつね（173）

青梅橋は小川の宿場から青梅をつなぐ青梅街道の一つの要になりました。57 泥棒の話（126）は青梅橋から青梅への道で起こる追い剥ぎ騒動です。78 いたずらぎつね（173）はまだ青梅橋周辺に「山」と呼ばれる雑木林で狐にいたずらされる話です。

東大和市駅南に「御嶽菅笠」の図が掲げられています。中央の流れが野火止用水で、架けられた橋が青梅橋です。茶店があり馬宿がありました。稲荷の位置が絵とは若干異なりますが、現在の駐車場にありました。

この稲荷の御利益に感激して、馬宿の主が高木に勧請したのが 6 笠森稲荷（13）です。

橋のたもとに道しるべがあります。御嶽菅笠は天保5年（1834）発刊です。この道しるべは安永5年（1776）の道標を兼ねた庚申塔で、御嶽に参拝する菅笠の人々を見守ったのでしょう。



青梅街道が開通し、玉川上水、野火止用水が開削されると、武蔵野の原は一举に開発ブームにおそわれました。武蔵野の新田開発です。

Ⅱ よもやまばなしの主人公の新田開発

(1) 原の開墾

80 芸者にばけた狐 (178) 81 きつねの恩返し (179)

よもやまばなしの主人公も黙ってこの動きを見ていたわけではありません。早速行動に移しました。80 芸者にばけた狐 (178) は新田開発が野火止用水まで及んで「新堀」と名付けられたところで狐に化かされます。81 きつねの恩返し (179) では、砂の川 (現空堀川) の付近をなきながら通る狐を見て、「ケカチ」(変わったこと) が起こらないかと心配します。

芋久保村、奈良橋村、高木村、後ヶ谷村、清水村の各村人達は一斉に原の開発に動いたようです。

①まずは野火止用水まで

高木村には寛文9年(1669)、延宝2年(1674)、元禄3年(1690)、元文元年(1736)、延享5年(1748)の検地帳が残されています。この検地帳に記された「小字」からおおまかに新田開発の状況を追うことができます。

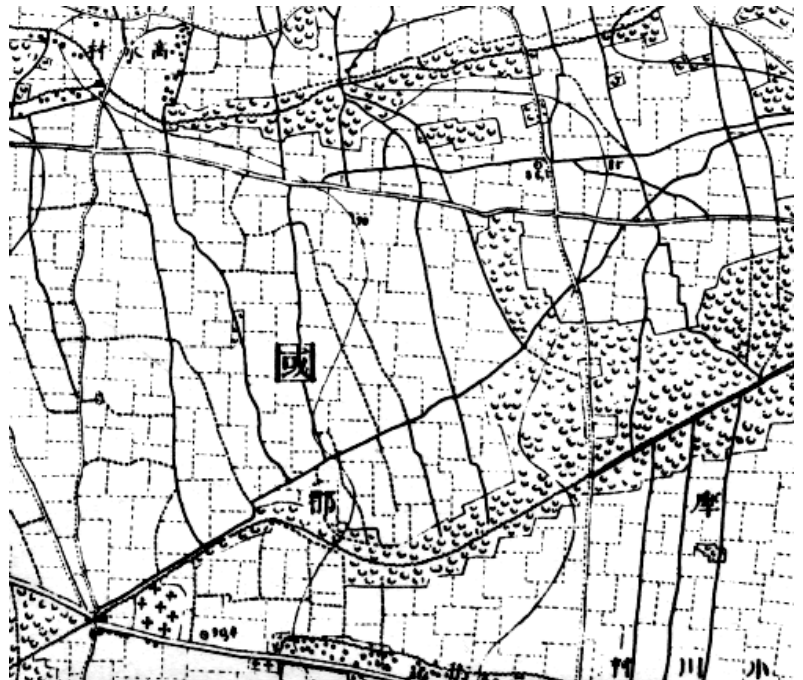
寛文9年(1669)
奈良橋境 街道内 街道向
中原

延宝2年(1674)
中奈良橋境 堀端 中原
堀際 後ヶ谷戸境

元禄3年(1690)
中原 堀端 後ヶ谷境中原

元文元年(1736)
野火留用水 後ヶ谷村前

以上の地域名を追って行くと、寛文9年(1669)に、街道内、街道向、中原の一部が検地帳に記載されていることは、空堀川以北は寛文8年(1668)以前に開発が終わり、寛文8年前後に現在の新青梅街道辺りが開発されていたことがわかります。



明治14年 堀端 野火止用水付近

同様に延宝2年(1674)から元禄3年(1690)にかけて中原と向原が開発され、一部は野火止用水の近くまで到達していたようです。用水北の字名はこの時できたのではないのでしょうか。

享保時代には幕府あげての新田開発誘導策がとられます。しかし、よもやまばなしの主人公達は元文元年(1736)には野火止用水まで開発し終わっていたようです。そして、これ以降、幕末まで、あらゆる空地を開発していったようです。元文元年と明治期の開発地を比べると、明治期が約2倍と算定(大和町史研究 1 p49)されていますので、残された空閑地をさらに徹底して開墾したことがわかります。

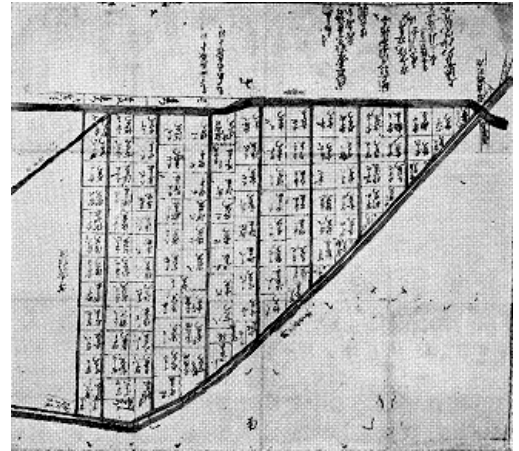
②蔵敷村の開発

新田開発をどのように進めたのかの資料はあまり残されていません。蔵敷村の内野家に貴重な「蔵

敷村開発場小前絵図」（享保9年以後作成と考えられている）が残されています。

現在の東大和市駅周辺です。当時の図面は南北が逆になって南が上に書かれますが、ここでは現地に併せて逆転してあります。下側に曲がって書かれているのが野火止用水です。

右端の交点が青梅橋になります。直線は旧青梅街道（桜街道）です。現在の東大和市駅から西方を野火止用水のぎりぎりまでを開発しています、図面が享保9年（1724）に作成されていますから、それまでに開発されたことが読みとれます。



面積は約10町、127筆で、生産高のほとんど無い「野畑」であったり、「林畑」でした。特筆すべきは、蔵敷村（正確には奈良橋村蔵敷分）の人々が揃って開発に臨み、1筆の面積をほぼ等しく割って、分配していることです。

蔵敷は奈良橋村から分村していましたが、形式的には奈良橋村の一部でした。恐らく、この開発により、耕地を持つ自立農民が生み出され、奈良橋村からの独立ができたのではないかと考えています。



青梅橋から西方は御岳菅笠に上図のように描かれます。右ページ上の山は山口観音です。左ページの山は御岳の山々で、途中に家を書き込まれていますが、「丸山台の一つ屋」です。

③泥棒の話

57 泥棒の話 (126)

よもやまばなし「57 泥棒の話 (126)」はこの桜街道で起こった話です。『むかし、人家があまり

なく、所々にこんもりと雑木林が見えるだけの、一面の原だった頃、青梅橋(東大和市駅北側)から西へ富士山を眺めながら歩く旧青梅街道には、一抱えもある桜の並木が続いていました。

この街道沿いにダンゴ、お茶、お酒などを売っている“休み処”がありました。七左エ門という人が商っていましたので“七店”と呼ばれていました。花見客の賑いも日暮れになると、人家から離れているのでたいへん淋しくなります。人通りの少なくなった街道には追剥が出没することがありました。ある日、人通りも途絶えて困った追剥のしわざなのでしょうか・・・七店に泥棒が押入ったのです。』

と話を始めます。その店は現在の桜街道とモノレールの通道(芋窪街道)との交差する辺りにありました。御岳菅笠の「丸山の一つ屋」辺りです。しかし、この話は明治になってからのことのようにです。御岳菅笠に桜は見えませんし、桜を植えたのは明治 14 年(1881)頃とされ、店を出したのは、明治 27(1914)～8 年頃とされます。

江戸時代に遡れば、安政 2 年(1855)、江戸に大地震があり、玉川上水の羽村の堰が壊れました。その修復の状況を見分するため、安政 4 年 4 月、老中一行が 264 人、馬 90 匹を引き連れて通ったことがあります。里正日誌はこの年 4 月に入ると、その準備やら接待やらに大忙しの様子が書かれています。

(2) 地頭と村方三役

4 川端稲荷大明神 (9)

「泣く子も黙る地頭」と恐れられた存在でしたが、最初に村に来た家康の家臣は支配地にある神社や寺院を修復したり、寄付をしたりして、地元にとけ込もうとしたようです。墓をつくって永住を考えた人もいます。

よもやまばなし「4 川端稲荷大明神 (9)」の稲荷様は奈良橋村を支配した石川地頭の屋敷で祀られたものとも云われます。しかし、村人にとってはこれまで全く関係のない支配者で、その出身地はまた多彩でした。



酒井地頭の墓

①地頭の出身地と陣屋

郷藏と酒井極之助(芋窪村と高木村)

最初に村に来た酒井実朝(明)は近江国の鎌波の城主土肥近江守実秀の子とされます。落城後に家老の酒井姓を名乗って武田信玄に仕え、天正 10 年(1582)、武田氏が滅びると徳川家康に仕えて、芋窪村に来たようです。

酒井氏は芋窪村に居住して、江戸城へは馬に乗って青梅街道・江戸街道を通って通ったとされます。当初は村の有力者や寺院に住んだようですが、やがて独立した「陣屋」を設け、地頭屋敷、地頭畑などを持って生活しました。



芋窪村、高木村酒井地頭陣屋跡とされる石井家

東大和市では芋窪に「陣屋」と屋号を伝える家が残されていて、周辺には「木戸」の屋号もあり、

一帯が地頭の営んだ陣屋であることを物語ります。

石川太郎左衛門（奈良橋村）

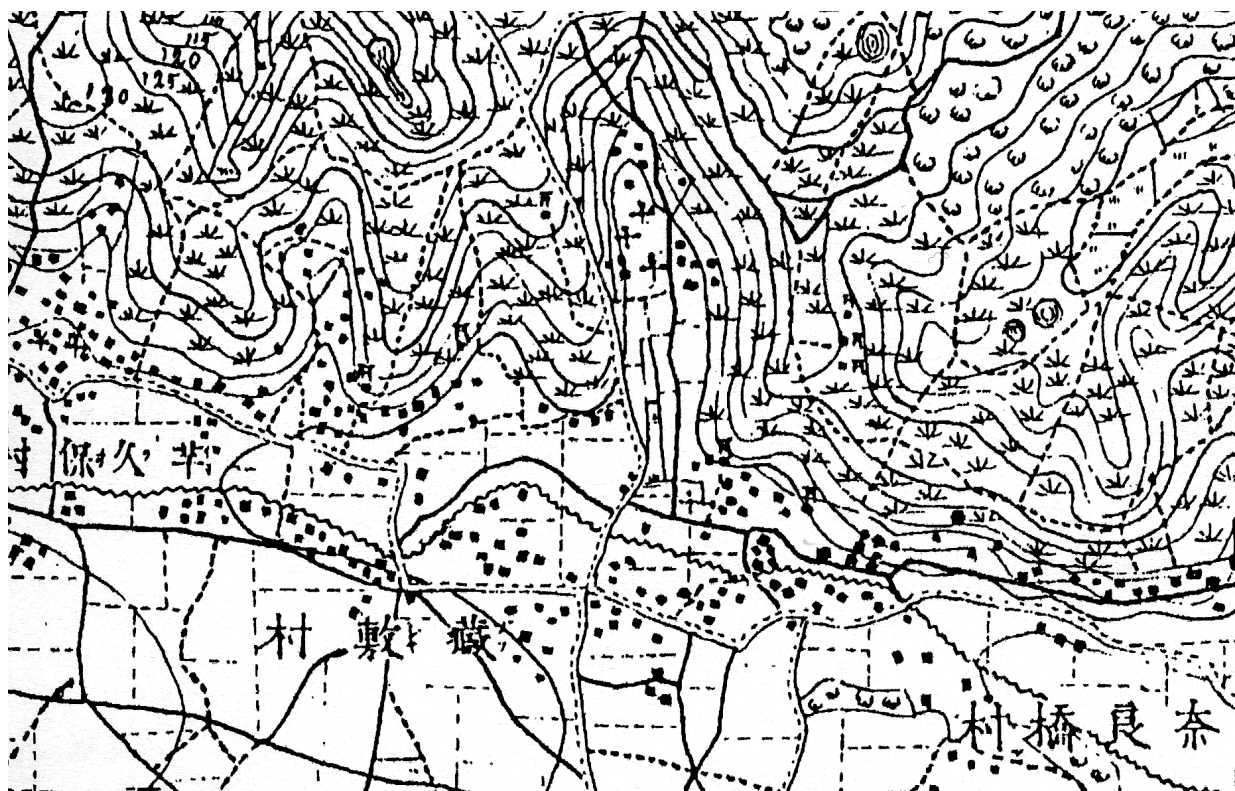
4 川端稲荷大明神（9）

奈良橋を治めた石川太郎左衛門は家康の祖父松平清康に仕えて以来の徳川家譜代の家臣で、蔵敷村も併せて治めました。奈良橋に住み、八幡神社入り口付近に陣屋を構えました。

その屋敷に祀られたのが、4 川端稲荷大明神（9）と伝えられます。三代忠重、四代忠総、五代矩重の墓石が雲性寺に残されています。六代からは江戸に移りました。



川端稲荷の現状 右側の道は八幡神社・雲性寺に至る 石川地頭の墓 雲性寺



川端稲荷 八幡宮 雲性寺 愛宕社（修験大徳院）位置図（明治14年測量図）

逸見四郎左衛門（後ヶ谷村）

宅部村の逸見四郎左衛門は甲州浪人（逸見郷）で、徳川家に仕官。相模、武蔵国で500石を知行しました。貯水池に沈んだ杉本に陣屋がありました。代々名主を勤めた杉本家（元は石井）の先祖・石井勘解由は大阪の陣の時、逸見四郎左衛門と共に出陣したとされます。

溝口佐左右衛門（内堀村）

履歴はよくわかりませんが、伏見城に詰めているようです。元文3年（1738）6月、幕府領になっているので、この時には村を離れています。

浅井九郎左衛門（清水村）

三河国額田郡の出身で、家康、秀忠に仕え、豊島郡と多摩郡清水村に領地を得ました。「狭山の葉」によれば、『元は橘姓にて、四代目浅石七平次、元久の代、改めて藤原姓を名乗る、本国は近江』としています。

清水村に「成就院」という寺院を開基（東京都青年の家があった付近）して、墓があったといわれます。しかし、延宝9年（1681）には、清水村から江戸小石川へ墓所を移しています。

②江戸詰・蔵米取り

17世紀になると、江戸の整備が進み、地頭にはいくつかの領地を分散して与える政策が採られ、地頭は単独の村から離れて、家族とともに江戸に住むようになりました。

そうでない場合は、何らかの理由をつけられて、領地を幕府に没収され、天領化＝幕府の直轄地化されています。多くが、知行地を返上して、蔵米取りとなったようです。地頭のいなくなった村は、名主などの村方三役によって運営の体制がとられました。

③村方三役

4 川端稲荷大明神（9）

「奈良橋の八幡神社へ行く道が、青梅街道と交さすところに、朱ぬりのお稲荷様があります。・・・祠のすぐうしろを奈良橋川が流れているので、川端稲荷と呼んでいます、昔から勘兵衛稲荷とも云われていました。」よもやまばなし「川端稲荷大明神」は、こうして、奈良橋村の名主・岸勘兵衛さんが鬼門除けに祀った稲荷の話を始めます。

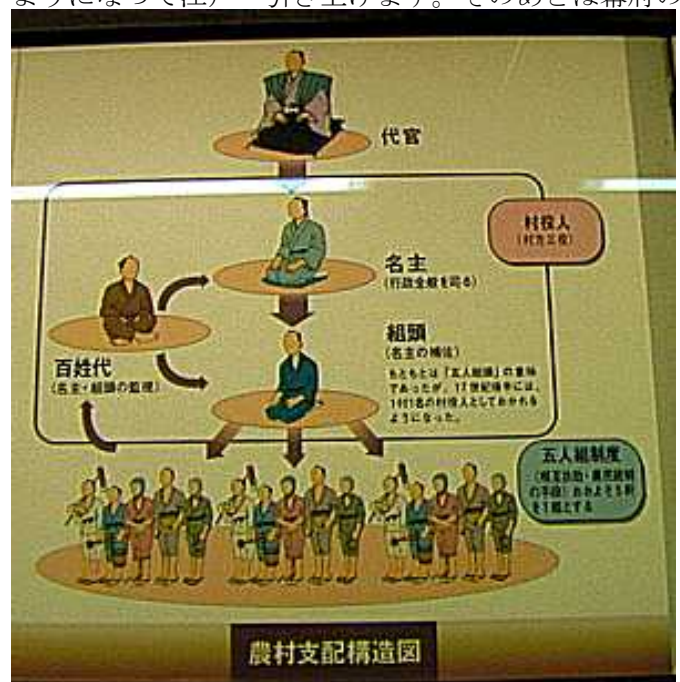
家康から任命された地頭は、江戸市中の整備が進むと共に、また、領地を幕府に返して、代わりに蔵米を支給される（一種のサラリーマン）ようになって江戸へ引き上げます。そのあとは幕府の代官が支配することになりました。代官は広範囲な地域と職務を担当しますので、年貢をはじめとする実質的な村の仕事をこなす体制が必要になり、村方三役が組織化されました。そのトップが岸勘兵衛さんのような「名主」でした。

東大和市郷土博物館に非常にわかりやすい図が展示されています。

代官のもとに村役人として「名主」「組頭」「百姓代」をあげ、五人組制度が描かれています。

名主の役割は、村政全般に関わる行政責任者の位置にありました。蔵敷村の例では

- ・年貢の徴収、納入、村入用の管理、共同用地や溜め池、灌漑用水の管理



東大和市郷土博物館「農村支配構造図」

- ・公文書諸、帳簿の管理（公文書には名主の署名、捺印が必要）
- ・村を代表しての他村との交渉
- ・代官との交渉、請願の処理
- ・村人相互の土地移動（主として質地）に証印
- ・代官からの触書、廻状類の管理

原文を帳面に書き写したうえで、その原文は定^{じょうづかい}使に命じて隣村へ回付

その状況は「里正日記」によく残されています。北条氏照の時代にも同じ言葉があるので注意。

- ・その他信仰的側面を含め村人達の日常生活全般にわたって中心的な役割を果たしていた。
- ・名主と組頭は報酬として給料を受けました（村入用の一部として村民に割当）。
- ・名主免（所持地のうち領主の許可により年貢のかからない土地とする）がありました。

蔵敷村の名主・内野家



組頭・年寄

名主を補佐する役職で名主の不在の時、名主の代理としてその仕事に就きました。

百姓代

名主や組頭・年寄などの職務の監視役として置かれ、画像のように縦ラインからはずれません。

名主らの職務上の不正疑惑がもとで起こった村方騒動などを経て、江戸時代中期頃に生まれました。後追的に作られた制度ですが、一般の村民を代表的する立場が築かれて、実態としてどのように運用されたのか興味を惹きます。

④地頭と名主

名主役は村を代表しましたが、常に平坦な道ではなかったようです。よもやまばなしの紹介ですので、若干裏話を紹介します。清水村では地頭の乱行により名主を初め村人が大変困った話が伝わります。文政2年（1819）の出来事です。五十嵐民平氏が著した「五十嵐氏考」で次のように書いています。

『領主浅井家の当主（楯之助）が乱行の限りを尽くし、領内の農民たちに飽くなき苛斂誅求を加えたのである。ために農民たちは疲弊困窮し、勿論名主たちも例外ではなく、資産は傾き遂に堪えきれず、四ヵ村の名主がことごとく退役願を出すに至った。

すると地頭は得たりとばかり、各村内の多少とも金廻りのよさそうな者を選んで、強制的に名主役を申し付け、名主になった祝儀金と称して多額の金を取上げた。当村内では△兵衛という者を目をつけ、名主役を申し付けたが当人が辞退すると、これを湯島天神表門前のいせ屋彦七宅へ宿預けとし、十日間も監禁して無理矢理承知させたのである。』（p 63）

歴史の表面に現れないだけに、考えさせられることがまだまだ沢山ありそうです。

Ⅲ 村の生業・農間稼ぎ

江戸時代の谷ツの村の生活は、第1編で、新編武蔵風土記稿によって紹介しましたように、わずかな水田と畑地によって主食を得て、薪炭をつくり、養蚕、織物などの副業によって生計を立てていました。新編武蔵風土記稿は

- ・田は少く畑は多し、土症は黒土なれば宜からず、
- ・男女耕作をなせる暇には、男は薪をとり女は蚕養のことを務めり、この辺往々かくの如し、村内尾張殿鷹場に属して、右の役をつとめり、
- ・耕作の暇には薪を伐りて江戸へおくり、傍ら養蚕のこともなせり、と各村がほぼ同じ状況であったことを伝えます。

その後も、ずっと同じような状況が続き、第二次世界大戦後に大きく変化しました。よもやまばなしは江戸時代の名残から現代まで、豊かに村人達の生活ぶりを伝えています。

(1) 農業

4 川端稲荷大明神 (9) 11 雨乞い (26) 27 ぼろっ籠 (59) 72 くずっぱ (161)
29 村山餅 (62) 30 機場あそび (66) 20 愛染様 (43) 55 こぜさん (121)
50 火をふところに入れた法印さん (111) 63 あばへば(粟穂稗穂) (139)
83 からす二題 (182) 10 内堀部落の女堰 (23) 89 たっちゃん池 (196)

東大和市域の村々の農業次のように区分されます。

- ・丘陵の中と谷ツの農業＝僅かの田と畑作
- ・丘陵の南に新田開発した原の農業＝全て畑作

江戸時代から昭和初期まで、肥料と農具の面で大きな変化があった他は農業の形態はあまり変わらず継続されました。新編武蔵風土記稿に記される江戸時代の村々は全て農業を専業としています。わずかに商業・工業が行われていますが、その人達も本質的には農業者でした。その農業は自然と社会的な環境に大きく影響されていました。

第2表 家族員数 (百姓家のみ)

A 後ヶ谷村							B 蔵敷村				C 高木奈良橋村	
	永宝4	享保14	天明2	寛政6	天保12	明治5		安永8	天明7	弘化5		明治5
10人					1	2	10人			2		1
9					2	3	9			1		1
8	1		1	1	4	7	8	2		1		5
7	2	1	2	1	6	7	7	7	4	6		6
6	7	3	3	6	9	9	6	5	9	10		5
5	12	6	12	9	8	7	5	8	7	11		5
4	8	13	13	9	4	8	4	15	13	7		2
3	8	17	6	7	2	2	3	9	13	5		1
2	2	2	3	5	3		2	5	5	5		1
1			5	7	6		1	5	5	3		
計	40	41	45	45	45	45		56	56	51		27

この表は後ヶ谷村と蔵敷村の人口動態を表します。後ヶ谷村では天明2年(1782)年から明治5年(1872)までの90年間家族数は45軒で変化がありません。この表には5歳未満の記載漏れが考えられることを前提にして、後ヶ谷村では平均家族数は寛政6年(1794)までは3人

から5人で、天保12年（1841）以降4～6人になっています。（大和町史研究 10 p 71）

このように、谷ツと原の新田農業では、大きな制約があったことがわかります。江戸時代のよもやまばなしの主人公達はこのような環境の中で生活していました。ごく簡単ですが農業の実態を見ておきます。

①谷ツの田

谷ツには僅かですが田がありました。しかし、「ドブ田」で、泥が深くて腰までもぐるような状況でした。田植えができないので、渡り木として松丸太を30センチ^{まきつけだ}くらいの深さに沈めておき、足さぐりでその上を歩いて種蒔きをしました。直接、田に粃を蒔く蒔付田でした。

②原の畑

圧倒的に多かった畑作は、次のような農事暦で行われました。

一月、クズハキ。堆肥のキリカエシ。麦フミ。
二月、麦フミ。農機具の手入れ。年間使用の縄づくり。
三月、サツマ床作り。ネギの種まき。ジャガイモを植える。
四月、麦の中耕。里イモを植える。
五月、**オカボ**・ゴボウ・大豆・小豆の種まき。草取り。ハルゴ(春蚕)掃立。茶摘み(一番茶)。
六月、麦刈り。サツマ植え。草取り。茶摘み(二番茶)。春蚕収繭。
七月、麦脱穀。畑中耕。ニンジン・菜まき。
八月、大根・白菜まき付。初秋蚕掃立。収繭。
九月、晩秋蚕掃立。小豆収穫。
一〇月、晩秋蚕収繭。大豆・ニンジン・ゴボウ収穫。
サツマイモ・(サトイモ)掘り。**オカボ**・アワ苧取り。
十一月、大麦・小麦まき付。大根・白菜取入れ。
十二月、麦の中耕。麦ふみ。

これらの農作業に関係するのが、よもやまばなしの「27 ぼろっ籠 (59)」「72 くずっぱ (161)」です。

③畑の作物

表Ⅳ—50 各村における作付作物の種類

村 名	作付作物の種類
横 田 村	粟・稗・芋・もろこし・苳・大豆
中 藤 村	大麦(はだる・こうぼう)・小麦(赤ぼうず・白ぼうず・あらだじ)・蕎麦・稗(やりぼ・こじろ)・菜・大根・苳・黍(うずら・めじろ)・粟粃(ろくごう・黒うわ)・餅(まつ山・こあくび)・胡麻(白胡麻・黒胡麻)・粃(みのこぼれ・しらす)・餅(どてこし・かさもち)・芋・粟
岸 村	大麦(しらば・こう坊・六角)・小麦(阿弥陀・白むき)・粟(梗久蔵・餅白こぎ)・稗(やり穂・白ひゑ)・苳・芋・蕎麦・菜・大根・黍・胡麻(黒胡麻)・粃(尾張)・餅(五郎兵衛)
三ツ木村	米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・稗・黍・芋・大根

『資料編近世』50・51・52・53より作成

畑の作物は、**オカボ**(陸稻)・大麦・小麦・粟・大豆・小豆・サツマイモ・ニンジン・ゴボウ・菜・大根・白菜・ネギなどです。

このほか、ジャガイモ・サトイモを作ったという話もありますが、確かではありません。武蔵村山市域の江戸時代の村々の作付けは左の表の通りでした。恐らく東大和市域の村々も同じような作付けであったと思われます。

◎**オカボ**(陸稻)が栽培されていますが、農民の日常食は大麦・小麦製品が多かったようです。**オカボ**も含め、米は物日(お祝いや祈りの日)か病気の時にやっと食べられる状況

であったと伝えられます。

「狭山之栞」に清水村の氷川神社が「小麦の牡丹餅に麦焦がしをまぶしたるを供す」とありますが、これが、精一杯の御馳走であったと思われます。よもやまばなし 4 川端稲荷大明神 (9) に、「稲荷講は、毎年二月の初午に、赤飯をたき、油あげ、目ざし、うどん、お神酒などを供えて祭ります。」とあるのは、相当に裕福な講ではないかと思っています。

④用水

10 内堀部落の女堰 (23)	87 ねずみ沢のかっぱ (193)	88 こさ池とかゆ塚 (195)
89 たっちゃん池 (196)	90 貯水槽になった弁天池 (198)	

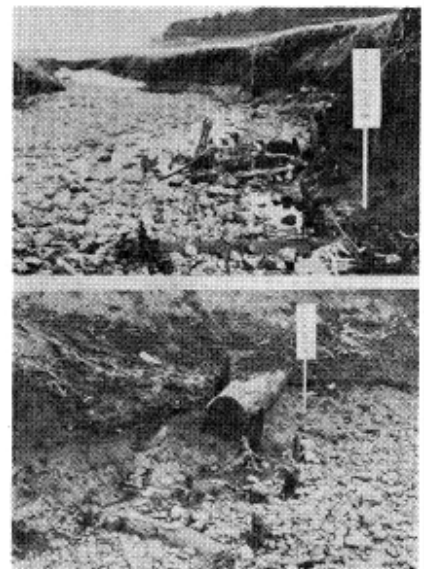
よもやまばなしには、池、溜池に関わる話が多く出てきます。「内堀部落の女堰」は貯水池に沈んだ石川＝宅部川をせき止めて田用水にする話です。「たっちゃん池」は東村山市に属する宅部の湧き水を利用した田用水で起きた話です。

谷ツの水田にとって、水利確保は何よりも重視されました。川があれば堰を設け、谷戸には溜池を設けました。新編武蔵風土記稿では、例えば後ヶ谷村では、「水利 溜め池 五ヶ所」などと記されています。余程、重視されていたのでしょう。

溜池の知恵は驚くばかりです。谷の湧き水は量が限定され、冷たいばかりか鉄分が多く、水田には好ましい条件ではありませんでした。その改善のため、先ず、可能と思われる場所に貯水用の溜池がつけられました。



次に、水温を調節し、酸素を増やすため、溜池から水路を造って水を迂回させ、その後に各田に配水する装置がつけられました。東大和市内では見られなくなりましたが、武蔵村山市内の谷ツに復元されています。このようなところまでと先人の知恵に魅せられます。



図Ⅲ-5 内堀堰跡

また、溜池には神が祀られました。蔵敷の弁天池、後ヶ谷村の二つ池には厳島神社が祀られました。二つ池公園内には「厳島大明神跡」の碑が建てられています。

左画像は二つ池公園の厳島大明神跡碑、右は内堀堰の跡（多摩湖の歴史 p 221）

⑤肥料と肥溜こえだめ

4 川端稲荷大明神 (9)	27 ぼろっ籠 (59)	72 くずっぱ (161)	83 からす二題 (182)
---------------	--------------	---------------	----------------

よもやまばなし「川端稲荷大明神」には、近くに肥溜があり、お使いの狐が神様が「気分が悪い」と伝えて、肥溜を移す箇所があります。「からす二題」は蔵敷の三本杉のカラスが、折角畑にまいた肥料の下肥を食べてしまうという、いたずらが語られます。

東大和市域の村々は、水田はほんのわずかで、畑作が中心でした。しかし、「野方軽土」で地味が悪く、大量の肥料が必要でした。肥料は、稈を刈ったり、「ぼろっ籠」で、「くずっ落」などを集めて下肥と混ぜて堆肥にしました。時には下肥を直接畑にまきました。また、下肥を溜め、中和す

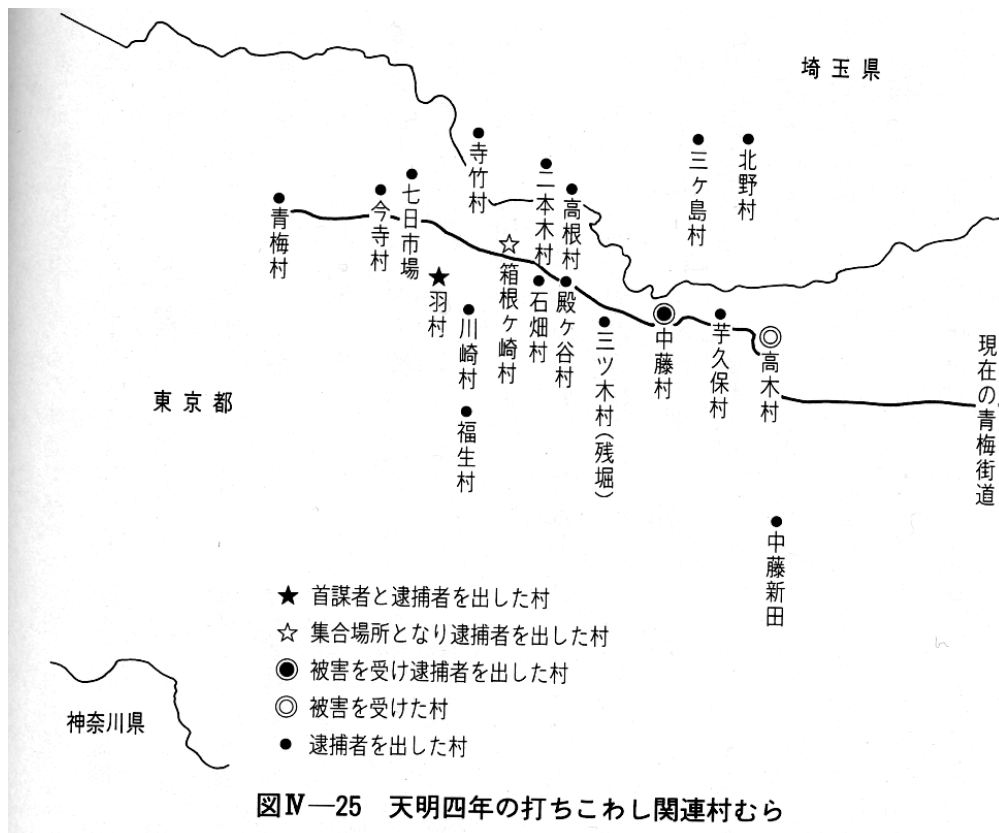
るため、肥溜をつくりました。しかし、それだけでは収穫が上がらず、より効力の強い肥料を買い入れざるを得ませんでした。

主に使用されたのは、糠・灰・干鰯^{ほしか}・麦^{あわ}粕などで、これらは商品肥料＝金肥です。現金収入の少ないよもやまばなしの主人公は、この購入のため途方もない負担を負う事になります。肥料商人は多くが村の富有農民でした。1700年代には貨幣経済が村に押し寄せていましたが、まだ、直接に現金買いをすることができない段階で、収穫物を担保に肥料を借り入れ、収穫後の穀物で返済する方法がとられました。

この仕組みの中で、肥料商は価格操作を行いました。江戸や肥料生産地から安価に仕入れ、農民の需要が多くなり価格が上昇した時に貸付けを行います。返済時には、返済までの間の利子分も請求しています。農民は天災の上に、さらに経済的な打撃を受ける事になり、農民と肥料商の間に、軋轢、確執が起こります。大きな事件は天明4年（1782）に起こりました。「武州村山騒動」と呼ばれる打ち壊しです。

天明4年（1784）2月28日、夜九ツ（午前0時）、図の地域の農民（一説に2～3万人）が箱根ヶ崎の狭山池に高提灯をたてて集まりました。やがて、「山王前」の声と共に、クワ、スキ等の農具を手にして、現在の青梅街道を中藤村（武蔵村山市）の豪商「山王前」＝文右衛門を目指して押し寄せました。

文右衛門側では鉄砲、弓矢を持ち出して応戦の気配を見せましたが、逃げざるを得なかったとされます。一揆は、中藤村で文右衛門の親戚（質物が隠されていた）、名主佐兵衛と佐兵衛百姓代与七家の3軒を打ち壊し、次に東大和市の高木へと進み、名主庄兵衛家を襲いました。そして、29日巳の刻（午前10時）、解散して「いずこへか四散した」とされます。



図Ⅳ—25 天明四年の打ちこわし関連村むら

打ち壊されたのは5軒で、中藤村名主2、高木村名主1および中藤村百姓2（内1名は百姓代）でした。

高木村名主庄兵衛は油屋仲間29軒の総代でした。

「武州村山大変之事」は、庄兵衛家について、

「・・・米穀^{かます}雑穀蒔俵 吸入皆広庭に持出し、俵切散

し雑穀微塵にするのミならず、油酢醤油持出し彼広庭にてたが切れハ、油は流れて玉川の如し、雑穀ハ出水の砂之如し、此所にて以上三ヶ所にて質物を焼捨て・・・」と記しています。

芋窪村から14名が捕らえられる

打ち壊しを受けた5軒は幕府に届け出たことから、江戸町奉行から取り調べ人が中藤村と高木村に派遣されてきました。取り調べが行われ、63名が捕らえられ、江戸送りとなりました。吟味は長引き大半が獄死したとされます。釈放され村預けとなったのは11名でした。

捕らえられた者の内、芋窪村から14名が捕らえられています。一村としては最高人数でした。なぜ、このような結果になったのか調べられていますが、芋窪村の村人達の中藤新田の開発関係によるものであろうと考えられています。

よもやまばなしに描かれる肥料と肥溜には、こんな悲惨な背景がありました。

⑥天明の飢饉と行人塚

94 行人塚 (206)

狭山丘陵の中複の^{おおすじばた}大筋端に塚があります。「昔、ここは、足腰の立たなくなった老人や行きだおれの病人達が、静かに死を待つ場所であった・・・」「・・・元禄の頃といわれていますが、一人のお坊さんがここを通りかかりあまりに悲惨な様子を悲しみ、里人達にその供養をたのみました。

「私が打つ鉦の音を聞いたら、里人よ山にのぼってきて死体をねんごろに葬ってほしい」

それから、鉦の音を聞くと、村人達は死を知って、手厚く葬るために塚まで上がってきました。他にない、自らが死地に赴く娵捨山伝承です。その場を「行人塚」と呼びました。よもやまばなし

では、元禄の頃を暗示しますが、時代は特定されていません。今回の講座では、敢えて天明の時代を選んでみました。

江戸時代に東大和市域の村々は幾たびかの飢饉を経験しますが、天明の飢饉が一番大きかったようです。天明に入ると連年、自然災害と天候不順が重なり凶作が続きました。左一覧のように天明2年(1782)7月には、大地震があり奥羽地方と西日本が凶作にみまわれました。

天明3年は春になっても寒く、春作は不作で穀物の値はあがる一方でした。狭山丘陵近辺の村々でも2年連続で雨の多い冷夏となり秋作への影響が心配されている最中に、7月6日、浅間山が噴火し、噴煙からの降灰・降砂による被害が一带に及びました。奥羽地方では産児の間引きが話題になったときです。

多摩地域では10月、伊奈半左衛門の代官所から夫食の足しにするための「藁餅仕法」の触れが廻されています。12月には明和八年の場合と同様に、芋久保村・宅部村他の7か村の役人の連名で伊奈半左衛門の代官所に夫食の拝借を願い出ています。

米価は上がり「明和安永大変天明記録」によると、年末には100文・8合であったものが、年が明けると100文・6合となる状況でした。

●自然災害と事件

- 明和7年(1770) 夏秋大旱魃、粟・稗枯死
- 同 9年(1772) 8月大風雨被害大(安永元)
- 安永6年(1777) 4月大雪、麦全滅
- 天明2年(1782) 7月大地震、民心動揺
- 同 3年(1783) 7月浅間山大噴火、降灰・冷夏のため飢饉
- 同 4年(1784) 1月大風雨、飢饉続く
- 同 4年(1784) 2月武州村山地方で打毀しおこる
- 同 6年(1786) 初夏から晩秋まで多雨、飢饉となる
- 同 7年(1787) 物価騰貴続く、飢饉
- 同 8年(1788) 1年間の天候雨7割、粟不作
- 文化13年(1816) 8月大風雨
- 文政4年(1821) 1月から7月末迄降雨なし、大旱魃
- 同 5年(1822) 1月から6月迄多雨、河川決潰、作物成育悪化
- 同 6年(1823) 6月大雨、河川決潰、浸水
- 同 7年(1824) 7月同上
- 天保4年(1833) 冷夏、凶作のため飢饉
- 同 7年(1836) 5月から8月末迄多雨83日
- 同 7年(1836) 11月狭山丘陵辺に貼札騒動おこる

※指田家文書、石川家文書などによる。

天明4年（1784）閏正月に幕府は、米・雑穀の余剰分の売り払いを命じますが、食料不足と買い占めによる米価の高騰は激しく、ついに、前項で紹介した天明4年の打ち壊しが起こります。

さらに天明6年（1786）、7年（1787）と天候不順で、物価は騰貴し続け、蔵敷村の名主内野氏は里正日誌に次のように書いています。

表1 蔵敷村の人口動態

年代	家数	人 口		村内召抱		奉公出	
		男	女	男	女	男	女
安永7	57	250	(130 120)	8	(2 6)	21	(12 9)
8	//	249	(131 118)	7	(3 4)	18	(11 7)
天明1	//	249	(139 110)	8	(6 2)	11	(6 5)
6	//	244	(130 114)	5	(4 1)	18	(13 5)
7	56	229	(121 108)	3	(2 1)	16	(9 7)
8	55	210	(112 98)	6	(3 3)	14	(8 6)
寛政1	//	219	(112 107)	8	(5 3)	16	(12 4)
2	//	218	(110 108)	6	(4 2)	15	(10 5)
3	//	218	(116 102)	5	(3 2)	12	(7 5)
4	//	213	(108 105)	6	(3 3)	17	(12 5)
5	//	216	(109 107)	6	(4 2)	15	(10 5)
6	//	218	(111 107)	9	(7 2)	12	(6 6)
8	53	201	(107 94)			16	(7 9)
10	57	230	(120 110)	8	(5 3)	8	(4 4)
11	//	230	(113 117)	7	(5 2)	9	(4 5)
12	//	219		6	(4 2)	11	(7 4)

『大和町史研究』1 関利雄「江戸時代後半期の農村人口」から作成）

○天明六年丙午正月元日、丙午ニて日蝕皆既闇夜の如し、四月迄雨なく烈風、五月より雨繁く隔日の様なりしが、七月十二日より大雨降続き大洪水（千住・小塚原ハ水五尺もありしと、浅草迄ハ船ニて通行、永代橋二十間余流失）、夏より冬ニかけて諸国大飢饉

○天明七年春より江戸ニ而米価高く、初めハ百文に白米六合なりしに五合となり、四合となり、四、五月より又上りて三合となる

人口減

左の表は安永7年から寛政12年までの蔵敷村の人口動態です。天明6年までは240人台を占めていますが、天明7年以降減り始め、表の期間中は遂に復活することはありませんでした。

天明の飢饉は村にこれほどのショックを与えています。「喰いブチを稼げなくなった」高齢者が、社会保障も社会福祉もないとき、自ら死地に赴いたのではないかと、行人塚の話に接する度に、目頭が熱くなります。

東大和市史 p 178

天明の飢饉以後、農村には余力はすっかり無くなり、荒廃の時期を迎えます。幕府も寛政の改革により荒廃農村の復興や人返し、荒備貯穀、郷蔵の設置、窮民救済など手を打ちました。しかし、村を捨てる没落農民が多く、長脇差の無宿者や博徒などが横行し、歌舞伎・手踊りなどが農村に入り、消費は逆に華美になったことが伝えられます。

よもやまばなしでは、38 ザンザラ（87）、55 こぜさん（121）、56 親分とバクチの話（123）57 泥棒の話（126）などを伝えますが、この時代にも似た話題があったと思われます。

⑦雨乞い、あぼへぼ（粟穂稗穂）

25 雹の話（55） 26 赤っ風（57） 11 雨乞い（26） 63 あぼへぼ（粟穂稗穂）（139）
66 三日の正月（144）

よもやまばなし「雹の話」は東大和市域の村々に雹がよく降ったことを伝えます。「赤っ風」は武蔵野の原野を新田開発したことによって「神棚にごぼうの種がまける」ほど赤土が舞ったことを伝えます。

自然に制約された中で、多くの人々が農業を専業とする社会では、天候の影響を大きく受けまし

た。特に、谷ツから原へ進出した新田ではわずかの天災でも被害があらわれました。それが重なり、例えば、享保16年（1731）には、度重なる風雨の影響から収穫が落ち、後ヶ谷村では11月に、百姓44軒のうち32軒に食料がなく、村の相互援助では切り抜かれずに、幕府に夫食拝借願いを提出しています。

明和7年（1770）には早魘（しかもこの年は大干魘）で、種芋1斗を植え付けて、収穫は1斗ざるに一ぱいという状況でした。しかも、秋作の粟・稗も不作で、ついに、翌、明和8年2月に幕府から夫食金の拝借を行なって危機を脱しました。後ヶ谷村では総戸数45軒中38軒が「飢人」と認定され、4両2分余が拝借されました。

あぼへぼ（粟穂稗穂）は字の通り、粟穂（アワの穂）と稗穂（ヒエの穂）をかたどって神に捧げ、豊作を祈る行事で、アワとヒエが江戸の中頃の村人達の常食でした。黄みを帯びたニワトコで作る



アワ、黒みを帯びた櫨の木（かつんぼう）で作るヒエは、開いた花を形にし、まさに願いそのものに手を込めて作られました。清瀬方面では部屋の長押に年間を通じて飾ったとも云われます。

よもやまばなしの主人公達は榛名神社に雹除けの祈願をし、時には雨乞いをし、小正月には収穫を願って「あぼへぼ（粟穂稗穂）」の行事をしました。なかなか厳しい状況でしたが、願いが叶うと、大喜びで村中で祝いました。高い木に登って、祝いのフレ（触）を告げる「三日の正月だあい」の声は、さぞ、弾んでいたことでしょう。

（あぼへぼ東大和市史資料編9 p 85）

（2）養蚕・機織り

29 村山絋（62） 30 機場あそび（66） 20 愛染様（43）

よもやまばなし「村山絋」は一世を風靡した村山絋の起源について、芋窪村石川の荒畑源七を紹介します。そして、新編武蔵風土記稿は

- ・男女耕作をなせる暇には、男は薪をとり女は蚕養のことを務めり、この辺往々かくの如し、
- ・耕作の暇には木綿絋をおれる外に、蚕を以て女子の業となせり、

と農業の合間に「蚕養のこと」「木綿絋織り」を農民が務めたり、業としていることを伝えます。当時は、この仕事が現金収入を得る最大の道でした。ところが、歴史的にこの面を追うと困難に遭遇します。「木綿絋織り」の実態が混沌としているからです。

①養蚕と木綿絋織り

養蚕の言葉の中に、織物を含めて受け取られる場合がありますが、ここで云う「蚕養のこと」＝養蚕は、蚕を飼育して繭玉にして売ることをさします。また、新編武蔵風土記稿が「木綿絋織り」を記録していますが、絹織物ではなく、あくまで木綿織物で、歴史的にはこの区別も必要になります。

繭玉から糸を紡ぎ、機織りをして、絹製品として仕上げるのは江戸も中期以降です。それも、この地域では、養蚕からの一貫した製造ではなく、機織り機を借り受けて「賃機」をするなど、実質

上の下請けが多かったようです。そのため、価格の変動が激しく、江戸末期、明治、大正には外国取引が大きく影響し、借金地獄に陥ることさえありました。

②木綿

東大和市域の村々が、木綿とどのように対していたのかは、ほとんど資料がありません。わずかに、「綿」を年貢或いは領主に納めた記録があります。

- ・堀之内村 元和4年（1618）永三貫六百九十文 綿九貫匁分
土豪小嶺善右衛門が代官浅井氏に納める
- ・堀之内村 寛永元年（1624）永四百文 わたにて納め
此のわた五百八十匁
- ・岸村 享保3年（1718） 真綿一貫百六十九匁 年々差上申しあげ候

東大和市域では、延宝7年（1679）の宅部、清水村の年貢納表に「わた」を納めた記録があり、年貢として「わた」が徴収されていたことがわかります。この時の年貢の納め方は7月10日に米の年貢相当を金納し、10月16日に「わた」と「そば」を納めています。

ただし、現在の福生市の「五の神村明細帳」には『木綿作り申さず候』とあり、福生地方では木綿が作られなかったようです。武蔵村山市、東大和市域の村々の明細帳には「綿作」の記録が見あたりません。こうしてみると「わた」は繭からの真綿であることも考えられます。それが天然繭か養蚕かは不明です。

一方で、福生の機織りには足立郡地方の産地から原料が運ばれたようであり、入間川沿いには、綿花栽培地域があったとされます。武蔵村山市、東大和市域の村々には原産地からの原料運搬の記録がないところから、狭山丘陵周辺でも丘陵部を利用して木綿の栽培が進んでいたのかも知れません。

◎蔵敷村の例として「安政3年（1856）武州所沢組合村々地頭姓名其他書上帳」があります。

所沢の市 六歳 三八の日

米穀雑類、木綿縞、苗木類、小麦粉、独活根、薩摩芋、里芋、栗、柿、前裁、青物、種物、藁縄、踏草鞋 等重（＝主）ニ出申候

蔵敷村 55軒 男 131 女 143

男女 農間稼 男は樵炭焼 女は木綿糸撚り 同機織

江戸並ニ最寄市場江持出稼仕候

（里正日誌 7 p136）

とあり、「女は木綿糸撚り 同機織」と明記して、木綿糸を撚っていることがわかります。「わた」は衣類とともに寝具としての需要が高かったことがうかがえ、農民の日常生活でも貴重品で、綿は主に衣服となったようです。農民の布団の詰物には、麻皮や芋屑などが用いられたとされます。

③養蚕

よもやまばなしの主人公達が、農業の合間に身を削って従事した養蚕が、いつこの村々に入ってきたのか、その経過ははっきりしません。所沢市史では次のように伝えます。

『江戸時代後半期、とりわけ一八〇〇年代に入ると、いわゆる江戸地廻りの経済圏が成立し、入間

川沿いは埼玉西南部の有力な綿花栽培地域として発達してくる。伝統的な産地の青梅に対して、この流域は農家の副業経営を主体とした新興綿織物生産地として発展してきた。

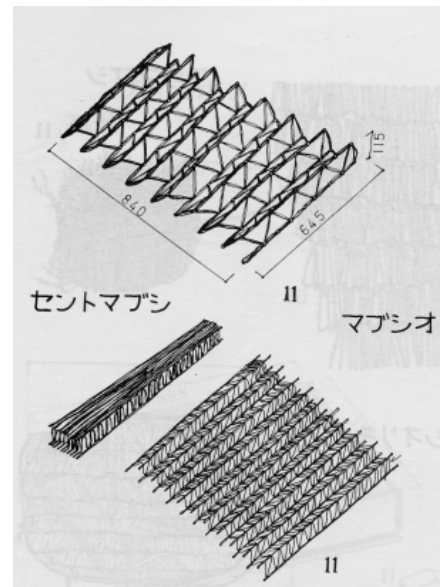
江戸時代末期になり、こうした農家副業として生産された綿織物は、所沢織物市場に集荷され買継商によって取り引きされた。この所沢の織物市場の活況は、綿織生産を一層発展させる契機ともなったのである。

こうして入間郡は機業地として発展し、明治初期には県内足立郡と並ぶ生産量を誇った。ここでの綿織品は、縞木綿と緋木綿が代表的な製品であったが、やがて脚光を浴びてきたのが絹綿交織といわれる絹と綿を織り混ぜた製品である。

明治十六、七年頃には瓦斯縞といわれ広く知られるようになった。所沢の商人層の活動もこうした絹綿交織物や木綿製品の商品開発と結びついて活発化し、その中から有力な糸商や買継商が台頭してくる。明治三十年代、絹綿交織物と綿織物の発展は著しく、特に絹綿交織物は県下きっての機業地として確立する。所沢の商人層も、狭山丘陵の山麓諸村だけでなく、入間川沿いの機業地にも集荷基盤を拡大していった。』
(所沢市史 下 p 352)

所沢市史が伝えるように、入間郡一帯に機織り産業が起った頃、東大和の村々にも同じ状況が生まれました。

その大きな理由は、**農業経営の中の換金生産物 商品生産化**が江戸の膨張発展と共に、周辺の村々に瞬く間に広がってきて、東大和市域の村々もこの影響下に入ったことが考えられます。「農間稼」がないと種籾や肥料が買えず、一種の危険な賭であつても、受け入れざるを得ない状況になったのでしよう。



繭を作るためのマブシ

④養蚕の作業工程

蚕を育てて繭にするまでの行程は農業の合間をびっしりと埋めます。

一月、山林の落葉(ナラ・クヌギ・マツ)を運び、風呂湯をかけて腐らせる。

二月、堆肥の切りかえし。人糞をかけて積み込む。反当り三〇〇～三五〇貫目桑畑に入れる。

三月、中旬に春蚕用二〇本ほどを残し、他は秋蚕用に枝条切り取る。

四月、中旬に夏草取りにそなえて、桑の根本に盛土する。

五月、春蚕掃立は八日頃が目標。晩霜などの年は数日遅れ。桑園の除草をする。

六月、掃立後三五日位で上簇。簇はワラを折ったものを、平らな竹箆のようなものに細縄でつける。七日目に収穫する。

七月、中旬に初秋蚕掃立。気温が高いので、二一日～二二日で上簇する。給桑は忙しい。桑園二回除草。

八月、桑園施肥。

九月、三日頃初蚕掃立。二八～三〇日で上簇。

一十月、中旬から下旬にかけて、寒さから桑の木を守るため中耕し、根の土をウネの間にもりあげる。

相当にキツイ作業の連続であったことがわかります。

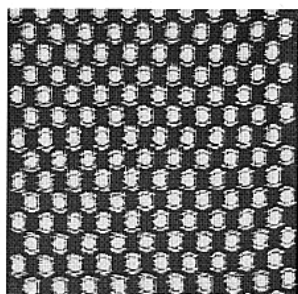
⑤それでも賃仕事をしなければならなかった

現金収入を得るため、桑畑が一举に増加しました。桑苗を栽培することから、穀類の生産が減る状況を来し、幕府は、元治元年(1864)、「田方え桑を植付けてはならない」旨の廻状を出しています。この状況を村山町史は次のように伝えます。

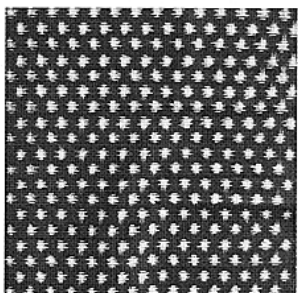
『このように夫食のための穀類の生産を犠牲にしてまで養蚕に力を入れてきたのは、農民が最も直接的な商品生産に参加できたこと、雑穀の多肥多労働に比して、一時的には多忙を極め食事の暇もない程の重労働になっても比較的短期間で片がつくこと、桑樹が丘陵地帯のような痩地であっても少量の肥料で栽培でき、肥料購入のための現金支出がおさえられたこと、さらには蚕糞が換金作物に変わる重要な肥料になったことがあげられる。かくて安政6年(1859)の書上帳によれば、繭

六百枚	三ツ木村	両組分
百枚	横田村	
千式百四拾六枚	中藤三組	

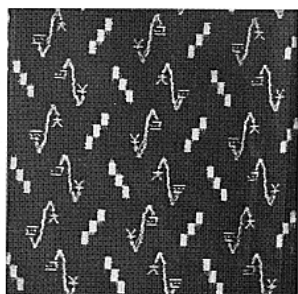
となっており、岸村の数字は明らかでないが養蚕だけでこれだけの数にのぼっている。養蚕と生糸とは安政5年(1858)の外国との通商条約の締結によって急激に伸展し、そのあおりを受けて村山郷の養蚕業は幕末から明治にかけて盛んになっていった。



明治中期製作(写真I-65)



明治後期製作(写真I-66)



大正初期製作(写真I-67)
(村山織物協同組合所蔵)

江戸時代においては繭のまま売ることが、糸にするより有益であつたらしく、まして一般農家の農間稼ぎとしては養蚕以上に出ることは困難であり、僅かに玉繭、屑繭で自家用の生糸をとる程度であつた。しかし中藤村の渡辺源蔵家においては内野佐兵衛家と共に、名主という村役人であるとともに養蚕、製糸を兼業し、企業家的発展を続けていたのである。

雑穀生産の上に、肥料、米雑穀商、酒醸造家として立っていた中藤の文右衛門家は、油絞りから質屋まで兼ねて寛政から文化文政期にかけて村内最高の土地所有老であったが、繭、生糸という新しい商品の企業に当った渡辺、内野両家が、幕末に飛躍的發展をしたにもかかわらず、文右衛門家は幕末には土地所有高も三分の一に減り、稠落の秋を迎えている。これは村山郷の商品生産の基盤の変化のなせる業で、時の流れともいふべきものである。』

⑥村山紼

村山紼の特徴は「先染め」や「経緯紼」にあります。武蔵村山市史民俗編(p223~224)から引用します。

『村山で織られていた織物は、あらかじめ染めあげた糸を用いて柄を織り出す「先染め」という染色方法で、反物にしてから染める後染めと比べると、柄の仕上がりの方がより鮮明に出るという特徴がある。

明治期まで紼を「飛白」とも書いたというが、その文字のとおり、糸を括った部分を白く染めぬいた柄が、藍染めの紺地の中にやわらかく浮き出ている、すがすがしい。

村山紼の誕生にまつわる諸説のように、当初の紼は「十の字」や「井の字」のような単純なものであった。その後、さまざまな柄行きが研究され、二の字、三よろけ、四菱、丸菱、浪など、次第に細かい小中柄へと発展し、織り幅に一〇~二〇の紼柄を織り出せるようになった。村山の場合は、経緯の両方の糸を染めぬく「経緯紼」である。

更に慶応三年(一八六七)には、大和国八木町(現奈良県橿原市八木町)出身の高塚佐吉が、入間郡荒幡村(現所沢市)の内野徳左衛門の家に滞在中に経模様機台を作り、家人に絵絣を伝習した。これが大絣のはじまりで、所沢絣の柄行きの発達にも大きな影響を与えていった。』

よもやまばなし「30 機場あそび (66)」は機織娘のところへ通ってくる若者の話です。「20 愛染様 (43)」は東大和市内にあった染色業の精進の話です。

⑥機織りうた

眠気さましに、疲れ取りに織り子と若者が一緒にうたったそうです。

来るか来るかとハタ音やめて
ケン縄詰めたり弛めたり
来てはひやかす数の子野郎
どこの鯨のたまごやら
抱いて寝てさえ寒がるあなた
今朝の寒さに帰さりよか
かどへ立たせて置く身の辛さ
主人寝かし出るつらさ
惚れちゃおれどもまだ先きさまの
心知らなきや話せない

(大和町狭山 町田染次郎氏 明治十四年生)

村山づくし(久米川→箱根ヶ崎)

花のサアエー みさいの書いたる文は
よくも書いたよ皆村づくし
ちょいと一筆久米川いたし
野口くちぐち言わりよとままよ
わしとお前は回田縁で
清水らしよさや宅部の谷で
うちの内堀 二親様に
後ヶ谷戸で意見をされて
高木お前に会いたさままよ
どうか蔵敷そいたいものよ
恋の芋窪 ただうかうかと
固い約束 石川村よ
うちの中藤で待ちうけます
神明ヶ谷戸の神明様へ
願をたたんで両手を合せ
わしの胸腹 原山向いて
萩の尾前にて相談いたし
山王前にて 文認めて
横田横田と 人にはいわれ
馬場思うて 病気となりて
二丁や三丁の 三ツ木を越えて
岸や小ヶ谷戸 殿ヶ谷戸まで
主と添うなら 石畑縁で
あだな箱根で 添わなきやおかぬ
ヤンレー
(村山町史 p 6 3 7 ~ 6 4 0)

(箱根ヶ崎→久米川)

花のサーエー 村山恋路にたとえ
忍ぶ恋路は 箱根も深き
固いお前が 石畑なら
ここに美し 殿ヶ谷あれば
浮気やしませぬ もうこれ岸よ
二丁や三丁の三ツ木を越えて
馬場おいでよ 待ちうけました
赤堀うちから 見そめたお前
主に一日 遇はないければ
三月四月も 遇はない横田
思ふ話は 萩の尾までも
たとえ野の末 あの原山で
竹の柱や よしずのかこい
どんな暮しを しょうとままよ
うしろ屏風に 内中藤でも
花の芋窪 ただうかうかと
恋し石川 山々越えて
とても蔵敷 添うこたできぬ
ままに奈良橋 そのままおかぬ
知らぬ高木で 添いとげましよう
花の狭山で 心を定め
夫婦さかずきや 清水でいたし
めぐり回田 世間をわたり
ちょいと久米川 二瀬川渡る
ヤンレー

⑦自由業

55 こぜさん (121) 71 つつじの頃 (154)

よもやまばなし「55 こぜさん (121)」は、春先、このような農作業や機織りで忙しく過ごす村人のもとへ、三味線を弾きながら歌を口ずさんで訪ねて来るのでした。71 つつじの頃 (154) は大正の頃の話としていますが、みつくりの人が奈良橋の諏訪山や芋窪のおくまん山で作業をするのでした。

(3) 農間稼のうまかせぎ

50 火をふところに入れた法印さん (111)

清水村の修験・持宝院 (持寶院) は正月、淀橋まで馬に炭を付けて出かけます。成子坂の馬宿で因縁を付けてきた男が差し出す真っ赤におこった炭火を半紙に包んで、ゆうゆうと懐に入れます。今度はお前さんもと、持宝院が炭火を男に差し出すと、目を白黒させて退散します。江戸時代末期の話です。当時、狭山丘陵周辺の村々で、現金収入を得るために、何らかの形で農民が携わった「農間稼ぎ」での一齣です。

第1編で紹介した新編武蔵風土記稿には、(イ)に記した養蚕、木綿織り以外に

- ・清水村 男女耕作をなせる暇には、男は薪をとり
- ・後ヶ谷村 耕作の暇には薪を伐りて江戸へおくり、

と、耕作の合間に「薪をとり」「江戸へおくり」などの仕事をしていることが記されています。江戸時代は原則的に自給自足、農業専一の世界でしたが、薪炭切り出し、江戸おくり、養蚕、木綿織りなどの余業は黙認 (一時は制限あり) されていました。これを「農間余業」「農間渡世」「農間稼」と云います。

①自給自足と江戸地回り経済

幕府は寛永 20 年 (1643)、「田畑永代売買禁止令」を出して、農民が耕作する田や畑の売り買いを禁止しました。年貢を納める自立農民の確保が幕府成立の基盤であったからです。農民は自給自足で生活を営み、年貢を納める立場にありました。

しかし、江戸中期になると、耕地の質入れや小作関係が生じてきます。これは、統制が崩れたと云うよりは、貨幣経済が農村に浸透してきて、幕府もその容認なくしては、幕藩体制の維持が困難になってきたことからでした。

狭山丘陵周辺の村々でその様子を見ると

- ・家康が江戸に入った頃は、江戸市中で消費する物資は主に関西から運ばれていました。
 - ・江戸の整備が進み人口が増加してくると、現在の区部にあった農村が江戸の需要を賄うようになりました。
 - ・やがて、それだけでは不足を来し、江戸市中を取り囲む一帯に需要が伸びました。
 - ・特に、多摩地方では、生産する米の質が悪く、年貢が金納でした。
 - ・生産をより増やすため、肥料の購入が行われました。生産性が高まりました。
 - ・年貢率がある程度低下したこともあって、農民の手元にわずかですが作徳が残されてきました。
 - ・年貢の金納、肥料の購入は貨幣経済の浸透を早め、質地、小作が生まれてきました。
 - ・一般的な農民は農業を継続する上からも、現金収入が必要になってきました。
- これを江戸地回り経済と呼んでいます。自給自足の建前の中の貨幣経済です。

②自給自足の中での現金獲得

東大和市域の村々では、農産物以外に現金を得るために様々なことが行われました。

- ・自ら炭を焼き、薪を伐って江戸に売りに行く、
- ・青梅や飯能、五日市、八王子などへ炭・薪を買いに行き、それを江戸へ売りに行く
- ・蚕を飼って繭を売る
- ・糸を紡ぎ木綿織りをする
- ・それができない農民は縄をない、ムシロや草鞋をつくって売りました。

こうして、駄賃稼ぎ・農間稼ぎが発生し定着しました。「火をふところに入れた法印さん」の持宝院は学問でも名高い修験です。その法印さんが農間稼ぎをしているところに、この話の深さがあります。

③夜四つ（午後１１時）立ち

江戸市中への農間稼ぎは、厳しいものでした。幕末に近い、文久３年（１８６３）、後ヶ谷村明細帳はその実態を次のように記しています。

『馬持ち百姓は柴山に出て薪や炭をつくり、あるいは青梅・飯能・五日市・八王子などで炭薪を買い入れ、馬附けに致し、夜四つ頃から江戸に出かけ、朝方、お屋敷様へ納めて、その日の内に立ち戻って、夜五つ前後に帰ってくる』

- ・その日か前日 青梅・飯能・五日市・八王子などで炭薪を買い入れ
- ・夜四つ（午後１１時）に出発し、江戸街道（現青梅街道）を夜通し歩いて新宿を経て
- ・朝方 外桜田にある曾我又兵衛宅に着き、炭薪を納める
- ・同じ道を引き返し、夜五つ（午後八時）に帰宅

「お江戸日本橋七つ立ち」の旅立ちは午前４時に当たります。稼ぎの場合は夜中の出立ちでした。

⑤天保の飢饉のかげで敵討ち

96 かたき討の話（209）

『蔵敷の塚前墓地の入口に一基の妙典供養塔があります。この石塔は六十年ぐらい昔は山王様に近い駐車場の附近にあって、近くの子供たちが遊ぶ時いつも見たものでした。・・・』

石塔は天保９年（１８３８）９月１７日、肥後国（熊本県）の丈助という人が助太刀の人と共に、討った人の供養のために建てたということが、その銘から判ります。』



塚前墓地の六地藏左側端下角に妙典供養塔はあります。小さくて見落としがちです。

よもやまばなし「96 かたき討の話（209）」はこのように切り出します。天保９年（１８３８）、この年は、大飢饉の年でした。

天保の飢饉

天保年間には飢饉の年間と云われるくらい飢饉が続きました。天保４年（１８３３）は冷害が発生し、台風の影響もあり大凶作となりました。天保の飢饉の始まりです。米価が高騰し、窮民が発生します。

蔵敷村では天保５年（１８３４）３月、名主などが大麦２４俵を窮民に施穀しました。７月には幕府の貯穀を借りて、麦、ヒエなどを分配しました。幕府も蔵米の放出をしますが、効果が出ませんでした。

いつものことですが、米買い占めが行われ、対する一揆、打ち壊しが発生します。この状況は継続し、ついに、天保７年（１８３６）１１月、狭山丘陵の村々に打ち壊しの張札が出されました。

張札騒動

天保の張札騒動と呼ばれますが、東大和市史は次のように記しています。

『天保七年十月狭山丘陵の村むらの辻や高札場に、打ちこわしの貼札が出された。その対象とされたのは米雑穀の。買い占めを行っている在郷商人四人で、具体的には青梅の吉野屋、所沢のあわ屋扇、町屋(入間市)の下倉、梶谷の縞屋である。

この騒動は関東取締出役が察知して組合村役人を出動させて未然に防いだため実害もなく、捕られた者もいなかった。』(p 206～206)

この騒動は幕府も重視し、関東取締役出役から廻状が組合村にまわされました。武蔵村山市史から引用します。

- ①米商い渡世以外の者が米商いを始めようとしたらやめさせる。
- ②家内人数分、困窮民の救い米分とも、正しい石数を書きあげること。
- ③自己の利欲のために米を囲い持ったり、米を買い占める者のなかには、領主や地頭の指図だからと偽っている者がいると聞くが、そのようなときは奉行所へ申し立てること。
- ④勝手に濁り酒を造って商売している者がいたら申しでること。
- ⑤当節、困窮民の救済などをする奇特者がいるか、よく調べること。
- ⑥衣食住とも華美に慣れず、農作業に精をだすよう、村役人はよく教え諭すこと。
- ⑦悪党者には荷担せず、徒党を企てる者など名前がわかれば、村役人ではなくとも、早々に訴えでること。

また、近年村方では、五人組帳前書の条文をいつしか忘れ、農作業を怠り、衣食に奢り、不作の年には減免や夫食拝借を願い出、そのうえ年貢金上納も遅れる有様で、これらは結局村役人の教諭が不行届き故のことである。(武蔵村山市史上 p 1121)

いかにも当時の幕府らしいですが、このようなことではどうい事態は改善されず、遂に飢える人が続出します。東大和市史はその状況を次の表で示します。(p 205)

表7 天保8年 飢人一覧(蔵敷組合)

村名	石高	家数	人別	村役人 富裕者	飢人	飢人率
奈良橋	132石9293	58	318	51	257	80.8%
高 木	109石508	29	168	30	138	82.1%
後ヶ谷	203石	85	248	51	198	79.8%
蔵 敷	215石7454	51	246	50	196	79.7%
廻り田	—	62	288	58	230	79.8%
宅 部	—	36	166	35	131	78.9%
合計	661石1827	321	1434	275	1150	80.2%

(『天保里正日誌』 合計と飢人率は筆者加筆・内野家文書)

市史でも付記するとおり、村役人・富裕者と飢人を合計すると人数が合わない場合がありますが、飢人率が80%近いという厳しい状況を知ることができます。